

ISSN 2189-3268

大学連携会議「学輪 IIDA」

機関誌 「学輪」

第11号 2023

飯田市

大学連携会議「学輪IIDA」
機関誌「学輪」
第11号 2023

1 機関誌「学輪」（第11号）発刊にあたり

飯田市長 佐藤 健 P. 3

2 学輪IIDAの取組

大学連携会議「学輪IIDA」全体会（公開セッション） P. 5

風越のまち飯田から世界へ広がる知の渦列をどのように創りうるか

～飯田は、リニアが運ぶ知の風とこの地で育んできた知の風を渦列に変えて、
世界に発信する都市となれるか考えてみよう～

【コーディネーター】

信州大学 特任教授 中嶋 聞 多

【パネリスト】

東京藝術大学 名誉教授 北川原 温

信州大学学術研究・産学官連携推進機構

教授 副学長 林 靖 人

和歌山大学観光学部 教授 大浦 由 美

南信州観光公社インバウンドマーケティングオフィサー／日本学博士

ダニエル クレマス

3 論文

飯田市在住高齢者における趣味の会参加の経年変化とフレイル発症との関連 P. 17

－2018年-2019年縦断研究－

日本福祉大学社会福祉学部 宮 國 康 弘

4 調査報告

学輪IIDA共通カリキュラムフィールドスタディ参加者にみる P. 23

「関係人口・還流人口」創出効果に関する一考察

和歌山県紀美野町・地域おこし協力隊 藤 井 優 希

追手門学院大学地域創造学部 藤 田 武 弘

5 講演記録

三遠南信の歴史資源－リブランディングに向けたいくつかの提言 P. 37

法政大学国際文化学部 教授 高 柳 俊 男

6 大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

P. 48



機関誌「学輪」(第11号) 発刊にあたって



飯田市長 佐藤 健

学輪IIDAは、4年制大学を有しない「飯田」を起点として大学研究者同士が相互につながり、専門的な知見や外部の視点を生かしたモデル的な研究や取組を地域とともに行う有機的なネットワーク組織として、平成23年1月に設立されました。

機関誌「学輪」は、学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」の実現に向けた取組の一つとして、飯田において展開される大学関係者の教育・研究・調査活動等の実績を蓄積・発信することで、学輪IIDAの学術研究機能の向上と、大学の専門性を生かした取組をより多くの皆さんに知っていただくことを目的として発行しています。

第11号の発刊に際して、編集委員及び編集局を担っていただいている先生方、今号に飯田での研究や取り組みの成果を投稿いただいた皆様など、多くの関係者の皆様のご協力に対し深く感謝申し上げます。

さて、設立時に19大学43名のメンバーで始まった学輪IIDAは、飯田に興味・関心を寄せる全国の大学研究者の皆さんと出会い、つながることで学際的なネットワークを広げ、現在は76の大学・高等教育機関、研究機関に所属する146名の方にご参加いただいています。

ネットワークの充実とともにメンバーの皆さんの飯田への関わりもより深く、多様になっており、調査研究のフィールドとして毎年多くの大学生や研究者に飯田を訪れていただいていることに加えて、メンバー同士が大学を超えてつながる複数のプロジェクト活動が展開され、大学と地元の研究者が連携して市民の学びの場をつくる「飯田学輪大学」の通年開催の試み、大学の学びを生かした地元高校生が参加するフィールドスタディや高校での講義の実施、遠山郷におけるESDの視点を持った教育・地域づくりへの関わりなど、市民とのつながりを大切にした取組を行っていただいています。

現在、日本の社会は人口減少・少子高齢化の中で、特に地方において持続可能な地域づくりや地域コミュニティの変容などが課題となっていますが、当市ではそれら課題への対応に加えて、リニア中央新幹線や三遠南信自動車道の開通を見据えた取組、環境文化都市の推進に向けた水素の利活用やゼロカーボンの取組、ムトスや結いの精神を基盤とする市民の学びの充実など、将来を見据えつつも、飯田らしさを大切にしまちづくりを進めていきたいと考えています。

学輪IIDAのネットワークの総合的な知と地域に蓄積されてきた知の交流により、これからの地方都市のモデルとなるような「飯田」を実現していくことができますよう、関係者の皆様の引き続きのお力添えをよろしくお願いいたします。



令和4年度 大学連携会議「学輪IIDA」全体会 公開セッション

令和5年1月21日(土)

ムトスぶらざ2階多目的ホール 及び YouTube LIVE配信

風越のまち飯田から世界へ広がる 知の渦列をどのように創りうるか

～飯田は、リニアが運ぶ知の風とこの地で育んできた知の風を
渦列に変えて、世界に発信する都市となれるか考えてみよう～

公開セッション

○司会

それではこれよりパネルディスカッションを開催いたします。テーマは「風越のまち飯田から世界へ広がる知の渦列をどのように創りうるか」でございます。

パネルディスカッションのコーディネーターおよびパネリストとして5名の方にお集まりいただきましたのでご紹介させていただきます。コーディネーターをお務めいただきますのは、信州大学特任教授の中嶋聞多先生です。

パネリストをご紹介します。東京芸術大学名誉教授北川原温先生、信州大学副学長林靖人先生、和歌山大学教授大浦由美先生、南信州観光公社ダニエル・クレマス様です。北川原先生と林先生には、オンラインにてご登壇していただきます。

それでは、中嶋先生よりご進行をお願いいたします。



○中嶋聞多氏(信州大学)

皆様ようこそムトスぶらざへお越しになりました。

冒頭で観ていただいた映像の種明かしをしますと、今回のパネルディスカッションのコーディネーターを引き受け

るにあたって「知の交流」というテーマをいただき、その時に頭に浮かんだのがあの映像でした。

ご覧いただいたのは、発見者の名前をとってカルマン渦列と呼ばれている現象で、川とか空気のような流体が抵抗物にぶつかる、そこで流れが二股に分かれて渦を形成するという、実は日常的に子供たちでもよく目にする現象です。



僕は、映像の中に出てくる渦が知を表していて、それが障害物に当たったところから渦をまきながらいくつもいくつも列になって生まれてくるというイメージを思い浮かべました。ご覧になられるとわかるように、生まれてくる渦は対称ではなく、そして左右の渦は逆回転になっているなど、とても示唆に富むイメージだと思ひまして、今日のパネルディスカッションもそういう時間を作れたらいいなと思いますし、学輪IIDAもそういう形になっていかないかなというのが、私が考えたイメージです。本日はそこを深めていきたいと思ひます。

私のイメージでは、90分を前半と後半に分け、前半の一時間はパネリストの方と一緒に三つのテーマで議論をしてみたいと思ひます。後半はぜひ、会場の皆様からどんどんとご意見やご質問をしていただきながら、この会場全体が渦列のようにしていくのが理想かなと思ひます。

一つ目のテーマは「リニア中央新幹線がもたらすインパクト」です。ただし、非常に広範囲な話になると思うので、

少し焦点を絞ってお聞きしていきたいと思います。この点について、まず、リニア中央新幹線の駅前広場の開発に携わっていらっしゃる北川原先生に最初の口火を切っていたきたいと思います。



○北川原温氏（東京藝術大学）

よろしくお願ひします。今日はリモートでの参加になり申し訳ありません。

今、中嶋先生からお話がありましたリニアの件をお話する前に、先程のカルマン渦列について、非常に示唆に本當に富んでいて良いなあと思いました。いろんなことがメージできました。

映像を見ると、いろんな渦ができていっていますよね。あれがもっとスローモーションで再生されると、新しい何か時間がかけて醸成されてできていくような印象を受けます。飯田は今までゆったりとした時間の流れの中にあつたわけですが、これからリニアのようないろんなインパクトが入ってきたときに元々飯田にあるものと出合つて、新しい何か一つ二つじゃなくたくさん生まれていくようなイメージを持ちました。海に例えれば、海の中にいろんな島が浮かんでいて、それぞれが独特の文化を持っているイメージを昔から抱いていましたが、それが更に未来に向かつて、更に何か新しいものが生まれていく感じがしてとても印象的でした。

さて、リニアに関しまして、画像を出しながら簡単に一言二言ずつ説明をしていきたいと思ひます。



これは先日の市民説明会にて、飯田市が発表したリニア駅前広場全体の俯瞰図です。全体っていうのは、中央に横

たわる中央の新幹線の駅とその周辺の駐車場や交通機能を含めた約6.5haの複合的な広場の姿です。周りには幹線道路があり、こうした工事も始まると思ひます。

リニア中央新幹線の周辺整備を行うにあつて、飯田市がデザイン会議を主催してられました。数年間に渡つて専門家のみなさんや地元の市民のみなさんが大勢で議論を繰り返してきて、その成果のひとつとしてデザインノートというものが飯田市から出されております。これは紙ベースのほかに、ホームページ等で電子ベースでも公表されております。

この駅前広場のコンセプトは、一言で言うところ「結いの広場」ということになっております。時を結う、風景を結う、暮らしを結う、人々を結う、地域を結う。他にも色々な結びつきが生まれていくということも含めて、そこから未来が見えてくるということだと思ひます。

このデザイン会議では、都市計画の専門家である小澤一郎先生が取りまとめ役として会長をお勤めになっておられます。そして、当時副市長であつた佐藤市長も、副会長をお勤めになられておられました。

ここからは、ちょっと具体的な絵をざつとお見せします。まず、リニア中央新幹線に乗ってきた人が駅で降りると目にするコンコースのイメージです。全体に地元の森の木を使ったイメージになっており、奥の方にブックカフェやインフォメーション、トイレなどが集まっています。もしかしたらここに学輪IIDAなんかサテライトのようなものがあるといいなと勝手に思っています。このコンコースのイメージも飯田市がホームページで発表していますので、既にご覧になられている方もいると思ひます。

次の絵は、通路を通つて北側の広場に出たところのイメージです。手前が広場で、ずっと遠くに河岸段丘があつて、その向こうに木曾山脈が見えます。木で作られた屋根のようなキャノピーが点在していて、この下で色々な催し物をやつたり、バスやタクシーを乗り換える時に雨に濡れないで乗り換えられたりするという役割を持っています。

次は、北側の広場に出て振り返り、駅の方を見たイメージです。中央のコンコースの向こうに、南側の広場がずっと続いていくのが見えると思ひます。駅舎は現在JR東海さんが設計中で、まだどういふ風になるかわかりませんが、できるだけ優しいといひますか、飯田の風景、田園の風景にマッチするようなものを考えていただけるよう飯田市が協議をされています。

駅周辺にはいくつかの広場があります。この地域には人形劇の伝統をはじめ様々な民俗芸能がたくさんありますから、そうした芸能がこの広場に出張してきて発信をすることで、実際にそこから現地に行つてみようとなるかもしれません。私も12月に初めて遠山郷へ行つて霜月祭りを見て本當に感動したんですけども、ぜひ飯田のそうした歴史・

文化が見える形となってこの駅前広場に出てくると、それを本格的に見たいということで各地域に足を運ぶきっかけになるといいな、という意見もたくさん出ております。また、市民のみなさんがこの広場でマーケットを開いたり、遠くに風越山を望みながら、子ども達を対象とした木育としてオープンスペースを教育活動なんかに使ったりすることも考えられます。

○中嶋聞多氏（信州大学）

ありがとうございます。この計画をご存じの方も多いと思いますが、全体的な印象として、交流の場を作りたいという先生の思いがよく伝わってきます。飯田市の計画の中にある三重心でも、この新駅周辺を交流の場所と位置付けてらっしゃるんですね。そのためにコンコースをはじめ、ここに人が集まってくるような場合にすることを目指しているというのが一つ。二つ目として私が感じるのは、オープンエリアであるということです。閉ざされた空間ではないということに交流の場を作っていくというコンセプトであると理解しています。

北川原先生が遠慮しながらちらっとおっしゃっていましたが、例えばこの場に学輪IIDAのサテライトのような何らかの場所があると、それがますます人を呼び寄せて知の拠点になっていくというイメージもあっていいんじゃないかということ、先生は考えておられるのですね。

○北川原温氏（東京藝術大学）

はい。ここには1,000人から5,000人くらい集まれる広場もあるので、できればそういったオープンエアな空間を活用して太陽の下でシンポジウムなんかをやったり、コンサートやったり、学輪IIDAが中心になっていろんな文化の渦をここから生んでくれたらいいな、と勝手に思っております。

○中嶋聞多氏（信州大学）

はい、この点については後半でぜひ会場の皆さんのご意見を伺いたいと思いますが、大浦先生は観光がご専門ということですので、今のようなイメージをご覧になられてどう感じられますか。



○大浦由美氏（和歌山大学）

和歌山大学の大浦でございます。このリニア中央新幹線につきましては、実は私も当初から複雑な気分を持っておりまして、飛躍的に時間的距離が短縮されるということは良いことばかりではなく、いろんな課題を持ち込むであろうなと感じています。しかしながら、やはり飯田市の素晴らしいところは、10年以上前からそのことを見越して、どうすればいいのかということを各地域で非常に考えてこられたということだと思っております。

その中で、特にコロナ前後でこの社会の情勢が非常に大きく変わってきましたし、また、その変化を加速させてきたと思います。例えば、我々の社会はものづくり型の社会から知識社会に入ってきていて、労働の在り方が非常に大きく変化してきています。それから、課題が非常に複雑化していますので、学際性や協働など色んな連帯が非常に必要になってきています。何よりも今までの経済の在り方が限界を迎えてきており、いわゆる経済効率性や競争を重視した経済が成り立たなくなっています。そこにおけるリニア中央新幹線開通のメリットは、これまでのような経済としての経済圏ではなく、もっと共感によって結ばれるような、連帯的な経済の在り方として目指されるべきだと私は感じております。

その意味で、今お話にあったオープンスペースで人々が行きかって交流し、子育て世代をはじめ色んな立場のみなさんがあの場集えるというコンセプトというのは非常にいいと思います。それから、最近の観光映像などをご覧になった方はお気づきかと思いますが、観光の世界でも名所を紹介したり美味しいものを紹介したりするというのもう時代遅れになってしまっていて、今はその地域が何を大事にしてきたのかというコンセプトが、非常に美しい景色などをバックにもっと強く押し出されるようになっております。この駅周辺についても、やはり飯田の入り口として、そのような場所になるといいと思いますし、今のコンセプトに非常にユニークなものがあると思えました。

○中嶋聞多氏（信州大学）

はい、ありがとうございます。では、二つ目の話題に入りたいと思います。テーマは「高等教育機関と学輪IIDA」です。本日は信州大学副学長の林先生にご登壇いただいておりますので、まずは高等教育機関という一般論的な部分と学輪IIDAとの関わりについてコメントいただければと思っています。

高等教育機関の代表のひとつとして大学というものがあるわけですが、その大学の在り方、日本の大学の在り方については、大学の先生方が痛感されていると思います。私は今が少し変わり目じゃないかなと思っていて、旧モデルの限界みたいなものがあるのではないかなと思うんです。それで、学輪IIDAはそれを突破する糸口になり得ると思っ

ているので、その辺りについて、林先生のお考えを話しいただければと思います。



○林靖人氏（信州大学）

こんにちは。信州大学の林と申します。今、中嶋先生から頂いたテーマについて、私からも少し簡単にみなさんに投げかけをさせて頂きたいと思います。アカデミアというものは元々、社会の謎や不思議、あるいは問題を解決するために生まれてきたと私は感じているんですが、大学も色々進化する中で、国としてはここ数年、大学の機能を研究、教育、社会貢献という三つの言葉で分けて説明しています。

ただ、私は社会貢献という言い方はあまり好きではありません。なぜかと言うと、貢献というのは要するに自分の外にあるものに対してやるスタンスになってしまうので、それってどうもおかしいなと思っています。結構前の話ですが、アメリカの公立大学や州立大学が、そういうやり方でいいんだろうかと投げかけたことがあって、その時にエンゲージド・ユニバーシティという言葉、概念が生まれました。

それでどうなったかと言うと、そもそも地域社会を大学の外に置くのではなく、真ん中に置くようになりました。特に我々のような地方にある国立大学はそれが当たり前状態だと思うんですけども、地域社会があって、そこで起きている問題やリアルな存在が我々の学びの源泉になる。ですので、私たちは大学は外にある存在とか地域社会と分かれた存在ではなく、そもそも地域とつながっていることがまず前提にならなきゃいけないんじゃないかと思っています。

地域社会とつながることによって地域の中に入っていけるので、そこでリアルな現実問題やあるいは見たこともないようなことに気づいてしまうということ、つまり発見するという行為が、実は我々にとっての研究そのものであると思っています。研究もやはりフィールドがなければ上手くないかと思っていますので、研究を通して地域社会の皆様方との更なる学びの場が作られていくということになります。ですから、学びの場というのは大学のキャンパ

スだけではなく、実はその地域社会の中にこそ発生すると思っています。この輪ができることによって大学と地域がつながっている状態というのが生み出されるのではないかと思いますし、この学輪IIDAはまさしくそのエンゲージド・ユニバーシティを体現するために必要な仕組みだと私は感じています。

先ほどの話にもありましたように、これがリニア中央新幹線によってエリアを越えてさらに拡大できるということに私は期待しておりまして、今日皆様とお話をすることを楽しみに参りました。私からはまず、これを大事な観点として皆様方に提案したいとお話させていただきました。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。先に地域との繋がりがあって、そこから大学あるいは高等教育機関が出来ていくという考え方だと思います。エンゲージドっていう横文字には、例えばエンゲージリングのように婚約というような意味もあると思いますが、その繋がりの部分をどう作っていくかという点において、実はもう飯田は学輪IIDAで先行していますよってお話と理解しましたが、そういうことでよろしいでしょうか。

○林靖人氏（信州大学）

そうですね、今、中嶋先生に言っていたいただいたことを少し補完すると、これも横文字ですがリレーションシップとかパートナーシップとか色んな英単語の中でこのエンゲージという言葉がすごく好きなんです。先ほど先生が言っていたようにエンゲージという言葉ある種の契約だったりもしますが、堅苦しい契約ではなく心の繋がりのようなものだと思っていて、こういったものができることによってこそ、地域が成り立っていくと思っております。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。クレマスさんは、今の林先生のお話についてなにかコメントやお感じになられたことがありますでしょうか。



○ダニエル・クレマス氏（南信州観光公社）

本当にその通りだと思います。大学は知識とか技術を学

ぶだけではなく地域社会の一部として考えて良いと思います。学生と地元の人の心をつなぐ・つながるといふ表現はとて素敵だと思ひます。私が所属する南信州観光公社ではインバウンド観光推進の取組が行われていますが、外国人観光客に限らず、このエリアについてもっと世界に知って欲しいと思ひていますし、そのためにも情報発信はとて大切です。

今後は、情報発信のデジタル化と多言語化に取り組みたいと思ひています。外国人だけではなく日本人の若者や学生にとっても、飯田市の多様性や歴史は多分分かりにくいと思ひます。飯田に関するそうした情報は簡単に見つけることができませぬから、飯田がどんなところなのか、学生はこの地域で何を学んだのかといふことを発信して知ってもらうことはとて大切だと思ひます。

○林靖人氏（信州大学）

ありがとうございます。そうですね、地域と繋がっていくことで、更に良いことが起きていくと思ひます。大学の中では知識を構造的に学んでいきますが、やっぱりそれってなかなか大学の中だけで検証することはできないので、地域社会のフィールドが絶対必要だと思ひています。大学の知識を地域に持っていくと、地域の皆様方にも何か新しいことが起きていくことを知っていただく機会になりますし、実際に地域でみなさんに使っていただくと、それが本当に使えるものになるのかといふことがわかっていって、もしかするとそれがまた地域の魅力にもなっていくかもしれません。そこでまた新しいものやわからないものが生まれてくると、それをまた大学に持ってきて体系化していくような形で、大学と地域のつながりが加速し、好循環が生まれると思ひています。

あと、最近また流行りの言葉を使っちゃいけません、リカレント、つまり循環教育といふことがあります。小学校・中学校・高校はなかなか一回以上行く人って少ないんですが、大学だけはずっと関わられると思ひています。二回目行くこともできるし、一生涯関わられますので、やはり大学といふものがこういう形で一緒に使っていけるような場になっていくと、今のお話にあったような観光にとってもメリットになるのではないかなど、色々と感じております。

○中嶋聞多氏（信州大学）

なるほど、わかりました。この話も後半でぜひ会場のみなさんからご意見を賜りたいと思ひます。では、三つ目の話へ行きたいと思ひます。今のお話と関連しますが、今回登壇されている大浦先生とクレマスさんは観光がご専門です。先ほどパネルディスカッションの前に和歌山大学藤田ゼミの学生さんが関係人口に関する調査報告をされていましたが、関係人口といふことも含め、観光といふ言葉をもっと広く捉えてみたいと思ひます。人が集う、飯田といふ場所に集うといふ仕組み、仕掛けといふものを考えて

いくうえで、なにが重要になるのかといふことについてまずは大浦先生からお話いただき、その後ダニエルさんから具体的な話をよろしくお祈ひします。

○大浦由美氏（和歌山大学）

観光といふものは非常に広い現象なんです、案外、まだまだ物見遊山的な見方をされることが多いです。けれども、近年では働き方、あるいは労働の世界が大きく変わってきました。観光が行われるいわゆる余暇といふものは、労働の裏返しとして発展してきたといふ歴史があります。その中で、観光といふものは非日常空間に移動して余暇を行うといふところに本質的な意義があります。

観光といふものは、鑑賞したり、創造したり、交流したりすることだといふことで、これはみなさんも体感的に感じられていることだと思ひますが、要はこれは消費であり、生産であり、コミュニケーションなんです。違うところは、これを自由な時間で行うか、それとも労働者として拘束された自分の思い通りにできない時間に賃労働として行うかといふ点であると理解することができます。つまり、観光といふものを人をつくるといふところまで拡大して考えると、私たち人間は労働を通じて自分を高め生きがいある人生をつくっていく、労働によって発展していくわけですが、これを自由な時間に行うか、拘束された中で行うかといふ、こんな幅広いとらえ方をすることができます。

この余暇に行う自由な労働のことを観光・レクリエーションと呼んでいるといふこと。それから、非日常空間に移動するといふ観光の独自性によって、日常から移動する中で未知との遭遇があったり新たな出会いがあったり、好奇心や冒険心が満たされたりする偶然性が高まるといふこと。そして、実は私たちは外の世界を観ながら自分の日常との差異性に気づいて「もっとこうだったらいいのにな」とか「あ、うちは結構いいところがあるんだな」といふことに気づくといふことがあるんですね。そうやって自由な時間にわざわざ出かけて何かを行うことで、自分の認識をアップデートしたり、自分の目指したい方向性などをそこで見つけていくといふ役割が観光にはあります。これはバーチャルでも可能かといふ議論がありますが、やはり地域に行って、五感を通じて直感的に「この暮らし方がいいんじゃないかな」とか「これはとて大事なことなんじゃないかな」と感じる経験は、まだバーチャルではかなわないと思ひます。といふことで、観光といふものはより善い社会を目指す共創の場や機会になり得るといふ広い捉え方をしてもらおうと、色々な見方が変わってくるのではないかなと思ひます。

先ほどの話とも関係しますが、人をつくるといふ側面からみると、知の交流といふものは観光を通して常に生まれてくるものなんですね。その交流の在り方はどうあるべきか、そしてどういふ拠点がそれを担うべきかを考えた

きに、以前に遠山郷で調査をしてとても印象的だったのが旧木沢小学校です。最近遠山郷では、南アルプスエコ登山の取組を開始しているようです。私が調査をしていた時にはまだこのアイデアが少し出だした段階で、南アルプスという玄人向きの登山をどう観光に活用しようかと非常に知恵を絞っておられましたが、なかなか多くの人がある山にはならないわけなんですね。それを外からの色々なアイデアとか、あるいはここがエコパークになっているということも関連させながら、とうとう人を選ぶ登山、つまり玄人向けの山を克服したい・行ってみたいという思いで楽しめる人、あるいはそこにガイドさんをつけて登山というものを体感してもらおうというスタイルに舵を切ったわけです。これは最先端のアイデアでとても面白いと思いますが、こういう取組が生まれた背景に、先ほどの旧木沢小学校があります。ここには猫の校長先生がいたり、みなさんが気軽に訪れる場なんですけど、小学校が閉校した後も地域の方の学びの拠点として脈々と続けられてきた場所だと思えます。地域のみなさんにとっては、南アルプスは国有林で働く仕事の間でもありました。その中で、この場所の歴史や、それが自分たちの暮らしにどのようなかわりがあったのかということについて、本当に細かな資料を蓄積されており、自分たちなりに見方を工夫して展示をされておられます。こういうことが、ここでは日常的に行われていたんですね。もう一つは、この小学校で地域のみなさんが色々なワークショップなどをやっていて、その結果を建物の中にいつも掲示してあって、来た人がみんな「この地域の人はこんなことを考えているんだ」ということを見ることが出来ます。これと同じことがムトスぶらざでも行われていて、「これだ!」と思えました。こういう土壌の上に、先ほどのエコ登山のようなアイデアが生まれてくるわけですね。地元のみなさんが常に知的に、地域の何が大事だったのか、何がこの地域なのかということに関するいろいろな知識を集積されている。そこに新しい風が入ってきたときにパッと芽が開く。こういう交流を創出していくのも、先ほど申しました広い意味での観光の役割になっているのではないかと思います。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。続いてクレマスさん、ご発言をお願いします。プロフィールを見ると、ご自身も色々アウトドアの活動をされていて、その中で先ほど情報不足を痛感されたというお話もうかがったんですが、外国の方にとって、マウンテンバイクを使ってあちこち行こうとしたときに、情報集めに苦労するらしいんですね。そんなお話も少し伺いできればと思います。

○ダニエル・クレマス氏（南信州観光公社）

今日は観光に関連した観点から、地域のソフトパワーに関して、スーパーメガリージョンと南信州の自然文化遺産

の多次元性についてお話をしたいと思います。観光というものは単なる誘客ということだけではなく、その地域のイメージをつくるものとしてとても大切なものと考えています。3つのテーマについて話したいと思います。1つ目は、現在の南信州が世界からどのように見られているのか。2つ目は、私の故郷であるドイツの田舎のディスティネーションマーケティングについて。そして3つ目は、南信州・飯田の魅力とこれからの課題について話したいと思います。

残念ながら、現在は南信州・飯田は世界からあまり認識されていません。この場所を知っている人は本当に少数です。このことは、外国人観光客向けのガイドウェブサイトや旅行会社のウェブサイトを見ると、そのことが本当にわかりやすいです。例えば、長野市の旅行会社のウェブサイトにあるスノーモンキーリゾートのアクセスマップを見ると、JR飯田線や天竜川は全く載っていません。同様に、ジャパンガイドという外国人に人気のウェブサイトでも中部エリアのガイドマップを見ても、木曾や高遠は掲載されていますが、飯田線や天竜川は入っていません。ロンリープラネットという人気のあるガイドブック出版社のウェブサイトを見ても、飯田について何も情報が出てきません。地図を拡大すれば木曾や妻籠、中山道についての情報がでてきますが、飯田には情報がありません。

続いて、話を私の故郷であるドイツのリムブルグという小さな町に移します。この地域には川があり、高速道路も通っていて、昔から交通・交流の歴史がある点などが飯田との共通点です。町のサイズは飯田と比べてとても小さく、飯田がおよそ660km²なのに対しリムブルグは45km²で、リムブルグがあるリムブルグ＝ヴァイルブルク郡のサイズがおよそ740km²なので、飯田はむしろ郡のサイズに近いです。一番の違いは人口密度で、飯田は面積が大きいですけど、山林が多く人が住めないエリアが多いため、リムブルグやリムブルグ＝ヴァイルブルク郡の人口密度は飯田よりも高くなっています。リムブルグはドイツの西に位置し、マールブルク大学やギーゼン大学など古い歴史を持つ大学が近くにあります。19世紀にはマイン＝ラーン線が敷かれ、飯田線のような素敵な鉄道が通っています。第2次世界大戦前にケルンとフランクフルトを結ぶ高速道路がつけられリムブルグを通っています。また、20年程前にはICEという高速鉄道の駅ができ、フランクフルト空港まで1時間半程度かかっていたものが15分に短縮され非常に便利になりました。地理的にはケルンとルール地方という経済的に強い2つの都市圏の中に入っていますが、文化・歴史・自然としてはラーン川流域圏の中に位置しているということがとても重要で、観光戦略や観光マーケティングとしてもリムブルグはその一部として位置付けられていて、川を楽しんだり、溪谷でハイキングやサイクリングをしたり、その後

にアイスクリームを食べながらお城や教会などを観光することができます。このスーパーメガリージョンとしての圏域と、文化的な圏域の両方が非常に大事なもので、それは飯田市にも当てはまると思っていて、リニア中央新幹線によって交通の利便性が高まりますが、便利さだけではなく飯田の本来の特徴を忘れることなくマーケティングを行う必要があると思います。そうでなければ、リニアの山梨県駅や岐阜県駅もできる中、あえて飯田で下車する理由がなくなってしまいますし、そのためにもこの地域の自然遺産・文化遺産がもっと積極的に活用されるべきだと思います。この地域には様々な資源がありながら使われておらず、知られてもいません。例えば飯田線は、交通という意味では少し不便ですが、魅力的な観光資源と考えていいと思います。外国人は電車が好きな人が多いですし、日本の電車は海外でもとても有名なので、飯田線の不便さは魅力になると思います。また、天竜奥三河国定公園や南アルプスユネスコエコパークなど大自然がありますが、あまり重宝されていませんので、それらを海外でも紹介したいと思っています。また、移動の歴史はとても重要で、この地域には塩の道などこの地域の歴史を考えるうえで大切な道がたくさんあり、そこを歩いたりサイクリングをしたりしながら、その道が持つ歴史の物語を体験し、学ぶことができます。その歴史的な物語を新しいリニア中央新幹線と結びつけることができれば、おおきなベネフィットになると思います。人の心をつなぐためには、お互いの歴史やストーリーを相互に理解することが必要です。今私は飯田に住んで3年目でようやくそうしたことがわかってきましたが、これから来る人たちにはもっと早くわかってほしいと思いながら頑張っています。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。では、会場のみなさんとのディスカッションをやる前に、ここまでのところで、パネリストの方々に何か補足や提案などあればご発言をお願いします。北川原先生は、他の3名の方の発言について聞いてみたいことはありますか。

○北川原温氏（東京藝術大学）

先ほど大浦先生がおっしゃった観光の在り方がものすごく変わってきているという話に非常に共感を覚えました。クレマラスさんのお話も大浦先生のお話と非常に近いのではないかと思います。知的感動と言いますか、体験をして美しいものを見て理屈を超えて感動するということがありますが、様々な感動を体験していき、色々なものが蓄積されていくということは、やはり地域とつながっていくということによってでしか実現できないのではないかと思います。地域とつながるということについて、先ほど林先生が非常にアカデミックなご説明をされ「うん、うん、なるほど」と自分の頭の中が整理されたような気持ちになりました。

たが、少しリニアの駅前広場につなげて僕なりに考えてみました。このリニア駅前広場というのは、交通広場も含めて6.5ha全体が市民の参加によって将来につながっていき、それが地域の資産になっていくということがすごく大事ななと思いました。そして、そこにはやはり大学がかかわるべきだと思っています。実はこの6.5haの広場に先進型のグリーンインフラという概念を導入して設計を進めてきており、これには信州大学農学部の上原先生がかかわってくださっていて、恐らくかなり先進的な未来の環境を見据えた広場になっていくと思うんですが、既にそういった取組が始まっております。先ほどのエンゲージド・ユニバーシティの話聞いて、僕なんかは古い人間なのでサルトルのアンガージュマンを思い出して、「これは革新的なキーワードじゃないかな」と思ったんですが、この6.5haのプロデュース、そして管理運営に信州大学、林先生が中心となるかもしれませんが、ぜひかかわっていただいて大学が支援していき、市民・地域と大学が一体となっていくことで、地域がすばらしいものを生んでいくようになるのではないかと思います。中嶋先生もまさにご専門でもあると思いますので、ぜひよろしくお願いします。

○中嶋間多氏（信州大学）

林先生、可能な限りで何かご発言をいただけますか。

○林靖人氏（信州大学）

ありがとうございます。先ほど中嶋先生から新学部の話もありましたが、信州大学は他大学と比べて県内各地にキャンパスがあるという特徴があって、現時点でも5キャンパスが県内の主要地域においてあります。そうすると、他大学はどこか一か所にしかないのではなかなか全体感を持ってないんですが、信州大学は全県に散らばっている状況もあって、自分で言うのもすごくおこがましいのですが、そういう意味では県内において存在感があるという状況が作れていると思います。ですから、どういう形かというのはまだまだこれから議論がなされるころだとは思いますが、色々な形で地域の中にそういった拠点があるということとで学生や研究者がそこに入っていけるということは間違いのない事実だと思っています。それは学輪IIDAという一つのソフトウェアとしての拠点でもいいですし、いわゆるキャンパスでもいいと思います。また、キャンパスも私は、いわゆる大学の囲われたキャンパスである必要性はないと思っているので、ソフトと拠点の中間的な場所としての街の中もキャンパスとして使えると思っていますので、こういった学輪IIDAのつながりの場は大学にとってすごく良い学びの場だったり研究の場になると思っています。そこを応援いただいた気分になりとてもありがたいと思っています。

○中嶋間多氏（信州大学）

大浦先生、何かしゃべりたいんじゃないかと思いますが、

いかがでしょうか。

○大浦由美氏（和歌山大学）

今の大学の在り方について、私も林先生のおっしゃったエンゲージド・ユニバーシティという考え方に全面的に賛同しています。従来から大学は産学連携や地域連携をやっているんですが、学輪IIDAの取組が非常にユニークだと思うところは、例えば大学の産学連携という、特定の企業とがつつり組んで進めるため、割と秘密主義というか、そこに関わっている人たちしか知らないという感じなんです。地域連携は秘密にしているわけではないんですが、どうしても個々のつながりになることが非常に多いです。それをなんとか解消しようとして色々なセンターをつくったりするわけですが、そういうことがなかなかできてこなかった。それがこの学輪IIDAはある意味公共空間として位置づいていて、飯田の大きな特徴だと思うのは、地域自治・住民自治という考え方が非常に根強く浸透しているということです。例えば、太陽光発電なんかは色々なところで民間企業が囲い込んで取り組んでいます、地域エネルギーはみんなの共有のものであるという考え方を市で提案して、それが通るといふそういう土壤があるということです。いいことをやろうとしたときに、それを囲い込むのではなくみんなでやろうとなる地域って、そんなに多くはない気がします。その意味で、ここに色々な大学の色々な専門家が集い行き来しているということはとても大きな可能性があるし、他の地域では真似できないことなのではないかと思っています。

○中嶋聞多氏（信州大学）

ありがとうございます。少し大風呂敷を広げすぎていて、3つのテーマをだんだん集約していきたいんですが、残り30分となりましたので、今までの話を聞いてみなさまの方で何かここはどうなんだろうということがございましたら、ぜひ挙手のうえご発言いただければと思いますがいかがでしょうか。

○廣江彰氏（立教大学）

非常に興味深いお話をうかがいながら誰も質問しないのは変だと思しますので、意見を言わせていただきます。ダニエル・クレマスさんと大浦先生におうかがいしたいんですが、ダニエルさんがおっしゃった、リニア利用者がどうやってここに降りるのかということはすごく重要な問題だと思います。私は北海道の大学と東京の大学の2つを経験しましたが、その前に売れない大学院生でしたからシンクタンクで働いていて、とある公団から因島大橋の経済効果を計れという委託事業を受けました。私は正直に、こういう条件が整わない限り因島大橋は作るべきではないと言ったらみなさんに叱られまして袋叩きにあい、次から仕事に来ないだろうという話でした。私は経済家なので、物事を観る時にプラス・マイナスをどう観ていくかということが

重要で、マイナスの面というのは、リニア中央新幹線がここにきて、何かそこに魅力がないと降りないだろうということ。降りる人がいなければせっかく描いたものも意味がなくなってしまうので、これをどうするかというときに、人を呼ぶための情報発信をしたりものづくりをするキーパーソンをどうつくるのかということが重要だと思うんです。どちらかという、行政中心の政策というものに人に対する投資というのはあまりないですから、継続的にどのように人をつくっていくのかということにお二人にお伺いしたいのは、ここに降りるための情報発信をしたり様々な物語をつくっていくこの地域の人々をどうつくっていくのかということについて、わかりやすくご説明をいただければと思います。

○大浦由美氏（和歌山大学）

非常にわかります。瀬戸大橋なんかですと、橋ができて便利になったことでストロー効果によって地元から人が出て行ってしまふということが現実にも起こりました。やはり最初にリニア中央新幹線の計画をおうかがいした時も私はそうしたことを思いましたし、今でもそうしたことが起こりうると思っています。例えば今東京にお住まいで、地元にも田んぼもあるし両親も年をとるので将来的には帰ってこようかなと思っている人が帰ってこなくなることでどのようなインパクトがあるのかな、など色々考えます。観光という面ですと、今の私たちの社会は非常に厳しい状態です。特に若い人にとって競争的な環境と言いますか、やはり若い学生と話をしていても、一度も右肩上がりの時代を経験していない彼らは将来に対してあまり楽観的ではなく、ちょっとでも間違っただ道を外れたら元に戻れないかもしれないという不安があります。こういうストレスの反動で、その解消という意味もあってそうではない世界やつながりを求めています。今の若者って、人を避けているようで実は人を求めているということがあって、安心できる関係性の中に戻ってきたいという欲求がすごくあるわけです。観光に対しても、こういう厳しい世の中になってくると二通りの在り方があると思っています、一つはとても享乐的な方向で、刺激を求めるような観光もひょっとしたら流行ってしまうかもしれない。その一方で、より善い自分、より善い社会、より安心できる人とのつながりを求めて色々な所へ行くという形の観光が現れてきているし、そこから先ほどの関係人口・定住人口といったところにつながっていくと思います。ですので、ここでリニア中央新幹線を降りてもらおうということは、これまでずっと目指されてきたものだと思いますが、住んでよし・訪れてよしを具現化していくこと。それから、今の経済ではなく、その次の可能性、より善い世界を予感させるような情報発信ということにあるのかなと思います。すごく漠然としていて申し訳ないんですが、何かつくったら来るとかそういう

ことではないと思うんですね。パネルディスカッションの前に報告のあった新文化会館構想ですごく面白いと思ったことは、コンセプトの中に創造する場、人を呼ぶだけでなく創作活動などに活かすというものがありました。これはある一つの自己実現の場ですよ。あるいはムトスぶらざのコンセプトにも、想いが実現できる場というものがありました。こんな場は実はなかなか身の回りにはないので、やはりこういうものを求めてくる人もいるのかなと思います。こんな価値の発信というものがとても大事なんだと思います。

○ダニエル・クレマス氏（南信州観光公社）

とても大切な質問だと思います。地域の情報発信の主体をつくるのが大事だと思います。例えば公民館に集まって古道について研究しているおじいさんたちのグループのように、知識のある人やプレーヤーは大勢いますが、それぞれのテーマでバラバラに取り組んでいます。例えば将来的には情報を集約してデジタル情報発信をするような小さな社団法人みたいなものが核になって、南信州観光公社や南信州新聞社、教育委員会、地域の観光協会などと連携することによって、みなさんの知識を統合して情報発信ができるようになると思います。そんな主体が学輪IIDAや外部の専門家とも協力し、地域の知識とマーケティングや戦略に関する知識やノウハウをつなげることによって上手く情報発信ができるのではないかと考えています。

○中嶋間多氏（信州大学）

もともとのご質問の中には人材育成的な部分をどうするのかということがあったかと思いますが、その点について朝岡先生何かございますでしょうか。

○朝岡幸彦氏（東京農工大学）

東京農工大学の朝岡です。私はもともと社会教育の研究をしていて今環境教育をやっておりますが、やはり飯田の特徴は人材養成の場というか、人が育つ場であるということですね。それを象徴するのが公民館という仕組みであって、飯田に限らず下伊那は我々社会教育研究者の間では、もう名だたる公民館・社会教育のメッカになっていて、要するに戦後の民主主義や地域づくりというものがそのままここに根付いて、学ぶ文化・風土としてこの地域になる。だから、どちらかというところから育てるといよりは、既に戦後70年、もしかすると戦前からの色々な運動が培ってきた人々の学ぶ文化や能力をどのようにつなげていくのがポイントかなという気がします。今日ムトスぶらざの話は初めてまとめてお聞きしましたが、そういう意味で言うと元々あった公民館という文化と、この学輪IIDAも含めて新しい仕組みをどう融合していくのかということについて、確かに考えなければいけないし、可能性があるなと感じました。そのきっかけがもしかするとリニア駅なのか

もしれない。ただ一言だけ、私が気になったことは、確かにストロー効果ということはあると思いますが、イメージとしてワンストップにははいけないと思うんですね。つまり駅前にあまり集中させすぎてしまうと駅前で満足してみなさんは帰っていかれるので、駅前はあくまで入り口であって、そこからいろんなところに散らばって出ていただく。その時に、地域に入っていくとクレマスさんがおっしゃったようないろんな人材がいていろんなことをやっているということはどう見せていくかということが大切だと思います。これまで公民館は、どうも発信力が弱かった気がするんですね。地域の人たちはよく知っているんだけど、公民館でやっていることというのはよく考えてみると全国、世界に発信できるような中身があるので、お話を聞いていてそういう可能性が飯田にはあるのではないかなと思いました。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。他にご発言はいかがでしょうか。

○石神隆氏（法政大学）

非常に興味深い、刺激的なお話をありがとうございました。最初に非常にショックだったのがカルマン渦ですね。ここから始まったということが大変なイノベーションでして、要するに非線形で不平衡形で、同じものできないわけですよ。ということは、最初から設計できないんですよ、青写真ができない。つまり、これは育てていくしかないということなんですよ。最初に描いてしまってあとはひたすらそれに向かっていくという今までのやり方からみんなで育てていくと。最初から完成形があってそこに向かっていくと、つねに不便だし常に未完成なんです。そうではなくてみんなで育てていくとそこに楽しさや夢ができ、絵が描ける、詩ができるというようなことをカルマン渦からふと思ったんです。最初に北川原先生からリニア駅の絵を教えていただきましたが、元々僕は「変なものできたら困るなあ、あんまりよくないなあ」と常々思っていました、つまりあちこちにある新幹線の駅のようにビルができてその中に小洒落たレストランがあるというようなものが飯田に似合うかなあと思っていました。むしろ大浦先生のおっしゃった非日常ということを考えると、今日常がそういうビルがあって小洒落たレストランがある状態なんですよ。特に東京や名古屋とつながるといって、その人たちにとってはそれが日常なんですよ。非日常というのはそういうものではなくて、降りたら森だというようなことなんですよ。先ほどの絵を見せていただくとまさに森のようでした。非日常というのは人間の脳を刺激して新たな発想を生むようなことがあると思いますが、そういう発想の場になるのかなと思います。まさにその場で、先ほど林先生のおっしゃったエンゲージドのように、地域と大学の関係、言語と非言語の関係、実践知・実態知から形式知に

移るような関係が、飯田の地でうまくできるのかなと思いました。先ほどクレマスさんがおっしゃったように、リニアで30分で飯田まで、車で1時間待って、そこから30分かけて天龍峡に行くというこの不便さとスピードの違和感というのが非常に非日常で、ものすごい面白い空間、メガリジョンができるのかなと思った次第です。ということで、エンゲージド・ユニバーシティというのは非常に素晴らしい言葉だと思ひまして、考えてみれば飯田って、エンゲージド・シティなのかなということをおもいました。

○中嶋聞多氏（信州大学）

ありがとうございます。せっかく佐藤市長いらっしゃるんで、ここまでで感じられたことと、パネリストをどなたかお一人ご指名いただいて、この点どうなんだろうと突っ込んでいただけませんか。

○佐藤市長

非常に示唆に富んだワードがたくさん出てきたとおもっています。一つは駅のイメージを初めて見ていただいた方が多いかとおもいますが、今石神先生におっしゃっていただいたように、北川原先生をはじめデザインコンセプトを考えていたみなさんはまさに森をイメージして、しかし木を植えればいいのかと言えそうではないだろうと色々考えた末に、あの木の太い根にたどり着きました。降り立ったら森のイメージだと言っていたのは、北川原先生をはじめわが意を得たりという感じをもってお聞きになったのではないかとおもいます。今石神先生がおっしゃられたように、リニア沿線の中でこの地域がどういうことになっていくかというときに、よくあるような街のコピーになってはいけないということは皆思っています、降り立った時の印象としてそれを象徴することとなる駅前広場をどうするのかというのは本当に苦心惨憺しながらここまでたどり着いています。これから先はそれをどう使いこなしていくかということをおも市民のみなさんと相談していくことになるんですが、今このディスカッションの中からも出ていた、地域とどう結びつけていくのかとか、そこに人をどう登場させるのかとか、飯田線とどう結びつけるのかなど、本当に色々なテーマが結びついてくるとおもっています。そういう意味で、今日のパネリストのみなさんのお発言はそれぞれが示唆に富んだものだったとおもっています。私としてはそう受け止めたということをお伝えしておきたいとおもいます。

先ほどクレマスさんにいくつか見せていただいた地図でやっぱりそうかとおもったのが、国際的なガイドブックには飯田は載っていないんだということをおも改めて感じました。では、それが載るようになるにはどうしたらいいのか。恐らくリニアの駅としては表示されるようになるとおもいますが、海外向けにこの地域がどういうものとして紹介されるイメージをもって取り組めばいいか、もう少し掘り下げて

お話をしていただければ嬉しいです。

○ダニエル・クレマス氏（南信州観光公社）

おそらく、短期的に実現できるものではないとおもいます。例えば今から情報発信をスタートすると、実際にお客さんが来るまで5年～10年くらいかかるものだとおもっています。まずは多言語のウェブサイトやソーシャルメディアを使ってこの場所の特徴と魅力を紹介する、それから、ソフト・ハード両方のインフラ、例えば多言語のガイドさんなどの環境を整えていくことも大切だとおもいます。そうした情報発信を始めると、おそらく1～2年で、もっとディープな、隠れた日本を体験したいというパイオニア的な観光客がこの地に来るようになるとおもいます。こうした人たちが自分たちのブログなんかで書き込むことで情報発信の担い手になっていきます。また、海外のテレビや新聞といったメディア関係の記者に連絡をとり、この地域の取材をしてもらうこともいいかとおもいます。BBCやCNNでは日本の田舎の魅力に関する記事がたくさん出てきますし、こうした人たちにも飯田に来てほしいとおもいます。なによりもまずは興味を持ってもらうことが重要なので、入り口として多言語のウェブサイトが必要ではないでしょうか。

○佐藤市長

ディスカバー・ジャパンという言葉が昔ありましたが、この地域はディスカバー・アナザー・ジャパンだとおもうんですね。そういうアナザー・ジャパンとしてこの地域を売り出すストーリーやコンテンツとしてクレマスさんはどういったところに可能性を感じていますか。先ほど飯田線や塩の道といったお話がありましたが、外国のみなさんにこの地域の魅力としてPRするためにどういったコンテンツが有力だとおもっていますか。

○ダニエル・クレマス氏（南信州観光公社）

すべてを伝えると長くなってしまいますので、手短にお伝えします。私はアジア圏の外国人のニーズはあまりわかりませんので、欧米人の観点からお話をします。日本の田舎まで来る外国人はだいたい欧米系の人たちです。今は中山道に海外から大勢の人がやってきているので、私の知り合いなどもそちらに行っていますし、残念ながら飯田にはやってきません。木曾谷と飯田の交通の歴史を物語にしてつなげ、大平街道と大平宿、清内路街道、東山道を中山道と結びつけていくことができるかというのではないのでしょうか。外国人は日本の鉄道パスを持っていて、東京から東海道新幹線で豊橋まで行き、特急に乗り換えて伊那路で飯田まで来る可能性が結構ありますし、遠山郷についても、天龍村から遠山郷に入る可能性もあります。今の飯田の観光は点的に行われていて、例えば桜を見るところ、食事をするところ、何かを体験するところが点在し、その間の移動はいつもバスを使っているんで、他の移動手段の可能性を考えてもいいとおもいます。例えばこの地域には狭い

古道がたくさんあり、そこには昔の風景や石像などが残っているのです。そこをサイクリングロードとして活用することもできます。その際に、その道の歴史が持つストーリーがわからないと楽しめないのですが、それがわかるととても楽しいものになると思います。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。では、そろそろまとめに入りたいと思います。パネリストのみなさんからそれぞれ一言ずつ、感じたことや言っておきたいことをご発言いただければと思います。まず北川原先生からいかがですか。

○北川原温氏（東京藝術大学）

僕は今日初めて学輪IIDAに参加させていただいてとても貴重な経験ができ、いろいろなことを学ぶことができました。本当に感謝しています。先ほど佐藤市長がアナザージャパンとおっしゃったのを聞いて僕はちょっとひらめいちゃったんですが、アナザージャパンというものがキーワードになって、学輪IIDAが世界とつながるだろうということを手勝手に頭の中で想像しました。以上です。

○林靖人氏（信州大学）

今日は本当にありがとうございました。今日私はこういう話を聞いている中で、またちょっと話が広がってしまっていますが、特に人の暮らし方についてこれからの市や地域の計画の中にもこういったことをもっと浸透させていくことができるのではないかと感じたことがあって、私は最近いくつかの行政の人口ビジョンや総合計画に関わっているんですが、もう定住の概念を変えましょうと言っているんですね。先ほど関係人口の話もありましたが、一か所にとどまるだけという感覚だけではなく、先ほどお示した資料の中にもありました「つながる人口」というところに意識を向けていきたいと思っていて、イノベーションって新しいことにつながりでしか起こりませんので、色々な人と人、情報と情報がつながり、この場と色々なものがリンクしていくと、もっともっと発展できるのではないかと感じて、また色々なところに関わられたらいいなと思いました。

○大浦由美氏（和歌山大学）

今日は私もとっても刺激を受ける話になりました。先ほどのクレマスさんと佐藤市長とのやりとりの中に出てきた飯田の国際的な認知度を高める方法として1ついいものがあります。今、持続可能な観光に関する国際認証が何通りかあります。認証というものをあまりツールとして考えてほしくなくて、それをきっかけとして自分たちの地域を振り返って本質的な変化に変えていってほしいと思います。例えば、GSTC(グローバル・サステイナブル・ツーリズム・カウンシル)というところの日本語版を和歌山大学観光学部の教員などが中心となってつくっていますし、それからグリーン・ディステーションTOP100という

ものがあります。こういったものを上手く活用することが、世界の中での飯田の価値を発信できるいい方法だと思いますので、ぜひチャレンジしていただけるといいと思います。自己診断できるツールも色々と提供しております。それから、冒頭でカルマン渦列の話がありまして、今日お聞きのみなさんの中には建築の先生方もいらっしゃるのあまり迂闊なことは言えませんが、カルマン渦列はスーッと流れていくものの中に障害物が置かれて起こりますが、周りに渦が発生することによって、その障害物のあるところがずっと振動するんですね。建築の世界ではそれを避けたいわけなんですけど、ボーっとしていたらスーッと流れていってしまうリニアの流れを飯田で一旦ストップさせることで、そこにずっと振動、つまり面白いことがどんどんと生まれるというイメージがあると思いました。ですから、上手くこのリニアの波を飯田でつかまえて、それをずっとエネルギーに変えていくことのできる地域になれるといいなと思いました。

○ダニエル・クレマス氏（南信州観光公社）

南信州・飯田市にはいろいろな魅力、そしていろいろな問題点が隠れています。初めてここに来た時に、本当に素晴らしい景色があると感じましたが、それを見つけ出したり、体験したりすることは簡単ではありません。日本全国、そして世界のみなさんにこの地域が持つ魅力や課題をわかってもらい、それによっていろいろな問題を解決するための協力者になってほしいと思っています。

○中嶋間多氏（信州大学）

ありがとうございます。まだまだ聞きたいことはたくさんありますが、時間になりましたので最後に私から、全体を通して感じたことを少しだけお話しさせていただきます。まず、今回の冒頭でカルマン渦列を出した意味ということについて、私は常々「イメージで考える」ということも大事なことではないかと思っています。というのは、今までやってきた議論をイメージで考えることによって、それが新たな考えやアイデアを生み出すのではないかと考えているんですね。学輪IIDAにはそうしたことが専門の先生がいられるかもしれませんが、右脳で考えるということも取り入れていただきたいという思いがあって、トライアルとしてこのカルマン渦列を出しました。おかげさまで、大浦先生にもすごく反応をしていただきまして、特に北川原先生にはすごく刺さってしまったようでカルマン渦に触れていただいていた。先ほど廣江先生のお話にもありましたように、リニアを使って飯田で降りていただいて何をしてもらうのかということを作りをこまかくてはいけなくて、私は、せっかくそこに学輪IIDAが積み上げてきたもの、つまり地元の知と外の知が混ざったその「知」自体を特産品として持って帰ってもらえばいいと思うんですよ。そういう発想があってもいいのではないかと

います。学輪IIDAで大浦先生なんか地域奥へ奥へと入ってフィールドワークをされて得てきた知識・知恵を特産品として、飯田を訪れた方に持って帰っていただくという事はできないものかなと思っています。さはさりながら、こうした機会は今のところ毎日はない、つまり常設の場所がないため、フィールドワークなどは別として、毎日学輪IIDAの何かがあるという見える化はできていないわけです。そこで、新駅のような人の交差する場所にライブラリーカフェのような何か知の交流の場所のようなものがあればそこを活用していただくような仕組みができないものかということをおっしゃっていましたし、林先生のお話もそこにつながっていくのだろーと思います。そういう話を含めて、今後はみなさんでイメージを考えていただくというのがいいのではないかというのが、私からのメッセージであり、今回のパネリストのディスカッションから私が得たものと認識しております。では、お時間になりましたので、これで学輪IIDA全体会パネルディスカッションを終了させていただきます。ありがとうございました。



飯田市在住高齢者における 趣味の会参加の経年変化とフレイル発症との関連 —2018年-2019年縦断研究—

Association Between Hobby Club Participation Over Time and Onset of Frailty in Older Adults Living in Iida City, Japan:
2018-2019 Longitudinal Study

日本福祉大学 社会福祉学部 宮國 康弘

Yasuhiro Miyaguni

Nihon Fukushi University, Faculty of Social Welfare

【要旨】

＜目的＞本研究では、人々のつながりの中でも社会参加の種類から趣味の会に着目し、飯田市在住高齢者における趣味の会とフレイル発症との関連を、縦断追跡調査によって検証することを目的とする。＜方法＞2018年に6,000名の調査を実施し4,681名(回収率78.0%)から回答を得た。その後2019年にフレイル発症の有無を追跡できた2,825名を対象に、趣味の会参加の経年変化と新規のフレイル発症との関連をロジスティック回帰分析によりオッズ比と95%信頼区間を算出した。＜結果＞継続的な趣味の会への参加は、約60% (OR : 0.398, 95%CI : 0.202-0.786) 新たなフレイル発症を抑制できることが示唆された。

キーワード：フレイル、趣味の会、ソーシャル・キャピタル、高齢者

Key Words : Frail, Hobby group, Social capital, older people

1. 背景

2023年版（令和5年版）高齢社会白書¹⁾によれば、我が国の総人口は2022年10月時点で1億2,495万人、65歳以上の高齢者は3624万人となり、高齢化率は29%となった。過去最高となった。総人口の3分の1が65歳以上となった現在、要支援・要介護者数は増加し続け2020年度に要介護認定を受けた高齢者は668.9万人となった。2010年は490.7万人であったことから、10年間で178.1万人増加したことになる。

要介護状態となる一因として「フレイル」がある。フレイルとは、荒井によれば「加齢に伴う様々な機能変化や予備能力低下によって健康障害に対する脆弱性が増加した状態」とされており²⁾、要介護状態となる手前の段階と考えられている。つまり、フレイルを予防することで、その先の要介護状態の移行を抑制することが期待できる。

フレイルは、種々の要因の蓄積により生じることが知られおり、高年齢、低学歴、独居、喫煙、飲酒の影響が考えられている³⁾。また、フレイルは、社会的側面も踏まえる必要がある。Makizakoらは、フレイルに該当しない高齢者1,226名を4年間追跡し、ベースライン時の独居、外出頻度の減少、他者との会話の制限の社会的側面が、新規のフレイル発生リスクと関連しており、社会的側面が豊かな高齢者と比較すると約4倍フレイルリスクが高いことが明

らかにした⁴⁾。また、吉澤らは、約5万人の調査データから、運動習慣、文化活動、地域活動・ボランティア活動の活動とフレイルとの関連を検証した。その結果、運動習慣のみ行なっている群よりも、運動習慣はないが文化活動と地域活動・ボランティア活動を行なっている群の方が、フレイルのリスクが約3割も低いという結果であった⁵⁾。この結果は、「人々のつながり」によるフレイル予防を示唆しており、このような研究が複数報告されている。

長野県飯田市の高齢者福祉計画・介護保険事業計画(2021年度～2023年度)によると、高齢化率は32.4%であり、要支援・要介護者の増加は見込まれている。飯田市のフレイル者割合は15.0%(2019年11月時点)であり、本市においてもフレイル対策は重点(強化)取組であることから、人々のつながりとしての通いの場等を活用したフレイル予防が本計画でも示されている。人々のつながりについては、社会参加活動が着目されるが、その中でも「趣味」は、要介護状態や認知症発症を抑制する関連があり^{6)・7)}、介護予防のための活動として知られている。また、「趣味」単独の結果ではないが、厚生労働省が行う中高年者縦断調査(中高年者の生活に関する継続調査)によると、第1回調査(平成17年10月時点)から、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう前の第15回調査(令和元年11月時点)まで、「趣味・教養」が連続で最も参加割合が高く、社会参加の中でも気

軽に参加しやすい活動であることがわかる。

しかし、趣味活動が介護予防として有益であり、本市においても重点（強化）取組とされているが、一時点の調査による評価のみであり、縦断的追跡調査した検証が進んでいない。

そこで本研究では、人々のつながりの中でも社会参加の種類から、高齢者が最も参加しやすい趣味の会に着目し、飯田市在住高齢者における趣味の会とフレイル発症との関連を、縦断追跡調査によって検証することを目的とする。

2. 方法

2.1 対象者

飯田市では2018年11月25日から2018年12月16日に要支援・要介護認定と受けていない65歳以上の高齢者6,000名に、自記式郵送調査を実施し4,681名から回答を得た（回収率78.0%）。2018年に回答が得られた対象者を、1年後の2019年11月25日から2019年12月16日に同様の調査によって追跡し、フレイル発生を検証することが可能な2,825名追跡することができた（追跡率60.4%）。

なお、本調査は、介護保険事業計画策定時に実施する「介護予防・日常生活圏域ニーズ調査（以下、ニーズ調査）」に項目を追加する形で拡張し、「健康とくらしの調査」を実施した。本調査は「日本老年学的評価研究（<https://www.jages.net/>）」の一環で実施された。

2.2 目的変数

目的変数は、厚生労働省が示すフレイルを評価することができる「基本チェックリスト」の25項目を使用した。本項目によるフレイルの評価はSatakeらによって妥当性が検証されており⁸⁾、次に掲げる25項目のうち8項目以上該当すると「フレイルあり」と定義した。

＜基本チェックリスト25項目＞

①バスや電車を使って1人で外出できない、②自分で食品・日用品の買い物ができない、③自分で預貯金の出し入れができない、④友達の家を訪ねることがない、⑤家族や友だちの相談に乗ることがない、⑥階段を手すりや壁をつたわず昇ることができない、⑦椅子からつかまらず立つことができない、⑧15分位続けて歩くことができない、⑨過去1年で転んだ経験が1度または何度もある、⑩転倒に対して不安である、⑪6か月間で2～3kg以上体重減少、⑫身長・体重（BMI）が18.5未満、⑬半年前より固いものが食べにくい、⑭お茶や汁物等でむせることがある、⑮口の渇きが気になる、⑯外出する頻度が月に1～3回またはそれより少ない、⑰昨年より外出の回数が減っている、⑱いつも同じことを聞くなどいわれる、⑲自分で電話番号を調べて電話しない、⑳今日が何月何日かわからないことが

ある、㉑（ここ2週間）充実感がない、㉒（ここ2週間）楽しめなくなった、㉓（ここ2週間）おっくうに感じられる、㉔（ここ2週間）役に立つと思えない、㉕（ここ2週間）わけもなく疲れる。

2.3 説明変数

説明変数は、調査項目内の「あなたは下記のような会・グループにどのくらいの頻度で参加していますか」のうち、趣味関係のグループに月1回以上参加している場合を「参加あり」と定義した。さらに2018年（以下18年）と2019年（以下19年）を追跡したことで、①18年参加なし・19年参加なし、②18年参加あり・19年参加なし、③18年参加なし・19年参加あり、④2018年参加あり・2019年参加あり、というように4つの趣味の会参加の経年変化についての変数を作成した。

2.4 調整変数

調整変数は、性別（男性・女性）、年齢（65-69歳・70-74歳・75-79歳・80-84歳・85歳以上）、婚姻状況（配偶者あり・死別・離別・未婚・その他）、独居（同居・独居）、教育歴（13年以上・10-12年・6-9年・6年未満）、等価所得（400万円以上、200-399万円、200万円未満）、飲酒習慣（なし・あり）、喫煙習慣（なし・あり）、うつ（うつなし・うつ傾向・うつ状態、Geriatric Depression Scale15, GDS-15:老年期うつ病評価尺度を使用）を用いた。

2.5 分析方法

上記の目的変数、説明変数、調整変数を使用して、ロジスティック回帰分析を行いオッズ比と95%信頼区間を算出した。なお統計ソフトはSTATA ver16.1を使用している。

2.6 倫理的配慮

本研究は、日本老年学的評価研究機構（申請番号2019-01）、国立長寿医療研究センター（受付番号1274-2）、千葉大学（受付番号3442）の各研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

3. 結果

対象者の属性を示すために記述統計の結果を表1に示す。まず、目的変数であるフレイルあり該当者（基本チェックリスト25項目中8項目以上に該当）は、分析対象者2,825名中108名（3.82%）であった。説明変数である趣味の会参加の経年変化について、18年参加なし・19年参加なし1,705名（60.35%）、18年参加あり・19年参加なし305名（10.8%）、18年参加なし・19年参加あり200名（7.08%）、18年参加あり・19年参加あり615名（21.77%）であった。その他調整変数

表1 記述統計(対象者の属性、n=2,825)

		n	%	累積%
フレイル	なし	2,717	96.18	96.18
	あり	108	3.82	100
性別	男性	1,434	50.76	50.76
	女性	1,391	49.24	100
年齢	65-69	1,057	37.42	37.42
	70-74	692	24.5	61.91
	75-79	587	20.78	82.69
	80-84	314	11.12	93.81
	85-	175	6.19	100
婚姻状況	配偶者あり	2,188	77.45	77.45
	死別	405	14.34	91.79
	離別	101	3.58	95.36
	未婚	85	3.01	98.37
	その他	12	0.42	98.8
	欠損値	34	1.2	100
独居	同居	2,308	81.7	81.7
	独居	313	11.08	92.78
	欠損値	204	7.22	100
教育歴	13年以上	679	24.04	24.04
	10年-12年	1,353	47.89	71.93
	6-9年	712	25.2	97.13
	6年未満	10	0.35	97.49
	その他(欠損含む)	71	2.51	100
等価所得	400万円以上	249	8.81	8.81
	200-399万円	996	35.26	44.07
	200万円未満	1,012	35.82	79.89
	欠損値	568	20.11	100
飲酒習慣	なし	1,478	52.32	52.32
	あり	1,290	45.66	97.98
	欠損値	57	2.02	100
喫煙習慣	なし	2,517	89.1	89.1
	あり	273	9.66	98.76
	欠損値	35	1.24	100
既往歴	なし	534	18.9	18.9
	あり	2,161	76.5	95.4
	欠損値	130	4.6	100
うつ	うつなし	2,262	80.07	80.07
	うつ傾向	398	14.09	94.16
	うつ状態	87	3.08	97.24
	欠損値	78	2.76	100
2時点(18年-19年)における趣味の会参加の変化	18年参加なし-19年参加なし	1,705	60.35	60.35
	18年参加あり-19年参加なし	305	10.8	71.15
	18年参加なし-19年参加あり	200	7.08	78.23
	18年参加あり-19年参加あり	615	21.77	100

については表1に示す通りである。

次にフレイルの有無別における対象者の属性について表2に示す。フレイルありの該当者は、男性よりも女性の方が多く、年齢が若い人に比べて高齢の方がフレイル該当者が多い。また、婚姻状況について、配偶者あり、離別、未婚よりも、死別の方がフレイル該当者多く、同居者よりも独居者の方が多い結果であった。社会経済的状况である教育歴と等価所得について、教育歴では、教育年数が低くなるにつれてフレイル該当者が増え、等価所得は高い方がフレイル該当は少なく、等価所得が低い方がフレイル該当者が多かった。生活習慣である飲酒や喫煙では、飲酒の習慣があると比べて、ないとフレイル該当者が多く、喫煙の習慣がないと比べて、あるとフレイル該当者が多い結果であった。

さらに、説明変数である趣味の会参加の経年変化について、18年参加なし・19年参加なし83名(4.87%)、18年参加あり・19年参加なし10名(3.28%)、18年参加なし・19年参加あり4名(2%)、18年参加あり・19年参加あり11名

表2 クロス集計表

(フレイル有無別の対象者の属性、n=2,825)

		フレイルなし		フレイルあり		P
		n	%	n	%	
性別	男性	1,392	97.07	42	2.93	<0.01
	女性	1,325	95.26	66	4.74	
年齢	65-69	1,045	98.86	12	1.14	<0.01
	70-74	674	97.4	18	2.6	
	75-79	569	96.93	18	3.07	
	80-84	285	90.76	29	9.24	
	85-	144	82.29	31	17.71	
婚姻状況	配偶者あり	2,122	96.98	66	3.02	<0.01
	死別	370	91.36	35	8.64	
	離別	100	99.01	1	0.99	
	未婚	84	98.82	1	1.18	
	その他	11	91.67	1	8.33	
	欠損値	30	88.24	4	11.76	
独居	同居	2,233	96.75	75	3.25	<0.01
	独居	293	93.61	20	6.39	
	欠損値	191	93.63	13	6.37	
教育歴	13年以上	657	96.76	22	3.24	<0.01
	10年-12年	1,317	97.34	36	2.66	
	6-9年	672	94.38	40	5.62	
	6年未満	6	60	4	40	
	その他(欠損含む)	65	91.55	6	8.45	
等価所得	400万円以上	246	98.8	3	1.2	<0.01
	200-399万円	975	97.89	21	2.11	
	200万円未満	964	95.26	48	4.74	
	欠損値	532	93.66	36	6.34	
飲酒習慣	なし	1,398	94.59	80	5.41	<0.01
	あり	1,266	98.14	24	1.86	
	欠損値	53	92.98	4	7.02	
喫煙習慣	なし	2,417	96.03	100	3.97	0.07
	あり	268	98.17	5	1.83	
	欠損値	32	91.43	3	8.57	
既往歴	なし	524	98.13	10	1.87	0.03
	あり	2,068	95.7	93	4.3	
	欠損値	125	96.15	5	3.85	
うつ	うつなし	2,200	97.26	62	2.74	<0.01
	うつ傾向	368	92.46	30	7.54	
	うつ状態	74	85.06	13	14.94	
	欠損値	75	96.15	3	3.85	
2時点(18年-19年)における趣味の会参加の変化	18年参加なし-19年参加なし	1,622	95.13	83	4.87	<0.01
	18年参加あり-19年参加なし	295	96.72	10	3.28	
	18年参加なし-19年参加あり	196	98	4	2	
	18年参加あり-19年参加あり	604	98.21	11	1.79	

表3 2018年-2019年における趣味の会参加の変化とフレイルとの関連：ロジスティック回帰分析による結果(n=2,825)

		オッズ比	標準誤差	z	P	95%信頼区間	
						下限	上限
性別	男性※	1					
	女性	1.335	0.339	1.14	0.256	0.811	2.197
年齢	65-69※	1					
	70-74	1.800	0.702	1.51	0.132	0.838	3.864
	75-79	2.054	0.821	1.8	0.072	0.938	4.494
	80-84	6.037	2.280	4.76	0	2.880	12.654
	85-	14.250	5.609	6.75	0	6.588	30.821
婚姻状況	配偶者あり※	1					
	死別	0.878	0.276	-0.41	0.68	0.474	1.628
	離別	0.250	0.267	-1.3	0.195	0.031	2.034
	未婚	0.133	0.148	-1.81	0.07	0.015	1.179
	その他	2.581	2.995	0.82	0.414	0.266	25.084
	欠損値	1.808	1.300	0.82	0.41	0.442	7.403
独居	同居※	1					
	独居	2.016	0.741	1.91	0.057	0.981	4.143
	欠損値	1.342	0.512	0.77	0.441	0.635	2.834
教育歴	13年以上※	1					
	10年-12年	0.578	0.171	-1.86	0.064	0.324	1.031
	6-9年	0.688	0.209	-1.23	0.217	0.379	1.246
	6年未満	6.091	5.096	2.16	0.031	1.182	31.392
	その他(欠損含む)*	1.282	0.797	0.4	0.69	0.379	4.336
等価所得	400万円以上※	1					
	200-399万円	1.816	1.166	0.93	0.352	0.516	6.391
	200万円未満	2.630	1.643	1.55	0.122	0.773	8.951
	欠損値	2.832	1.820	1.62	0.105	0.804	9.979
飲酒習慣	なし※	1					
	あり	0.517	0.141	-2.42	0.015	0.303	0.882
	欠損値	0.913	0.760	-0.11	0.913	0.179	4.665
喫煙習慣	なし※	1					
	あり	0.800	0.402	-0.44	0.657	0.299	2.142
	欠損値	1.269	1.262	0.24	0.811	0.181	8.909
既往歴	なし※	1					
	あり	1.879	0.675	1.75	0.08	0.928	3.801
	欠損値	1.322	0.831	0.44	0.657	0.386	4.533
うつ	うつなし※	1					
	うつ傾向	2.406	0.611	3.46	0.001	1.463	3.958
	うつ状態	5.470	2.013	4.62	0	2.659	11.251
	欠損値	0.368	0.284	-1.3	0.195	0.081	1.666
2時点(18年-19年)における趣味の会参加の変化	18年参加なし-19年参加なし※	1					
	18年参加あり-19年参加なし	0.812	0.296	-0.57	0.567	0.397	1.658
	18年参加なし-19年参加あり	0.467	0.250	-1.42	0.154	0.163	1.332
	18年参加あり-19年参加あり	0.398	0.138	-2.65	0.008	0.202	0.786

※=参照カテゴリ

*教育歴のその他(欠損含む)のカテゴリは、その他と欠損値カテゴリを統合させた値

(1.79%)であり、18年と19年両年参加していない群がフレイル該当者が最も高い結果であった。

最後に、18年から19年における趣味の会参加の経年変化と、フレイル発症との関連について、ロジスティック回帰分析による結果を表3に示す。18年参加なし・19年参加なしを参照カテゴリとしてオッズ比 (Odds Ratio: OR) を算出した結果、18年参加あり・19年参加なしでは、OR:0.812 (95%CI: 0.397-1.658)、18年参加なし・19年参加ありでは、OR: 0.467 (95%CI: 0.163-1.332)、18年参加あり・19年参加ありではOR: 0.398 (95%CI: 0.202-0.786) であった。どのカテゴリでも18年と19年両年に参加なしと比較すると、フレイルを抑制する傾向を示した。特に18年と19年に両年に参加ありの場合、フレイルが約60%減少する可能性が示唆された。

4. 考察

4.1 主な所見

本研究の結果、人々のつながりの一種である趣味の会への参加の経年変化と、フレイル発症との関連について、縦断的に検証した結果、継続的な趣味の会への参加は約60%フレイル発症を抑制できることが示唆された。また、統計学的な関連はなかったが、新規に参加した場合 (18年参加なし・19年参加あり) 約53%フレイル発症を抑制する傾向で、継続的な参加がない場合 (18年参加あり・19年参加なし) でも約19%フレイル発症を抑制する傾向であった。

4.2 趣味の会参加の経年変化とフレイル発症の機序 (メカニズム)

趣味の会参加の経年変化がフレイル発症に関連する機序として、第一に、趣味の会参加によって、歩行時間や外出頻度など身体活動量が増加することが考えられる。先行研究では、趣味の会等の社会参加をすることで、歩行時間が増えていることが報告されている⁹⁾。

第二に社会的サポートの増加である。Iizukaらの研究では、趣味の会への参加を含む社会参加は、社会参加していない人と比較して、社会的サポートを約43%得られることが報告されている¹⁰⁾。

これらの身体活動量や社会的サポートは、フレイル発症と関連があることから^{4・11)}、趣味の会への参加が継続されることで、身体活動量や社会的サポートが増加し、フレイル発症を抑制する機序があることが考えられる。

4.3 本研究の強みと限界

本研究は、長野県飯田市において趣味の会の経年変化とフレイル発症との関連を縦断的に検証した初めての研究である。先行研究では、ベースライン時の趣味の会への参加

は、フレイルリスクを約20%抑制するという報告があり¹²⁾、本研究の結果を指示する結果となっている。他方で、先行研究では、ベースライン時のみの趣味の会参加を検証した内容であり、趣味の会参加の「経年変化」について検証は行っていない。その意味で本研究で検証できたことは意義が大きく本研究の強みである。一方で、本研究の限界もあり、次の3つが挙げられる。一つは、回収率の影響である。本研究では、2018年のベースライン調査で6,000名へ調査票を配布し78.0%の回収率であり、調査票を返送してこない残り22%の対象者は、健康状態の低下から返送ができない可能性も否定できないため、フレイル該当者を過小評価していることが考えられる。二つは、追跡期間が1年間であることである。竹内らの研究では、3年間追跡調査を行いフレイル発症は10.8%であった。本研究のフレイル発症は1年間の追跡期間で3.82%であったが、趣味の会参加の経年変化とフレイル発症について、18年と19年の両年に参加ありのカテゴリのみ統計学的な関連が確認できた。しかし、その他の2つのカテゴリ (18年参加あり・19年参加なし、18年参加なし・19年参加あり) については、フレイル該当者の数が少ないため、統計学的な有意な関連がでなかったことが考えられる。他方で、本調査は2018年度から2020年度高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定に係る調査として実施されたが、2021年度から2023年度高齢者福祉計画・介護保険事業計画策定では、本調査は実施されていないため、長期追跡が実現できていない。追跡期間を長くしフレイル発症の割合の該当者が増えることで、趣味の会の経年変化との関連がさらに検証できる可能性がある。三つは、趣味の会の内容が把握できていないことである。本調査では、趣味の会の内容そのものは調査項目として含まれていないため、どのような趣味の会がフレイル予防につながるのかの検証ができず、今後検証すべき研究課題である。

5. 結論

本研究では、趣味の会参加の経年変化とフレイルとの関連を縦断的に検証した。その結果、2018年と2019年ともに、趣味の会に月1回以上参加している高齢者は、そうでない高齢者と比較してフレイル発症が抑制されていることが明らかとなった。市民としては、積極的に趣味活動に「継続的」に参加することが、フレイル予防としては望ましく、そのために行政としては、継続的に趣味参加ができる環境づくりが求められる。例えば、高齢者の移動支援は、趣味活動を継続的に行う上でも重要な施策であるため、その拡充は優先度が高いと考えられる。飯田市高齢者福祉計画・介護保険事業計画 (2021年度～2023年度) では、人々のつながりによる介護予防は示されており、本研究結果が施策の

一助となることが期待される。

謝辞

本研究の実施に際し、調査にご協力いただいた飯田市民、飯田市職員の皆さまに感謝申し上げます。また、本研究は、JSPS 科研 (21K17303) の助成を受けて実施しました。記して深謝します。

参考文献

- 1) 内閣府. 高齢社会白書. 全国官報販売協同組合. 2023.
- 2) 荒井 秀典. フレイルの意義. 日本老年医学会雑誌 = Japanese journal of geriatrics 2014; 51: 497-501.
- 3) Feng Z, Lugtenberg M, Franse C, et al. Risk factors and protective factors associated with incident or increase of frailty among community-dwelling older adults: A systematic review of longitudinal studies. PLoS One 2017; 12: e0178383.
- 4) Makizako H, Shimada H, Doi T, et al. Social Frailty Leads to the Development of Physical Frailty among Physically Non-Frail Adults: A Four-Year Follow-Up Longitudinal Cohort Study. Int J Environ Res Public Health 2018; 15.
- 5) 吉澤 裕世, 田中 友規, 高橋 競, 他. 地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係. 日本公衆衛生雑誌 2019; 66: 306-316.
- 6) Fuji Y, Sakaniwa R, Shirai K, et al. The number of leisure-time activities and risk of functional disability among Japanese older population: the JAGES cohort. Prev Med Rep 2022; 26: 101741.
- 7) Ling Ling, 辻 大士, 長嶺 由衣子, 他. 高齢者の趣味の種類および数と認知症発症: JAGES 6年縦断研究. 日本公衆衛生雑誌 2020; 67: 800-810.
- 8) Satake S, Senda K, Hong YJ, et al. Validity of the Kihon Checklist for assessing frailty status. Geriatr Gerontol Int 2016; 16: 709-715.
- 9) Ihara S, Ide K, Kanamori S, et al. Social participation and change in walking time among older adults: a 3-year longitudinal study from the JAGES. BMC Geriatr 2022; 22: 238.
- 10) Iizuka G, Tsuji T, Ide K, et al. Does social participation foster social support among the older population in Japan? A three-year follow-up study from the Japan gerontological evaluation study. SSM Popul Health 2023; 22: 101410.
- 11) Abe T, Nofuji Y, Seino S, et al. Healthy lifestyle

behaviors and transitions in frailty status among independent community-dwelling older adults: The Yabu cohort study. Maturitas 2020; 136: 54-59.

- 12) 竹内 寛貴, 井手 一茂, 林 尊弘, 他. 高齢者の社会参加とフレイルとの関連: JAGES2016-2019縦断研究. 日本公衆衛生雑誌 2023; 70: 529-543.



域学連携事業にみる 「関係人口・還流人口」創出の可能性に関する一考察 —学輪IIDA共通カリキュラムを事例に—

Possibility of creating "Relationship Population and Returning Population" through regional and academic collaboration projects:
A Case Study of the GAKURIN-IIDA Common Curriculum

和歌山県紀美野町 地域おこし協力隊 藤井 優希
追手門学院大学 地域創造学部 藤田 武弘

Yuuki Fujii
Kimino-cho Local Vitalization Cooperator in Wakayama Prefecture
Takehiro Fujita
Otemon Gakuin University

キーワード：域学連携、関係人口、還流人口、地域再生

Key Words : regional and academic collaboration, Relationship Population, Returning Population, regional revitalization

1. はじめに

人口減少や少子高齢化が進む農山村地域において、都市農村交流や「地域おこし協力隊」を始めとする地域サポート人材の導入等、地域外の人材が地域課題解決に重要な役割を果たすとして注目されている。また、地域外の人材が移住・定住をするという関わり方だけではなく、移住や定住まではしないものの、その地域に関心をもって関わり続けるという関わり方もある。近年では、そういった地域外の人材の地域との継続的な関わり方は「関係人口」という概念で定義され、農山村地域における課題解決に向けた新たな担い手となることが期待されている。

関係人口については、田中（2021）が空間、時間、態度の3点から検討して「特定の地域に継続的に関心を持ち、関わるよそ者」と定義している⁽¹⁾。なお、本論文では、田中の定義に基づき、ふるさと納税等により地域に訪問はしないが、特定の地域との関わりをもっている人に関しても関係人口に含めることとし、訪問の有無は問わないこととする。また、田中（2021）は、地域再生における関係人口の役割として「地域再生の主体を形成する」ことと「創発的な課題解決を促す」ことの2つを挙げ、それらを果たす上で、「条件となる地域住民との相互作用形式が、協働である」としている⁽²⁾。今後の地域づくりにおいて、よそ者と地域住民とがどちらも主体として対等な立場で協力して活動することが求められる。

地域づくりにおけるよそ者との「協働」の1つとして「域学連携」活動が実施されている。2010年度から総務省の事

業として取り組まれており、大学生と大学教員が「地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する」活動と定義されている⁽³⁾。大学が「域学連携」に取り組んでいる背景には、これまでの大学教育に関する政策が関与している。また、域学連携活動後にも、関係人口等として活動地域と何らかの関わりをもっている事例が見受けられる⁽⁴⁾。

以上のことから、大学生・高校生時に域学連携活動を経験した者へのアンケート・ヒアリング調査を通して、域学連携活動経験後の活動地域や農山村地域との関わり、活動経験の卒業後の活かされ方について分析し、地域との関わりの実態や学びの活かし方について明らかにし、域学連携にみる「関係人口・還流人口」創出の可能性について考察することとする。

2. 域学連携

2.1 域学連携の実施背景

現在、全国各地の大学と地域において「域学連携」活動が行われている。域学連携は、若者である大学生が継続的な地域での活動を通して地域で活躍できる人材に成長するだけでなく、地域側に気づきをもたらすとともに、地域住民等を地域課題解決の主体として形成する機能も果たすものであり、大学と地域の双方の人材育成についても重要視されていることがわかる。

また、域学連携に対しては、国や地方自治体による多く

表1 域学連携の実施背景となる国の動きと実施事業

年	域学連携に関する各省庁の動き
2005年	(文) 中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」 ・「社会貢献」を大学の「第3の使命」として捉えていくべきとされた
2006年	(文) 教育基本法改正
2007年	(文) 学校教育法改正
2008年	(文) 中央教育審議会答申「学士過程教育の構築に向けて」 ・体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れるべきとされた
2010年	(国) 国土形成計画（全国計画）策定 ・新たな公が位置付けられた
2012年	(文) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」 ・能動的学習（アクティブラーニング）について言及 (総) 域学連携事業に関する特別交付税措置開始
2013年	(文) 「地（知）の拠点整備事業（COC）」開始
2014年	(文) 「地（知）の拠点整備事業（COC）」終了 (総) 「域学連携」地域活力創出モデル実証事業実施 (総) 「域学連携」実践拠点形成モデル実証事業実施
2015年	(文) 「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」開始
2019年	(文) 「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」終了 (国) 新国土形成計画（全国計画）策定 ・対流の主体の1つとして大学が位置付けられた ・地方の大学等教育・研究機関の役割について言及

資料：「文部科学省ホームページ」、「国土交通省ホームページ」、「総務省ホームページ」より筆者作成
注：(文)は文部科学省、(国)は国土交通省、(総)は総務省を指す

の支援策が実施されている。なかでも国の支援事業としては、総務省が2010年度から2013年度にかけての4年間、「域学連携」地域づくり活動の推進のために併せて3つの事業を実施した。域学連携が広く実施されている背景には、このような国や地方自治体の支援事業による後押しも関係している。

また、本来は教育・研究のための機関である大学が、域学連携に取り組む政策的背景について確認する。表1は、大学側が「域学連携」に取り組む政策的背景について省庁ごとに整理した年表である。

2005年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」にて、「教育」、「研究」に続く、大学の第3の使命として「社会貢献」が位置づけられ、より直接的、広い意味での社会全体の発展への寄与が求められるようになった。2008年には、「国土形成計画（全国計画）」により、「新たな公」の1つとして位置づけられ、地域課題解決等のこれまでの行政サービスの担い手となることが求められるようになった。同じく2008年には、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において、双方向型の学習展開の1例として地域での体験活動が効果的であると明示された。2012年には、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」にて、「能動的学習（アクティブラーニング）」への転換の必要性が示された。さらに、文部科学省により、「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）」の2つの事業が実施された。当事業では、大学の所在地域社会に対する社会貢献として、地域

の将来の担い手育成に重点が置かれている。

ここまで、「域学連携」に関わる政策的背景について確認してきたが、大学において、「社会貢献」や「新たな公」としての役割、「アクティブ・ラーニング」等の双方向的な教育方法の実施、特に地方の大学において地元の担い手育成が求められる等の背景のもとで、「域学連携」に取り組む大学が増加してきた。

2.2 域学連携後の地域との関わり

取り組みが増えている域学連携であるが、地域に大学生や大学教員が1度来ただけに留まると、受け入れ側の疲労を生むのみに終わってしまう恐れもある。それでは、地域側は一過性で終わらせないためにどのような点に注意することが求められるだろうか。中塚・小田切（2016）は、「大学と大学生を、その地域の資本（キャピタル）とすることが出来るか」を挙げている。大学生は地域に居続けるものではないことから、関係性を維持することが重要であり、そのために交流を絶やさないことや、立場や能力等の情報を更新しながら把握すること等をしていくとよいとしている。域学連携を通して、大学教員・大学生を地域にとっての応援団や支援者つまり、関係人口としてその後も関わりを維持し、必要な時に再度結びつけられることの意義は大きいと考えられる。

域学連携後の大学教員や大学生の継続した関わり方の意義を確認したが、実際に大学教員や大学生は域学連携後に地域とどのようなつながりをもっているのだろうか。中塚・内平（2014）は、農山村地域におけるプロジェクト型の授業の受講終了後にも、学生が独自にボランティアや卒業論文・修士論文のテーマとして関わりをもち続けている例が出てきているとしている。河本（2019）は、ゼミ活動を通して関わっていた地域に3人の卒業生が移住、結婚を通して定住していることを明らかにしている。結婚や定住をする事例は稀であると考えられるが、域学連携後も大学の在学中・卒業後を問わず、地域の関係人口や定住人口として関わる人が存在している。

3. 学輪IIDAのあゆみと「学輪IIDA共通カリキュラム」

「学輪IIDA」は、飯田に調査、研究のために訪れていた大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するために2011年に設立された。2021年12月末日時点で、72大学・機関、139名の大学研究者が参画するネットワークとなっている。

学輪IIDAのこれまでの主な取組について表2に整理した。「学輪IIDA全体会」は、学輪IIDAに参加している大学研究者が飯田に会し、大学連携や学輪IIDAの取組に関する情報の共有、今後のあり方や取組の検討を行うとともに

表2 学輪IIDAの主な取組

年度	学輪IIDAの主な取組
2010年度	学輪IIDA設立、学輪IIDAプロジェクト会議設立
2011年度	学輪IIDA全体会開始、共通カリキュラム構築プロジェクト会議設立、旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議設立
2012年度	学輪IIDA全体会開催
2013年度	学輪IIDA全体会開催
2014年度	学輪IIDA全体会開催、機関誌「学輪」の発刊開始
2015年度	学輪IIDA全体会開催
2016年度	学輪IIDA全体会開催、知の拠点プロジェクト会議設立
2017年度	学輪IIDA全体会開催
2018年度	学輪IIDA全体会開催、共通カリキュラム実行委員会発足、高大連携事業開始
2019年度	学輪IIDA全体会開催、学輪インターユニバーシティオープンキャンパスプロジェクト設立、プロジェクトみらい設立
2020年度	学輪IIDA全体会開催、学輪IIDAスペシャルシンポジウムシリーズ「いいだの未来デザインを考える」実施、飯田学輪大学実施
2021年度	学輪IIDA全体会開催、飯田学輪大学実施

資料：飯田市（2022）「大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み」『学輪』第9号より筆者作成

表3 共通カリキュラム実施内容と参加者数

年度	フィールドスタディ (FS) のテーマ	参加大学【学生数】	参加高校【生徒数】
2012	ソーシャルキャピタル【導入科目】	名城、立命館、和歌山【25】	
2013	地域環境政策【展開科目】	名城、立命館、立命館アジア太平洋 (AP)【25】	
2014	ニューツーリズム【展開科目】	東洋、名城、立命館、和歌山【31】	
2015	ソーシャルキャピタル【導入科目】	東洋、名城、立命館、和歌山【36】	
2016	地域経営論【展開科目】	東洋、名城、立命館、立命館AP、和歌山【44】	
2017	地域文化論【展開科目】	静岡文化芸術、東洋、名城、立命館、和歌山【40】	飯田風越【13】
	ソーシャルキャピタル【導入科目】	東洋、名城、立命館、和歌山【57】	下伊那農業、飯田女子、飯田風越【23】
2018	地域経済【展開科目】	大月短期、静岡文化芸術、立命館【44】	
	遠山郷エコ・ジオパーク【実践科目】	京都外国語、東京農工、松本【11】	飯田HOIDE長姫、飯田女子【8】
	ソーシャルキャピタル【導入科目】	首都大学東京、同志社、東洋、名城、立命館【30】	飯田、飯田女子、飯田風越、下伊那農業【41】
2019	アグリイノベーション【展開科目】	大月短期、法政、立命館、和歌山【53】	飯田、飯田HOIDE長姫、飯田女子、下伊那農業【25】
	遠山郷エコ・ジオパーク【実践科目】	東京農工、松本【11】	飯田HOIDE長姫、飯田女子、飯田風越【15】
2020	地域づくりオンラインフィールドスタディ	大月短期、東洋、名城、立命館、和歌山【51】	
	遠山郷エコ・ジオパーク【実践科目】	麻布、東京農工、松本【12】	飯田HOIDE長姫、下伊那農業【11】
	ソーシャルキャピタル【導入科目】	大阪商業、東京都立、東洋、名城、立命館、和歌山【32】	飯田、飯田風越、下伊那農業、飯田女子【8】
2021	地域経済【展開科目】	大月短期、大正、東洋、法政、立命館【57】	飯田HOIDE長姫、下伊那農業、飯田女子【8】
	遠山郷エコ・ジオパーク【実践科目】	麻布、帝京科学、東京農工、松本【13】	飯田、下伊那農業、飯田女子【19】
	ソーシャルキャピタル+多様性社会【導入科目】	東洋、名城、立命館、和歌山【42】	飯田、飯田HOIDE長姫、飯田風越、下伊那農業、飯田女子【29】
2022	地域経済【展開科目】	大月短期、大正、大阪商業、京都外国語、和歌山【54】	飯田HOIDE長姫、飯田風越、下伊那農業、飯田女子【12】
	遠山郷エコ・ジオパーク【実践科目】	麻布、東京農工、松本【17】	飯田HOIDE長姫、飯田風越、下伊那農業【7】

資料：飯田市（2022）「大学連携会議の趣旨とこれまでの歩み」『学輪』第9号、43項、ならびに飯田市提供資料より筆者作成

に、学輪IIDAの取組を市民等の多くの方に知ってもらうことを目的に開催されている。誰でも参加可能な「公開セッション」と学輪IIDAメンバーによる「内部討議」の2部構成で開催されていて、「公開セッション」では、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告やテーマに沿ったパネルディスカッションや全体討議等を実施しており、「内部討議」では、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換や情報共有等を実施している。

その他、「旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議」や、「知の拠点プロジェクト会議」、飯田学輪大学を実施している「学輪インターユニバーシティオープンキャンパスプロジェクト」、「プロジェクトみらい」、「共通カリキュラム構築プロジェクト会議」等の多様なプロジェクトが実施されてきた。ここでは、設立当初から継続して実施されている「共通カリキュラム構築プロジェクト会議」について取り上げる。「共通カリキュラム構築プロジェクト会議」は2011年度から2017年度にかけて設置され、飯田の価値を共有化した「モデルカリキュラム」の作成と実践を通じて、

複数大学による新たな連携モデルの構築が目指された。7年間の実践を経て、本格展開の段階に移行するために2018年度からは「共通カリキュラム実行委員会」が発足した。より多くの大学が参加し学びあうことや、地元の高校教諭も参画しての高大連携の取組を展開していくこと等が目指されている。また、フィールドスタディの体系化と安定的な実施が行われ、導入科目、展開科目、実践科目の3つのプログラムが毎年実施されるようになった。共通カリキュラムは、市民・行政・大学が協働して飯田の価値を知り、発信し、新しい地域像をつくっていくことを目的とし、市民・学生・教員と一緒に学び、議論できるように座学とフィールドワークを組み合わせた構成で実施されている。基本的に夏季休暇中に3泊4日の行程で実施されているが、コロナ禍になった2020年度からは一部プログラムにおいて、ZOOMを用いたオンラインでの実施も行われるようになった。また、開始当初は大学生のみを対象としたプログラムであったが、2018年度以降は共通カリキュラムに高校生が本格的に参加している。なお、これまでに実施さ

れた共通カリキュラムと参加学生数については表3のとおりである⁽⁵⁾。

共通カリキュラムの4つの特徴について確認する。1つ目は、長期的な実践に基づいた体系的なカリキュラムの展開がなされていることである。2012年度から現在まで10年間にわたり共通カリキュラムの作成と実践が続けられており、これまでに計659人の大学生と、計143人の高校生の参加者がいる。また、導入科目・展開科目・実践科目が設定されており、それぞれのカリキュラムの位置付けが明確であることに加え、多様なカリキュラム展開が行われている。

2つ目は、複数の大学・高校の学生が同じ共通カリキュラムに参加し、一緒に学ぶスタイルが取られていることである。参加大学は学部がバラバラであり、基礎学問が異なる学生どうしが同じグループで学ぶことにより、新たな気づきや発見を得ることがある。また、2018年度からは地元の高校生も参加しており、高校生と大学生と一緒に学ぶ高大連携の要素も含まれている。これまでの学輪IIDA全体会の全体セッションにて、高校生と大学生がお互いに刺激を得ながら学びあっていることが指摘されている⁽⁶⁾。

3つ目は、これまでの共通カリキュラムが多様な開催形態で行われていることである。基本的に3泊4日の合宿形式で実施されてきたが、コロナ禍になった2020年度からは、ZOOMを用いたオンライン形式での実施や、高校生は現地から、大学生はZOOMにて参加するというハイブリッド形式での実施等も行われている。コロナ禍で多くの域学連携の活動が停滞してしまった中で、完全オンラインやハイブリッドの形で実施が続けられてきたことは、特徴的な事例であると考えられる。

4つ目は、共通カリキュラムへの参加後も学生が飯田と関わる事例が見受けられることである。大学生においては、ゼミ活動への参加や卒業研究等で飯田と関わることもある。また、高校生においては、國松(2020)が、飯田市内の各高校において、探究的な学びに近い科目である「課題研究」を開講しており、近年は地域性に富んだ研究が多くなってきていることを指摘している。加えて、共通カリキュラムに参加した高校生の学びや将来に対する意識の変化は低いものの、意識に変化があったと答えた高校生の中には実際に行動にも変化があった生徒もいたことを明らかにしている。このように、共通カリキュラムへの参加後に大学生・高校生ともに、意識的に飯田と関わる事例があることがわかっている。飯田を意識する学生が生まれることで、大学生においては、今後も飯田と関わる関係人口となる可能性が、高校生においては、卒業後に地域外に出たとしてもまた戻ってくる還流人口となる可能性がある。

表4 アンケート調査実施状況

アンケート回収結果	対象全数	回答件数	回収率(%)
高校卒業生		17	
高校在学学生		8	
合計	143	25	17.5
大学卒業生		50	
大学在学学生		23	
合計	621	73	11.8

資料：「学輪IIDA共通カリキュラム参加者向けアンケート調査」(2022)より筆者作成

表5 共通カリキュラムへの参加形態

	大学生				高校生			
	卒業生(n=50)		在学学生(n=23)		卒業生(n=17)		在学学生(n=8)	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
対面参加	42	84.0	1	4.3	16	94.1	3	37.5
オンライン参加	4	8.0	22	95.7	1	5.88	4	50.0
両方参加	4	8.0	0	—	0	—	1	12.5
合計	50	100	23	100	17	100	8	100

資料：表4に同じ

4. 域学連携事業にみる「関係人口・還流人口」創出の可能性

4.1 調査手法

学輪IIDA共通カリキュラムに参加した大学生・高校生が、共通カリキュラムへの参加後に飯田やその他の農山村地域とどのような関わりをもち、学びを活かしているのかを把握するために、まずは、学輪IIDA共通カリキュラムに参加した学生を対象にアンケート調査を実施した。既に卒業している人も対象に含むことから、2022年度までに2回以上共通カリキュラムに学生が参加している大学・高校を対象とした。アンケートは2022年8月10日から11月4日までの期間に、Google Formsを用いたオンライン形式で、大学生時参加者用と高校生時参加者用のそれぞれ卒業生用と在学学生用、計4種類を作成し、各大学・高校の教員より可能な範囲で卒業生と在学学生それぞれに配布し、オンラインにて回収した。表4のとおり、アンケートの対象者は大学生時参加者が621人、高校生時参加者が143人であり、有効回答件数は大学生時参加者が73件で回収率が11.8%、高校生時参加者が25件で回収率が17.5%であった⁽⁷⁾。なお、本アンケート調査は飯田市の協力を受けて実施した。

また、アンケート調査だけではわからない定性的な情報についても補うために、アンケート調査内でヒアリング調査への賛同を得た人のうち、実際に協力が得られた大学卒業生、高校卒業生それぞれ3名ずつへのヒアリング調査を2022年11月29日から12月14日に行った。

表6 現在の職業や進路選択に活かされているプログラム

	大学生				高校生			
	卒業生(n=50)		在学生(n=23)		卒業生(n=17)		在学生(n=8)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
グループワーク	19	38.0	8	34.8	9	52.9	4	50.0
フィールドワーク	16	32.0	2	8.7	6	35.3	2	25.0
ディスカッション	15	30.0	8	34.8	7	41.2	0	—
ヒアリング調査	12	24.0	1	4.3	1	5.9	2	25.0
全体発表	9	18.0	5	21.7	1	5.9	3	37.5
農家民泊	8	16.0	1	4.3	4	23.5	3	37.5
住民による講義	7	14.0	8	34.8	2	11.8	3	37.5
大学教員による講義	6	12.0	2	8.7	2	11.8	1	12.5
市長講義	6	12.0	3	13.0	3	17.6	2	25.0
農業・農村生活体験	5	10.0	1	4.3	2	11.8	0	—
アンケート調査	3	6.0	1	4.3	1	5.9	1	12.5
高校生・大学生との交流	3	6.0	0	—	7	41.2	4	50.0
事前学習	0	—	0	—	6	35.3	3	37.5
事後学習	0	—	0	—	2	11.8	0	—
ない	9	18.0	6	26.1	3	17.6	1	12.5
合計	118		46		56		29	

資料：表4と同じ

注：複数選択可の設定問である（以下ではMAとする）

表7 現在の職業や進路選択への活かされ方

	大学生				高校生			
	卒業生(n=50)		在学生(n=23)		卒業生(n=17)		在学生(n=8)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
仕事や学びに取り組む姿勢	24	48.0	9	39.1	9	52.9	4	50.0
地域住民の主体性の重要性への理解	21	42.0	9	39.1	9	52.9	3	37.5
地域に学生が関わることの意義の理解	13	26.0	3	13.0	7	41.2	5	62.5
活かされていると思うことはない	10	20.0	5	21.7	2	11.8	0	—
ふるさと学習の意義への理解	9	18.0	2	8.7	4	23.5	2	25.0
地域問題解決手法を学べた	5	10.0	3	13.0	4	23.5	4	50.0
現在の学び・仕事の分野を選択するきっかけになった	0	—	0	—	7	41.2	3	37.5
地域活性に取り組む活動・団体への参加	0	—	0	—	5	29.4	2	25.0
合計	82		31		47		23	

資料：表4と同じ

注：MA

表8 大学在学中の飯田との関わり

	卒業生(n=50)			在学生(n=23)		
	回答数	比率(%)	関わりあり(n=24)に対する比率(%)	回答数	比率(%)	関わりあり(n=6)に対する比率(%)
	関わりはなかった	26	52.0	—	17	73.9
ゼミや授業などでの研究の対象地・事例として調査・活動	17	34.0	70.8	2	8.7	33.3
友人など他人に飯田について紹介	9	18.0	37.5	1	4.3	16.7
観光目的での訪問	3	6.0	12.5	2	8.7	33.3
個人の研究の対象地・事例として調査・活動	3	6.0	12.5	1	4.3	16.7
住民の方とのメール等のやり取り	3	6.0	12.5	0	—	—
物産等の購入	2	4.0	8.3	0	—	—
ふるさと納税	1	2.0	4.2	0	—	—
農村ワーキングホリデーへの参加	1	2.0	4.2	0	—	—
学輪IIDA全体会への参加・発表	0	—	—	2	8.7	33.3
合計	65			25		

資料：表4と同じ

注：MA

4.2 アンケート調査結果

共通カリキュラムへの参加形態を整理したのが表5である。大学生、高校生ともに卒業生は対面参加者が多いが、在学生、在校生においてはオンライン参加者が多くなっている。

卒業生に対しては現在の職業に、在学生に対しては進路選択にそれぞれ活かされているプログラムを尋ねたところ、表6のとおりであった。大学生、高校生ともに「グループワーク」、「ディスカッション」が多い回答である。初めて出会った人どうしのグループワークやディスカッション等のコミュニケーション能力が問われる項目が仕事等に直接活かされやすいのではないかと考えられる。また、大学生においては、卒業生は「フィールドワーク」32.0%や「ヒアリング調査」24.0%の回答が多いのに対し、在学生は「住民による講義」34.8%の回答が多いという違いがある。こ

れは、先ほど確認した卒業生と在学生とで主な参加形態が異なることが要因であるが、オンラインの場合には住民による講義がフィールドワーク・ヒアリング調査の替わりでもあることから、同様の項目が進路に活かされていると考えてよいだろう。

卒業生に対しては現在の職業に、在学生に対しては進路選択にそれぞれどのように活かされているのかについて尋ねたところ、表7のとおりであった。全属性で回答が多かった項目が「仕事や学びに取り組む姿勢」である。その他は、大学生ならびに高校生の卒業においては「地域住民の主体性の重要性への理解」が、高校生の在校生においては「地域に学生が関わる意義の理解」や「地域問題解決手法を学べたこと」がそれぞれ多かった。

続いては、共通カリキュラム参加後の飯田との関わりについて、在学中、卒業後、今後の3つにわけて尋ねた結果

表9 大学卒業後の飯田との関わり

	卒業生(n=50)		
	回答数	比率(%)	関わりあり(n=10)に対する比率(%)
関わりはない	40	80.0	
観光目的での訪問	6	12.0	60.0
友人など他人に飯田について紹介	5	10.0	50.0
物産等の購入	4	8.0	40.0
仕事や研究での関わり	2	4.0	20.0
住民の方とのメッセージ等のやり取り	2	4.0	20.0
ふるさと納税	1	2.0	10.0
農村ワーキングホリデーへの参加	0	-	-
合計	60		

資料：表4に同じ

注：MA

表10 飯田の地域や住民との今後の関わり意向

	卒業生(n=50)		在学生(n=23)	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
はい	13	26.0	6	26.1
いいえ	5	10.0	3	13.0
どちらとも言えない	32	64.0	14	60.9
合計	50	100	23	100

資料：表4に同じ

注：単一回答の設問である（以下ではSAとする）

表11 飯田の地域や住民との今後の関わり意向の理由

	卒業生(n=50)		在学生(n=23)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
距離的に難しいから	25	50.0	11	47.8
魅力的な地域であると感じているから	20	40.0	6	26.1
プログラムでの関わりだけで満足したから	6	12.0	7	30.4
お世話になっているから	5	10.0	1	4.3
金銭的に難しいから	5	10.0	6	26.1
仕事など仕方ないから	4	8.0	1	4.3
これまでの関わりを続けたいから	3	6.0	2	8.7
関わることに意義を見出せないから	3	6.0	2	8.7
その他	4	8.0	1	4.3
合計	75		37	

資料：表4に同じ

注：MA

について大学生と高校生にわけて確認する。なお、飯田市内の高校に通う生徒の中には飯田市外から通っている人もいることから、自身の身近な地域について回答してもらう目的で高校生向けのアンケートにおいては飯田・下伊那と設定した。

まず、大学生の結果から確認する。在学中の飯田との関わりは表8のとおりであり、卒業生の5割、在学生の3割が何らかの関わりをもっていたことがわかる。飯田との関わりがあった人の中では「ゼミや授業等での調査・活動による関わり」が最も多く、卒業生は70.8%、在学生は33.3%であった。「個人の研究での関わり」も、卒業生は37.5%、在学生は16.7%あり、大学在学中においては研究に関する関わりをもっている学生が多いことがわかる。また、「観光目的での訪問」が卒業生は12.5%、在学生は33.3%、「物産等の購入」が卒業生で8.3%と、決して多いとは言えないが、研究目的以外の主体的な関わりも生まれていることがわかる。なお、卒業生・在学生ともに「関わりはなかった」との回答が一番多く、それぞれ52.0%、73.9%であった。特に在学生に関しては7割が「関わりはない」と答えているが、コロナ禍で、ゼミや授業等での関わりも実施できない事例があったり、訪問を躊躇せざるを

得なかったり等の外部環境の影響もあると考えられる。

卒業生を対象に、大学卒業後の飯田との関わりについて尋ねたところ、表9のとおりであり、2割が関わりをもっていることがわかる。多様な関わり方がみられるが、関わりがある人の中で、「観光目的での訪問」が60.0%、「友人等の他人に紹介」が50.0%、「物産等の購入」が40.0%であり、これらが比較的多い関わりである。また、表出していないが、大学在学中には関わりがなかったが、卒業後に観光目的で訪問する等、関わりを新たにもった事例も存在する。

今後の飯田の住民や地域との関わり意向を尋ねたところ、表10のとおりであった。卒業生、在学生ともに、約3割が「関わりたい」、約1割が「関わりたくない」、約6割が「どちらとも言えない」となっている。表出していないが、大学在学中・卒業後ともに関わりがないが、今後も関わりたいと回答している人も少数ながらいて、実際の関わりはないものの飯田のことを意識している潜在的な関係人口が創出されていることがわかる。さらに、今後の関わり意向の理由を尋ねたところ、表11のとおりであった。最も多い理由が「距離的に難しい」であり、卒業生は50.0%、在学生は47.8%である。関東圏や関西圏等の遠方から共通カリキュラムに参加する大学が多い中で、飯田と

表12 高校在学中の飯田・下伊那との関わりの変化

	卒業生(n=17)			在校生(n=8)		
	回答数	比率(%)	変化あり(n=12)に対する比率(%)	回答数	比率(%)	変化あり(n=5)に対する比率(%)
変化なし	5	29.4		3	37.5	
フィールドスタディで関わった地区への関心が高まった	9	52.9	75.0	4	50.0	80.0
フィールドスタディで関わった人との交流を行った	4	23.5	33.3	1	12.5	20.0
地域行事への参加回数が増えた	3	17.6	25.0	0	—	—
地域と関わる授業や活動に積極的に参加するようになった	3	17.6	25.0	1	12.5	20.0
公民館活動への参加回数が増えた	1	5.9	8.3	0	—	—
合計	25			9		

資料：表4に同じ

注：MA

表13 高校卒業後の飯田・下伊那との関わり

	卒業生(n=17)	
	回答数	比率(%)
お盆や正月での帰省	7	41.2
親や親戚との面会のための帰省	7	41.2
友人などと交遊のための帰省	7	41.2
友人など他人に飯田について紹介	3	17.6
地域行事への参加	2	11.8
物産等の購入	2	11.8
仕事や研究目的での関わり	1	5.9
関わりはない	1	5.9
在住	8	47.1
合計	30	

資料：表4に同じ

注：MA

表15 今後の飯田・下伊那との関わり意向の理由

	卒業生(n=17)		在校生(n=8)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
出身地だから	11	64.7	3	37.5
地域の良さを実感しているから	10	58.8	6	75.0
友人や知人がいるから	10	58.8	3	37.5
親や親戚がいるから	8	47.1	1	12.5
仕事や生活の場があるから	6	35.3	0	—
地域活性に携わりたいから	5	29.4	4	50.0
合計	50		17	

資料：表4に同じ

注：MA

の距離的な隔たりが大きいと感じていることがわかる。卒業生は、在學生と比べて、「魅力的な地域であると感じている」「お世話になっている」との回答が多く、対面で共通カリキュラムに参加した学生の方が住民とより濃い関係性をもっていることが推測できる。一方、オンラインでの参加者がほとんどである在學生は、「距離的に難しい」に加え、「プログラムでの関わりだけで満足した」が30.4%、「金銭的に難しい」が26.1%であり、ネガティブな回答の割合が高くなっている。オンラインでの共通カリキュラム実施が続く中で、その後の関わりを創出するためには工夫

表14 今後の飯田・下伊那との関わり意向

	卒業生(n=17)		在校生(n=8)	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
積極的に関わりたい	13	76.5	7	87.5
やや関わりたい	2	11.8	1	12.5
どちらとも言えない	2	11.8	0	—
あまり関わりたいくない	0	—	0	—
関わりたいくない	0	—	0	—
合計	17	100	8	100

資料：表4に同じ

注：MA

が必要であると考えられる。

続いて、高校生の結果について確認する。在学中の飯田・下伊那との関わりの変化については表12のとおりである。卒業生の70.6%、在校生の62.5%に変化があり、「フィールドスタディで関わった地区への関心が高まった」人が最も多い。また、卒業生の中には、「地域行事への参加回数が増えた」人や「地域と関わる授業や活動への姿勢が変わった」人がどちらも25.0%と一定数いることがわかる。

卒業生を対象に、卒業後の飯田・下伊那との関わりについて尋ねたところ、表13のとおりであった。「在住」の47.1%が最も多く、それ以外が他地域居住者の回答である。他地域居住者の回答の中では、「帰省」がいずれも41.2%で最も高くなっている。また、「地域行事への参加」や「物産等の購入」が11.8%、4年制大学進学者による「仕事や研究目的での関わり」も5.9%と割合は小さいが、多様な関わりがあることがわかる。また、卒業生の中で飯田との関わりがないのは1人のみであり、ほとんどの人が何らかの形で飯田との関わりを維持していることがわかる。

今後、飯田・下伊那との程度関わりたいか尋ねたところ、表14のとおりであった。「積極的に関わりたい」との回答が卒業生は76.5%、在校生は87.5%であり、非常に高い割合であると考えられる。今後の関わり意向の理由を尋ねたところ、表15のとおりであった。卒業生においては、「出

表16 共通カリキュラム参加後における飯田以外の農山村地域との関わり意向

	大学生				高校生			
	卒業生(n=50)		在學生(n=23)		卒業生(n=17)		在學生(n=8)	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
関わりたい	20	40.0	9	39.1	13	76.5	6	75.0
関わりたくない	21	42.0	8	34.8	4	23.5	1	12.5
共通カリキュラム参加前から関わっている農山村地域あり	9	18.0	6	26.1	0	—	1	12.5
合計	50	100	23	100	17	100	8	100

資料：表4と同じ

注：SA

表17 飯田以外の農山村地域に対する具体的な変化

	大学生				高校生			
	卒業生(n=29)		在學生(n=15)		卒業生(n=13)		在學生(n=6)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
地域の課題解決への関心が高まった	16	55.2	5	33.3	8	61.5	1	14.3
地域の良さを再認識した	15	51.7	9	60.0	8	61.5	5	71.4
農山村地域への憧れを感じた	7	24.1	3	20.0	4	30.8	3	42.9
特定の農山村地域と関わってみたいと思った	4	13.8	2	13.3	0	—	0	—
地域行事、地域活動への参加	4	13.8	2	13.3	3	23.1	1	14.3
物産等の購入	4	13.8	1	6.7	3	23.1	0	—
ご近所づきあいへの関心が高まった	2	6.9	2	13.3	3	23.1	0	—
地域のことについて勉強した	2	6.9	1	6.7	5	38.5	2	28.6
繰り返し訪問するようになった	2	6.9	0	—	0	—	0	—
自治会等への加入、地域の集まりへの参加	1	3.4	0	—	1	7.7	1	14.3
地域内でつながりを作るようになった	1	3.4	0	—	3	23.1	1	14.3
特に変化はなかった	5	17.2	1	6.7	1	7.7	1	14.3
合計	58		26		39		15	

資料：表4と同じ

注：MA

身地」の64.7%や、「地域の良さを実感」の58.8%、「友人や知人の存在」の58.8%が多い回答である。卒業生においてはすでに地域外に住んでいる人もいる中で、地縁の関係性が関わりたい理由の1つとなっていることがわかる。在學生においては、「地域の良さを実感」の75.0%や、「地域活性に携わりたい」の50.0%が多く、地縁よりも、地域活性化への意識から関わりたいと考えている人が多いことがわかる。

ここからは、飯田以外の農山村地域との関わりについて尋ねた結果について確認する。共通カリキュラム参加後の飯田以外の農山村地域との関わり意向を尋ねたところ、表16のとおりであった。「関わりたい」と「参加前から関わっている地域がある」をあわせると大学卒業生は58.0%、大学在學生は65.2%、高校卒業生は76.5%、高校在學生は87.5%である。共通カリキュラムを通して、飯田だけでなく、他の農山村地域への関心も育まれていることがわかってともに、大学生、高校生ともに在學生の割合の方が少し高いことから、地域に関わりたいと考え、意識的に農山村地域と関わっている学生が増えてきていると考えられる。

飯田以外の農山村地域と関わりたいと回答した人に対し、農山村地域に対する変化を尋ねたところ、表17のとおりであった。卒業生では「地域の課題解決への関心が高まっ

た」が大学卒業生は55.2%、高校卒業生は61.5%と最も多いのに対し、在學生では「地域の良さを再認識した」が大学在學生は60.0%、高校在學生は71.4%と最も多く、卒業生と在學生の傾向の違いが表れている。なお、行動変化と意識変化では意識変化の方が強く表れているが、大学生と高校生のどちらにおいても在學生より卒業生の方が行動変化が多く見受けられた。

飯田以外の農山村地域と関わりたいと回答した人に対し、変化に影響した共通カリキュラムでの経験を尋ねたところ、表18のとおりであった。全属性において「地域づくりに取り組む地域住民と関わったこと」との回答が1番多い。大学卒業生においては、「農業・農村生活体験や農家民泊」との回答が41.4%と多く、地域住民との交流が大きな影響を与えていることがわかる。それは、オンラインでは十分な経験ができない可能性があることも示しているが、大学在學生のその他の回答として、「オンラインだったこと。映像では愛着がわかないことが分かったので、自分の足で実際に訪れないとだめだと思った」とあったことから、オンラインでの参加がきっかけで、農山村地域や飯田への関心が高まったり、実際に訪問する等の行動に繋がったりする可能性があると考えられる。また、高校在學生においては、「大学生と交流したこと」との回答が、卒業生

表18 飯田以外の農山村地域との関わり意向に影響した経験

	大学生				高校生			
	卒業生(n=29)		在学生(n=15)		卒業生(n=13)		在校生(n=6)	
	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)	回答数	比率(%)
地域づくりに取り組む地域住民と関わったこと	20	69.0	11	73.3	9	69.2	5	71.4
農業・農村生活体験や農家民泊	12	41.4	2	13.3	4	30.8	2	28.6
他大学生・高校生と交流したこと	9	31.0	2	13.3	4	30.8	2	28.6
調査に取り組んだこと	9	31.0	1	6.7	6	46.2	1	14.3
市長の話を聞いたこと	4	13.8	3	20.0	3	23.1	1	14.3
学んでいることと異なる分野に触れたこと	4	13.8	2	13.3	0	—	0	—
高校生・大学生と交流したこと	2	6.9	0	—	6	46.2	4	57.1
影響したことはない	6	20.7	1	6.7	1	7.7	1	14.3
その他	0	—	1	6.7	0	—	0	—
合計	66		23		37		19	

資料：表4に同じ

注：MA

表19 ヒアリング対象者の属性一覧

		大学生			高校生		
		Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん
共通カリキュラム参加回数		1	1	2	3	2	1
参加プログラム名		ニューツーリズム	地域経営論	ソーシャルキャピタル 地域づくりオンライン	ソーシャルキャピタル アグリノベーション 遠山郷	アグリノベ ション 遠山郷	アグリノベ ーション
出身大学・高校		和歌山大学	和歌山大学	和歌山大学	下伊那農業高校	OIDE長姫高校	下伊那農業高校
卒業年度		2015年度	2018年度	2021年度	2019年度	2019年度	2021年度
卒業後の進路		教育・学習支援業	卸売業	起業準備中	公務	4年生大学進学	4年生大学進学
飯田との関わり	在学中	○	○	×	○	○	○
	卒業後	○	○	×	◎	○	○
	今後	○	△	○	○	○	○
農山村地域との関わり	在学中	○	○	○	○	○	○
	学輪後	○	○	○	○	○	○

資料：「学輪IIDA共通カリキュラム参加者向けアンケート調査」（2022）、「学輪IIDA
共通カリキュラム参加者向けヒアリング調査（2022）より筆者作成

注：○…関わりあり、△…どちらとも言えない、×…関わりなし、◎…在住

は46.2%、在校生は57.1%で2番目に多い回答である。地域住民や大学生等の年齢や立場の違う人との交流・活動経験により、視野が広がる等の効果があり、飯田・下伊那以外の農山村地域への意識も高まっていると考えられる。

4.3 卒業生へのヒアリング調査結果

ここからは、大学卒業生、高校卒業生それぞれ3名ずつに行ったヒアリング調査の結果についてまとめ、具体的な地域との関わりやその背景にある思いや考え、共通カリキュラムでの学びや経験がどのように活かされているのかについて確認する。なお、今回ヒアリング調査を行った人の属性については表19に、ヒアリングの内容については、大学卒業生を表20に、高校卒業生を表21にまとめている。

<Aさん>

飯田とは、ゼミでの関わりや観光、物産等の購入等の関わりをもっている。現在は、学輪IIDAに大学教員として参加しており、教員としても共通カリキュラムに参加している。飯田には何度訪れても新しい学びが得られることか

ら、自身の学びのためにも今後も関わりたいと考えている。また、大学教員として、現場に出て学びたいと考える学生を1人でも増やしたいと考えている。飯田以外の農山村地域とも在学中から関わりをもっており、卒業後もコロナ禍前までは交流を続けていた。今後も、少しでも得たものを還元するために各地域と関わりたいと考えている。

フィールドスタディのプログラムの構成がゼミ運営の参考になっていたり、グループワークのやり方や連携の取り方等の実務的なところで参考になっていたりする等、共通カリキュラムそのものが現在の仕事に活かされている。

<Bさん>

飯田とは、飯田のことを他人に紹介したり、市役所の人と一緒に勉強をしたりといった関わりがある。共通カリキュラムのグループが同じだった高校生と現在もInstagramで繋がっている。農産物や商品に「飯田」や「長野」という文字を見ると意識的に手に取る等、飯田に対する意識が芽生えている。飯田以外の農山村地域とも在学中から関わりをもっており、卒業後も1年に1度ではあるが、

表20 ヒアリング内容一覧（大学卒業生）

	大学生		
	Aさん	Bさん	Cさん
在学中の飯田との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミでの関わり ・農家との交流 ・ゼミの卒論調査同行 ・観光目的での訪問 	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田のことを他人に紹介 ・飯田市役所の人とゼミで一緒に勉強 ・大学で行われた当時の飯田市長の講演を聴講 	<ul style="list-style-type: none"> ・農家民泊をした農家に手紙を送り、返信が返ってきた
卒業後の飯田との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・観光目的での訪問 ・物産等の購入 ・ふるさと納税 ・学輪IIDAや共通カリキュラムに大学教員として参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田のことを他人に紹介 ・グループで同じだった高校生とInstagramで繋がっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的な関わりはない
飯田や学輪IIDAへの思い	<ul style="list-style-type: none"> ・何度訪れても新しい学びがある ・自身の学びのためにも今後も関わりたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・農産物や商品に飯田や長野という文字を見ると意識的に手に取ってしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年後にフィールドスタディに参加した友人が手紙が飾られているのを発見した
在学中の農山村地域との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・和歌山県内3箇所、岩手県1箇所、鳥取県1箇所 ・農業・棚田保全支援や高大連携への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・和歌山県内1箇所、岩手県1箇所 ・農業・棚田保全支援への参加 ・岩手県については、1年に1回程度のお米や手紙のやり取り 	<ul style="list-style-type: none"> ・和歌山県内4箇所程度 ・農業支援や高大連携への参加
卒業後の農山村地域との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・和歌山2箇所、岩手1箇所についてはコロナ禍前までは交流があった ・今後も、少しでも得たものを還元するために関わりたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・和歌山県の1箇所については、コロナ禍前まで1年に1度の交流会や年賀状での関わり ・大学で関わった地域にはこれからも何らかの形で関わりたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・高大連携で関わった高校生との関わりがあり、助けてもらっている ・大学生の時に関わった人との人脈に助けられている
共通カリキュラムの経験の活かされ方	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディのプログラムの構成が大学教員としてのゼミ運営の参考になっている ・他にも、地域との連携の取り方やグループワークのやり方等の実務的なところで参考になっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・りんご並木の話からみんなの常識（共通認識）を作り上げる姿勢の凄さを感じている 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディを通じて出会った先輩とのつながり ・自分から飛び込んでいくきっかけになった ・現場のことは現場で聞かないとわからないことがわかった
高大連携について	<ul style="list-style-type: none"> ・地元のことでは元々の高校生が知っているので、大学生の引き出す力が重要である ・話を引き出す等のコミュニケーション能力が問われるのは、高校生を相手にした際にだけ言えることではなく、学年の異なる大学生どうしでも同じである 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディにてシェアスペースを開設した高校生の話を聞き、高校生が自分たちの居場所を作ったことに驚いた ・自身が高校生の時にはここまで考えたり、行動したりできなかった ・素晴らしい高校生に感化されてフィールドワークに出るようになった 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディでは高校生の印象が薄く、高校生の話をもっと聞きたかったと感じた

資料：表19に同じ

表21 ヒアリング内容一覧（高校卒業生）

	高校生		
	Dさん	Eさん	Fさん
在学中の飯田との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な地域行事に参加 ・人形劇フェスタ ・市民大学講座 ・高校3年時に市田柿をテーマに研究 	<ul style="list-style-type: none"> ・高校の地域人教育のプログラムで地域活動に参加し、地域の人の思いに触れる機会に恵まれていた 	<ul style="list-style-type: none"> ・高校の部活動にてブランド鶏を育成 ・学輪IIDA全体会に2回参加 ・地域のイベント等に登壇
卒業後の飯田との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田に在住し、飯田市役所に勤務 ・仕事として様々な地域行事に参加 ・成人式の実行委員に参加 	<ul style="list-style-type: none"> ・帰省 ・大学の友人と旅行 	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田の現場で働きたいという思いのもとで、「耕作放棄地」の対策のために起業することも視野に入れている
飯田や学輪IIDAへの思い	<ul style="list-style-type: none"> ・進学者が多く若者が少ない中で、地区のことに若い人が関わることの意義を感じている 	<ul style="list-style-type: none"> ・18年間過ごしてきた場所であり、心地よさを感じているので、機会があれば関わりたい ・地域外で得た知識・スキルをもってUターンして、地元周辺の地域に貢献できる活動ができればと考えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田のここがすごいところを教えてください ・フィールドスタディは人生を変えてくれた ・リニアが開業しても今の当たり前が変わらないで欲しい
卒業後の農山村地域との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・遠山郷でのフィールドスタディを通じて、閉鎖的ではないかという先入観を覆され、どの人もウェルカムであることを知った ・自然が楽しめる田舎に対する良さを認識した 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の農山村地域に関わることで、出身地と重ねながら、当事者意識をもって活動しやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学では農業実習やプロジェクト活動を行う部活に加入 ・他地域との比較から地元を見つめ直すことができるので、今後も関わりたい
共通カリキュラムの経験の活かされ方	<ul style="list-style-type: none"> ・りんご並木や他の住民の活動の話を通して、中学生をはじめとする住民が主体的に活動することの意味を改めて実感した 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の推薦入試に向けた経験づくりができた ・理論を学び、行動に移すという大学の学び方に触れることができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドスタディで学んだ4つのキーワードを今も大切にしている ・高校・大学での学びや経験の原点がフィールドスタディである
高大連携について	<ul style="list-style-type: none"> ・年上である大学生と一緒に話し合ったり、意見を伝えたりすることに不安があったが、大学生がフォローしてくれ、大人だなと感じた ・仕事でも年上の人に意見を伝えることはあるので、経験できていて良かった 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生が自然豊かな環境に驚いているのが新鮮であった ・都市部や遠くから訪れた人にとっては、生活している場所が観光資源・魅力だということを改めて感じた 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生が自身が思いつかないことや知らないことをたくさん発言していた ・そこから、大学は様々な視点から学ぶことができる場所であるという大学に行く意味を見つけることができた

資料：表19に同じ

農産物や交流会を通じた関わりを維持している。飯田も含めて、大学で関わった地域にはこれからも何らかの形で関わりたいと思っている。

飯田のりんご並木のりんごが捕られることがない等、みんなの常識や共通認識を作り上げることができる飯田のまちや住民の姿勢の凄さを後々になって振り返ってみて強く感じている。抽象的ではあるが、共通カリキュラムの経験が活かしている部分がある。フィールドスタディにて、シェ

アスペースを開設した高校生の話を聞き、自身が高校生の時にはここまで考えたり、行動したりしていなかったのが驚いた。こんなことをしている高校生がいるのかと思いき、高校生に負けられないように頑張らなければと刺激を受けて、フィールドワーク等の活動に積極的に取り組むようになった。

<Cさん>

飯田とは、大学在学中に関わりがあり、農家民泊をした

農家に他の参加者と一緒に手紙を送ったところ、返信が返ってきた。1年後にフィールドスタディに参加した友人が、送った手紙が農家のお宅に飾られているのを発見したことを知り、素直に嬉しいと思った。このエピソードもあり、飯田に対する印象は良く、今後も何らかのきっかけがあれば関わりたいと思っている。飯田以外の農山村地域とも在学中から関わりをもっており、卒業後もスペースを貸してもらおう等助けてもらうこともある。大学生の時に関わった人との人脈に助けられているので、在学中に色々な地域活動に参加していたことは良かったと感じている。

共通カリキュラムは、大学入学当初に、ほとんどフィールドワークに参加することがなかった時に参加したため、自分から飛び込んでいくきっかけになったり、現場のことは現場で聞かないとわからないことを学んだり、色々なことを学ぶことができた。共通カリキュラムでは、高校生の印象は薄く、高校生の話をもっと聞きたかったと感じた。また、オンラインフィールドスタディにも参加したが、現地の空間を感じられないことやプライベートで話す時間がないこと等から、オンラインでのフィールドスタディは対面時と比べて印象が薄いと感じた。

<Dさん>

在学中には、人形劇フェスタにスタッフとして参加したり、公民館で行われている市民大学講座に参加したりする等、様々な地域行事に参加してみたり、高校3年生の時には、課題研究の授業にて地域の特産物である「市田柿」をテーマに研究を行ったりした。また、学輪IIDA全体会でも発表を行った。卒業後は飯田に在住し、市役所にて勤務している。仕事の一環として様々な地域行事に参加したり、成人式の実行委員に参加したりする等の地域との関わりをもっている。進学者が多く、若者が少ない中で、地区のことに若い人が関わることの意義を感じていて、今後も積極的に関わりたい。

遠山郷でのフィールドスタディに参加し、田舎であり閉鎖的ではないかという先入観が覆され、どの人もウェルカムであるということを知ることができた。このことを通して、自然が楽しめる田舎に対する良さを認識した。りんご並木の話や他の住民の活動の話を通して、住民が主体的に活動することの意味を改めて実感した。その経験は、行政で働いていく中で、活かされていくと思われる。年上である大学生と一緒に話し合ったり、意見を伝えたりすることが、仕事でも同じことがあるので、その経験は活かされていると感じている。

<Eさん>

在学中には、フィールドスタディへの参加をきっかけに、高校の地域人教育のプログラムに積極的に参加するようになり、そこでの地域活動への参加により地域の人の思いに触れる機会に恵まれていたと感じている。卒業後は、帰

省や大学の友人との旅行等の飯田との関わりがある。長野県内の大学に通っているが、南信の地域は離れていて、なかなか関われないのがもどかしい。飯田・下伊那は18年間過ごしてきた場所であり、心地よさを感じているので、機会があれば関わりたいと感じている。また、地域外で得た知識やスキルをもって、いつかはUターンをして、地元周辺の地域に貢献できる活動ができればと考えている。他出する人が多い地域であるので、住んでいる人に魅力的な地域であると感じてもらいたい。他の農山村地域に関わることで、出身地と重ねながら、当事者意識をもって活動しやすく、今後も関わっていきたくと考えている。

共通カリキュラムへの参加の理由として大学の推薦入試に向けた経験づくりがあったので、それが達成されたことが活かされたことの1つである。自身が驚くことのない、自然豊かな環境に対し、大学生が驚いていることが新鮮であった。都市部や遠くから訪れた人にとっては、自身が生活している場所が観光資源・魅力であるということを感じた。

<Fさん>

在学中には、高校の部活動にてブランド鶏を育成したり、学輪IIDA全体会や地域のイベント等への参加・登壇したりする等の関わりがあった。大学卒業後には、飯田の現場で働きたいという思いのもとで、「耕作放棄地」の対策のために起業することも視野に入れている。

フィールドスタディは「人生を変えてくれた」存在であり、高校・大学での学びや経験の原点である。フィールドスタディで飯田の凄いところを学んだり、そこで学んだ農山村地域に関する4つのキーワードを今でも大切にしたりする等、フィールドスタディでの経験がその後に大きく影響している。大学では、農業実習や農村でプロジェクト活動を行う部活に入部しており、他地域との比較から地元を見つめ直すことができるので、飯田・下伊那以外の農山村地域とも今後も関わりたいと考えている。

共通カリキュラムでは、自身では思いつかないことや知らないことを大学生がたくさん発言しており、大学は様々な視点から学ぶことができる場所であることを知ることができた。当時は大学に通う意味を探していたが、このことがきっかけに大学に行く意味を見つけることができたため、大学生と一緒に学ぶことに意義を感じた。

5. おわりに

ここまで、調査結果について確認してきたが、それらを踏まえて、域学連携活動経験後の学生の地域との関わりの実態と域学連携で学んだことがどのように活かされているのかについてまとめた上で、域学連携活動のもつ「関係人口・還流人口」創出の可能性について考察する。

まず、域学連携後の学生の地域との関わりについて確認する。大学生においては、アンケート調査により、在学中には卒業生で5割、在學生で3割の人が、卒業後も2割の人が飯田との関わりをもっていることがわかった。また、ヒアリング調査を通して、手紙のやり取りやSNSでのつながり、飯田の人と一緒に学んだ等のアンケートでは見えなかった新たな関わりがあることがわかった。また、高校生においては、アンケート調査により、在学中に飯田・下伊那地域との関わりに変化があった人が卒業生は7割、在校生は6割いることがわかった。また、卒業後、他地域に住んでいる人のうち、1人を除いて飯田・下伊那地域との関わりを維持していることもわかった。さらに、ヒアリング調査を通して、在住者、他地域居住者ともに、飯田・下伊那への強い地元愛をもっており、他地域居住者においてはUターンを強く意識していることがわかった。

域学連携活動経験の活かされ方としては、アンケート調査から、仕事や学びに取り組む姿勢や地域住民の主体性の重要性への理解、地域に学生が関わる意義への理解が活かされている項目として多く挙げられていた。また、ヒアリング調査により、共通カリキュラムでの経験がゼミ運営の参考になっていたり、大学に進学する選択をしったりといった直接的に影響している事例に加え、りんご並木の規範の話や手紙が飾られていて良い印象をもったといった心理的な影響を与えている事例もあることがわかった。

それらの効果をもたらすプログラムとして、アンケートでは、グループワークやディスカッション、大学生と高校生の交流等のコミュニケーションに関するものや、フィールドワークや農家民泊、オンラインにおいては住民による講義等の地域の現場の方の話を聞く学びに関するものが特に挙げられていた。これらの効果の中で、特に高校生にとって効果が大きいと考えられるのが大学生との交流である。ヒアリング調査では、「都市部や遠くから訪れた人にとっては、自身が生活している場所が観光資源・魅力であるということに改めて感じた」とEさんが述べているように、飯田以外の地域から来る大学生と一緒に学ぶことによって、地域の魅力や価値を再認識する「鏡効果」が起こっていることが確認できた。他にも、大学の学びに触れたことで大学への進学を決めたり、大学生の大人な姿を見て刺激を受けたりといった効果もあったことがヒアリング調査からわかった。一方、大学生においては、アンケート調査からは高校生との交流の効果についてはあまり見受けられなかった。しかしながら、ヒアリング調査を通して、高校生に負けないように頑張らなければと刺激を受けてフィールドワーク等の活動に積極的に取り組むようになったBさんの事例のように、大学生も高校生から刺激を受けており、お互いに学びを得ていることが確認できた。ただ、高校生より大学生の方が交流の効果を感じられていないと考えら

れるため、今後、高大連携を進めていく上で、大学生にとっての高校生との交流や一緒に学ぶ意義について大学生に周知する必要があるだろう。この点に関して、ヒアリング調査でAさんが発言している「地元のことは地元の高校生が知っている」ということがキーワードになると考えられる。大学生は、高校生が話すのを待つのではなく、上手く高校生から地元の話を引き出す工夫が求められ、地元の高校生から聞くリアルな情報からより学びを深めることができる。今後は、このメリットを大学生に対し、しっかりと伝えていくことが求められるだろう。

ここからは、域学連携活動のもつ「関係人口・還流人口」創出の可能性について確認する。なお、飯田市は、共通カリキュラムへの参加の経験を飯田市に限らず全国の農山村地域において活かしてほしいと考えていることから、飯田・下伊那に限らず、他の農山村地域への関わり意向も含めた関係人口の創出の可能性について考察する。

アンケート調査より、大学生の約3割が今後も飯田と関わりたい、約6割が今後も飯田以外の農山村地域と関わりたいと考えていることがわかった。ヒアリング調査からは、Bさんが「農産物や商品に「飯田」や「長野」という文字を見ると意識的に手に取ってしまう」と述べていることや、Cさんが「飯田に対する印象は良いものであり、今後も何らかのきっかけがあれば関わりたいと思っている」と述べているように、今後も関わりたいと思っている多くの大学生において、共通カリキュラムでのそれぞれのきっかけを経て、飯田や他の農山村地域に対する何らかの意識づけがなされていると考えられる。卒業後の関わりの実態をみても、直接的な関わりに結びついていることは少ないと言えるが、意識づけを通して、非訪問・潜在的な関係人口が創出され、地域に何かあった時や何らかのきっかけがあった時に関わる・助けてくれる存在になっていると考えられる。今後は、このような非訪問・潜在的な関係人口を将来的に顕在化させるためのフォローアップも必要だろう。

続いて高校生においては、アンケート調査により、約8割が今後も飯田・下伊那と積極的に関わりたい、約7割が今後も飯田・下伊那以外の農山村地域と関わりたいと考えていることがわかった。また、ヒアリング調査により、Fさんが「フィールドスタディは人生を変えてくれた」と述べているように、共通カリキュラムへの参加を通して多くの学びを得ており、それが地元愛の育成、還流人口の創出に繋がっている。高校卒業後に飯田・下伊那以外の地域に出ても、地域のことを意識し続けるEさん、Fさんの事例や、高校在学中から地域行事等に参加し、地域に積極的に関わっていかこうとするDさんの事例がそれを象徴している。また、Eさん、Fさんがともに他地域との関わりを通して地元を見つめ直すことが他の農山村地域に関わるメリットであると述べているように、飯田への愛着と同時に、視野

を広げて、飯田・下伊那以外の農山村地域への関心も創出していると考えられる。

謝辞

本調査の実施に際し、多大なるご尽力とご協力をいただきました飯田市企画部大学誘致連携推進室の皆様および、共通カリキュラム参加者の皆様、参加大学・高校の先生の皆様方に感謝申し上げます。

注

- (1) 田中 (2021), 77頁
- (2) 前掲 (1), 292頁
- (3) 総務省 (n.d.) 「域学連携」地域づくり活動https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html (最終閲覧日: 2023年11月28日)
- (4) 河本 (2019) は、ゼミ活動を通して関わっていた地域に3人の卒業生が移住したことを明らかにしている。また、筒井・海老原・図司・佐久間 (2008) は、「地域づくりインターン事業」に参加後もほとんどの人が地域との関わりをもっており、地域への再訪問や継続して連絡を取り合う等の関わりをもっている人の割合が高いことを明らかにしている。
- (5) 飯田市 (2022), 37 - 44項ならびに飯田市 (2021), 2 - 8頁、飯田市提供資料を参照。
- (6) 飯田市 (2019), 5 - 23頁を参照した。
- (7) 教員や卒業生の個人的なネットワークに基づいて拡散したため、対象者全員に連絡が取れているとは限らず、実際の母数はこれよりも小さく、回収率は必ずしも低いとは言えないことに注意が必要である。

参考文献

飯田市「大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み」飯田市『「学輪」第9号』2022年, 37 - 44頁
飯田市『大学連携会議「学輪IIDA」10周年記念パンフレット』2021年, 1 - 10頁
河本大地「農山村でのフィールドワークを通じた持続可能な「関係人口」づくりの実践 - 兵庫県美方郡香美町千代区におけるゼミ活動から卒業生の「嫁入り」まで」経済地理学年報第65巻, 2019年, 96 - 116頁
國松秋穂「学輪IIDA高大連携活動に関する高校からの報告」飯田市『「学輪」第7号』2020年, 29 - 35頁
田中輝美『関係人口の社会学 - 人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会, 2021年, 1 - 385頁
筒井一伸・海老原雄紀・図司直也・佐久間康富「地域づ

くりインターン事業に関わる主体の特徴 - 福島県伊達郡川俣町における調査報告」地域学論集第5巻第2号, 2008年, 85 - 96頁

中塚雅也・内平隆之『大学・大学生と農山村再生』筑波書房, 2014年, 1 - 62頁

中塚雅也・小田切徳美「大学地域連携の実態と課題」農村計画学会誌Vol.35 No.1, 2016年, 6 - 11頁



三遠南信の歴史資源 ーリブランディングに向けたいくつかの提言ー

Historical Resources of the San-En-Nanshin Area: Several Recommendations for Rebranding

法政大学 国際文化学部 教授 高柳 俊男

Toshio Takayanagi

Professor, Faculty of Intercultural Communication, Hosei University

【要旨】

三遠南信地域には、各種の貴重な歴史資源がある。それをリブランディング、すなわち新たな価値を付与して教育・観光資源等として活用していくため、いくつかの提言を行った。まず、時代的には、考古・古代から近現代に至るまで、幅広く目配りする。ジャンルの的には、現存するものだけでなく、鉄道の廃線や未成線、廃村、廃校、産業として今は廃れた養蚕・製糸業など、往時の姿を伝えるものも利用できる。歴史的な街道、祭りや伝統芸能、伝統野菜や郷土料理、地域の個性的な人物なども、そこにいにしえからの人々の想いや経験が様々に蓄積されていると捉えれば、歴史資源と言える。「負の歴史」に向き合う姿勢も、戦争に関するものなら平和教育や人権教育に、災害とそこからの復興にまつわるものなら防災教育の教材として活用できる。それらの各種歴史資源を、関わった先人たちの想いの込められた一連のストーリーとして打ち出すことが、とりわけ重要と思われる。

キーワード：三遠南信、歴史資源、リブランディング、「負の歴史」、平和教育

Key Words : San-En-Nanshin Area, Historical Resources, Rebranding, Negative History, Peace Education

2022年10月、飯田市において、SENA(三遠南信地域連携ビジョン推進会議)が主催する「第30回三遠南信サミット 2022 in 南信州」が開催された。3つ設けられた分科会のうち、第3分科会のテーマが「どうする三遠南信～歴史資源のリブランディング～」で、8自治体、1商工会議所、2住民団体の代表が参加した。その冒頭で、筆者はコーディネーターとして約15分の発題を行った。

本稿は、基本的にその時の発言を、録音記録とパワーポイントをもとに文章化したものであるが、時間の関係で省略した事項を大幅に補うなど、掲載に当たって一定の加筆修正を施した。当日の映像は、以下で視聴可能である。https://www.youtube.com/watch?v=O57bgd_-ANk

コーディネーターの三遠南信との関わり

法政大学国際文化学部の高柳俊男です。

私は決してこの地域出身とか、もともとこの地域を研究していた者ではないのですが、所属学部が始めた留学生研修の担当者に任じられたことで、深い関係が生まれました。研修地は飯田市とその周辺ですが、単に「飯田」と一括りにするのではなく、現在の飯田市が1937年の市制施行以来、6回の合併を繰り返していまに至っていること、つまり旧村単位での歴史や文化の違いにも十分目配りしながら考える必要性を痛感しました。一方では、飯田・下伊那を考察するためには上伊那や木曾地域、そして経済的、文化的につながりの深い東三河や遠州、すなわち三遠南信という視野が不可欠だとも感じました。そこで、時間をつくっては、この地域全体を旅しながら、ミクロとマクロの視点から自分なりに知見を広め、その成果を『南信州新聞』に書いた

りしてきました。その延長として2017年、SENAが第2次10年ビジョンを策定する際、南信州の学識経験者として委員に任命され、それ以来このサミットにも関わらせていただいています。

ここでは、第3分科会「どうする三遠南信～歴史資源のリブランディング～」を始めるにあたって、コーディネーターの私自身がこのテーマでどういうことを考えているかについて、少しお話をしたいと思います。

この「どうする三遠南信」というタイトルは、言うまでもなく、まもなく始まるNHK大河ドラマ「どうする家康」からのネーミングです。確かにこの地域には、徳川家康や武田信玄ゆかりの場所が多数あり、関連スポットを回る「三遠南信ちょこ旅キャンペーン」も現在進行中です。また、この分科会を準備する過程で偶然、浜松市立三方原小学校の校歌を見たところ、「葵と菱の古戦場 むかしをしのぶ松並木」という歌詞から始まっていて、今日の話にピット

りのフレーズになっていました。あるいはいま、浜松市博物館では「家康伝承と浜松」をテーマに掲げ、立派な冊子やマップを作成・配付しています。

したがって、この徳川家康の時代が一応の出発点になりますが、「歴史資源のリブランディング」に関して、最初に私から問題提起をいくつかしてみようと思います。

歴史資源を幅広く捉える－時代的に、ジャンルの

最初に取り上げたいのは、「何が歴史資源になりうるのか？」という点です。ここでは、時代やジャンルをなるべく幅広く捉えることを提唱したいと思います。

まずは、対象とする時代です。これまでの経緯や取り組みから、家康の時代、つまり江戸時代や安土桃山時代が一つの中心になるにしても、この地域にも考古や古代から中世に至るまで、様々な歴史資源の蓄積があります。富本銭も出土していますし、古墳などの遺跡も多数存在します。

その逆に、近代に入ってから、いわゆる近代化遺産ですね。鉄道やダムやトンネル、歴史的に重要な建造物やその遺構なども各地にあります。あるいは、いまは廃れてしまった産業として、養蚕や製糸業にまつわる文物も忘れてはなりません。駒ヶ根のシルクミュージアムや、SENAの域外ですが岡谷蚕糸博物館（シルクファクトおかや）に行くと、そのことを強く実感します。

つまり、ジャンルとしては、そういう廃れてしまったものも含めて、歴史資源の価値を再発見し、それを活用することが大事であろうと思います。たとえば、廃線となった鉄道ですが、2018年に「田口線廃線50年」のイベントがいろいろ行われ、話題になりました。実際、新城市や設楽町には、田口線で使っていたトンネルや駅のプラットホームがあちこちに残っていて、往時を偲ぶことができますし、観光資源にもなります。

この地域を貫く飯田線も、いまは秘境駅ツアーが大人気ですが、ほかにもたとえば戦後の佐久間ダム建設による付け替えで廃線となった部分（佐久間駅～大嵐駅間）への探訪ツアーなども可能です。

廃線だけでなく、未成線にまつわるものもいろいろありますね。飯田から岐阜県の中津川に至る鉄道は、中央自動車道の完成もあり、最終的に実現しませんでした。その過程で南信最大の温泉である昼神温泉が湧出しました。トンネルや築堤など、工事過程を示すものもいろいろ残っています。未成線のトンネルといえば、たとえば浜松市天竜区の相津にあるトンネルや橋梁は、浜松ワインセラーや「夢のかけ橋」として再利用されています。天竜浜名湖線の天竜二俣駅とJR飯田線の中部天竜駅を結ぼうとして未成線になった、佐久間線の遺構です。

他にも、廃村となった集落や、廃校となった学校も対象

になります。飯田市の場合で言うと、木曾との間の街道筋に大平宿がありましたが、高地の自然環境の厳しさや主力産業の炭焼きなどの衰退から、1970年に集団離村しました。しかし、立派な家屋が残り、有志によって管理されてきたので、自然学習の拠点などとしていまも活用されています。廃校になった学校をそのまま残して、昔の学び舎を偲ぶ懐かしの場所にしたり、映画のロケ地として活用する例として、杵原学校（旧 山本中学校）や旧 木沢小学校を挙げることもできます。

浜松市の場合だと2017年3月、中山間地域の天竜区で鏡山小学校と城西小学校が閉校になりました。このうち閉校間近の鏡山小学校をAKB48のメンバーが訪れて、最後まで残った10数人の子供たちと交流した映像は、AKB48「願いごとの持ち腐れ」のミュージックビデオに感動的に使われています。

街並み、街道や伝統文化も歴史資源として

伝統的な街並みも、大いに活用できます。重伝建（重要伝統的建造物群保存地区）は、長野県塩尻市の奈良井や南木曾町の妻籠宿、愛知県豊田市の足助、静岡県焼津市の花沢、岐阜県恵那市の岩村にありますが、いずれも三遠南信圏域のすぐ外ですね。したがって、域内に重伝建はいにく一つありませんが、豊橋市の二川宿など、注目される街並みも存在しています。

人や物の往来や交流を媒介した街道も重要です。この地域には「塩の道」や「鯖街道」として知られる街道をはじめ、火伏せの神の信仰に基づく秋葉街道、そして街道筋にあった関所跡（新居関所、気賀関所、ほか）などいろいろあります。こういう人やものが通った道も、様々な経験や記憶が蓄積されていて、大事な歴史資源になるかと思います。

陸上の道だけでなく、かつては天竜川などの大きな河川は、木材を流したり、船で物資を運ぶ手段としても活用されていました。浜松市の鹿島から佐久間の西渡の区間には一時期、エンジンで空中のプロペラを回して推進力を得る「飛行艇」も運行されていたことが知られています。ダムの建設やトラック輸送の隆盛により、川のそうした機能は徐々に失われましたが、かつての水運の歴史もきちんと記憶に留める必要があります。船着き場で荷揚げした生活物資を背負って急坂を登った往時の苦労を偲ぶため、西渡では「浜背負い祭り」が行われたりしましたが、2019年の13回目であいにく終了になっています。

地域の特産品も、それがいつ始まって、どういうふうに使われてきたのかと考えると、立派な歴史資源になるだろうと思います。

同様に、伝統文化や伝統芸能も、ある時に始まって、そ

れが紆余曲折を伴いながらもずっと伝えられてきたという意味で、歴史資源に入れてもいいでしょう。歌舞伎はこのエリアの全域や隣接する東濃地方に広く分布していますし、「三遠南信ふるさと歌舞伎交流」も例年開催されています。人形浄瑠璃も、とくに伊那谷には4座（今田、黒田、早稲田、古田）が現存し、活発に活動しています。記録上で確認できるものや、いま首だけ残るものも含めれば、かつてはもっと多くの場所にありました。もちろん、それらの芸能の発祥はこの地ではなく、上方など他地方から伝えられたものですが、江戸時代の禁止令や昭和の戦火を生き延びた歩みを追っていくと、何とかして演じ伝えたいと願う地元民の熱意を読み取ることができます。

お祭りもそうですね。今日の話の出発点の戦国時代から江戸時代で言うと、火おんどりにしろ遠州大念仏にしろ、長引く戦乱で亡くなった敵味方の犠牲者を供養するところから始まったと聞きます。地域によって霜月祭り、花祭り、花の舞などと呼ばれる、湯立てを伴う祭りや、その他の各地の祝祭も、地域の信仰と結束の歴史の賜物と言えましょう。

本日、住民団体の方から伝統野菜の話がされる予定ですが、伝統野菜もあるときから種を伝え、栽培を続けてきた点で、歴史資源と考えてもいいかと思えます。地域に特徴的な伝統的な食文化（郷土料理）も同様です。

地域にとってかけがえのない人物という資源

ここではもう一つ、地域ゆかりの人物を挙げておきます。以下は、網羅的ではなく、記念館や何らかの記念物があつたり、私に関心をもつ文化人を中心に、順不同で列挙しました。

●東三河

- ・小渕志ち、丸山薫（豊橋市）
- ・岩瀬忠震、早川孝太郎（新城市）
- ・渡辺崋山、杉浦明平（田原市）

●遠州

- ・金原明善、賀茂真淵、本田宗一郎、木下恵介、秋野不矩、中村興資平、清水宏（浜松市）
- ・松本亀次郎、宮城まり子（掛川市）
- ・鈴木梅太郎（牧之原市）

●南信

- ・伊原五郎兵衛、菱田春草、柳田國男、代田銀太郎、川本喜八郎、竹田扇之助、長沼節夫、北島新平（飯田市）
- ・宮澤芳重（松川町）
- ・島岡吉郎（高森町）
- ・西尾実（阿南町）
- ・山本慈昭、熊谷元一（阿智村）

- ・椋鳩十（喬木村）
- ・林芋村（平谷村）
- ・井上井月、中村不折、伊澤修二、高木東六（伊那市）
- ・岡本芳一（飯島町）
- ・有賀喜左衛門（辰野町）
- ・向山雅重、唐木順三（宮田村）
- ・加藤明治（南箕輪村）

いくつかコメントを加えると、これらの人物の中には、それこそ高校の歴史教科書にも出てくるような、全国区レベルの人物もいれば、その地域と周辺の狭い範囲でしか知られていない人物もいます。しかし、後者の人物の場合も、よく知ってみると、もっと広く知られてしかるべきと思われる場合もあります。とくに三遠南信内で地名度が高まれば、域内の住民どうしの共通認識や一体感も深まるのではないのでしょうか。

たとえば、人口300人台の平谷村に行けば、林芋村先生（1886～1929年）を知らない人はおそらく皆無です。出身はいまの飯田市千代ですが、現在の平谷村で小学教師として生活を送り、最期は不慮の林業事故で命を落としました。とくに「深雪せる野路に小さき沓の跡 われこそ先に行かましものを」は、教え子を愛する林芋村先生の姿を如実に伝える歌として、よく知られています。村内に歌碑がありますし、平谷小学校の校舎には北島新平の絵によるレリーフも刻まれています。平谷村の副読本『わたしたちの平谷』（1985年）には、遊んでいた野球のボールが校長室に飛び込んでガラスが割れた際、「学年と名前を名乗れ！」と怒る校長に対して、林先生が「あなたは校長のくせに生徒の学年と名前も知らないのか！」とくってかかったエピソードも紹介されています。とはいえ、村の外、とくに東三河や遠州では、未知の人のように思われます。

各自治体ゆかりのこれらの人物が、必ずしも地元の出身者だけではないことにも注意を向ける必要があります。たとえば、飯田市の中心部に立派な人形美術館が建つ川本喜八郎は、東京の渋谷の方ですね。人形劇の祭典で飯田に来た際、「人形が生きている」と評する飯田の市民たちを見て、自分の人形たちの終の棲家にしたと伝えられています。川本喜八郎の人形は渋谷にもあり、駅に直結した渋谷ヒカリエ内の展示ギャラリーで見ることができます。

写真家・童画家・教師という、三足の草鞋を履いた熊谷元一といえ、もちろん阿智村の出身ですが、後半生は東京の清瀬市に住んで写真・童画の活動を続け、「清瀬の文化人」としても認識されています。先に触れた北島新平は福島から来た人ですし、玉蘭から糸を引く方法を伝授した功績を讃えられて、豊橋市の岩屋緑地公園に銅造が建つ小渕志ちは群馬の人です。

つまり、ここに取り上げた人物たちに対して、単に「郷土の偉人」というような固定的な捉え方をするのでなく、

一人の人物のもつ場の移動や多面的な関係性の側面を含めて認識していくことが大事ですね。そのことがまた、ゆかりの自治体を越えた普遍的な理解にもつながっていくのではと期待されます。

ここでは、人物に絞ってお話をしましたが、各自治体が設置している博物館、美術館、資料館、郷土館の類が、歴史資源を提供する貴重な場であることは言うまでもありません。

なお、伊那市のところにある井上井月については、後でまた触れます。

「負の歴史」と向き合い、将来に活かす取り組み

それからジャンルということであると、いわゆる「負の歴史」「マイナスの歴史」を直視し、将来に活かす取り組みが、とくに私が研修を担当している南信州にはいろいろある点を強調しておきたいです。近年、ダークツーリズムという言葉もされて、1つの観光資源としても活用されているようです。

そのうちで平和教育や人権教育の分野でいうと、何とんでも阿智村にある満蒙開拓平和記念館の存在が大きいですね。1930年代半ば以降、地域の主力産業だった養蚕業の衰退や、強力に推進された国策を背景に、「新天地」とされた満州国に将来を託して、この地域から大勢の人が渡っていきました。いわゆる満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍で、名前こそ「開拓」ですが、実際には現地住民から強制的に安く買収した既耕地を分け与えられるのが通例だったため、現地住民の恨みを買いました。敗戦前後は、侵攻したソ連軍と現地住民に襲撃されながら逃避行を続け、収容所に収容されてからも飢えや寒さ、疫病の流行で多くの人が命を落としました。生き延びるために中国人に託された人も多く、中国残留孤児や残留婦人を生む原因になりました。つまり、渡航した日本人たちが多くの犠牲を払っただけではなく、現地の中国人にもいろんな迷惑をかけた、その被害・加害の歴史をどちらもきちんと記録・記憶し、後世に語り継いでいくための施設が、この満蒙開拓平和記念館です。約10年前の2013年、地元の日中友好協会に集う人たちなどによって民間で作られ、いまでもスタッフやボランティアによって自主的に運営されています。地元の飯田・下伊那の中学校が、平和教育の一環として訪問するのはもちろん、全国の学校から修学旅行などでだいたい来ていると聞いています。

あるいは今日、村長がご参加ですが、天龍村では戦時中、平岡ダムの建設が始まりました。若い日本人男性が徴兵されている中、工事は朝鮮半島出身者、中国からの強制連行者、さらには東南アジアで捕まえた連合軍の捕虜を使役して進行します。軍隊式の労務管理と、食料や医薬品が充分

に無い条件下、犠牲者も相当数出ます。

戦後は逆に、捕虜の監視に当たった村人が、BC級戦犯に問われ、横浜裁判で死刑の宣告を受けてもいます。したがって、村としては加害・被害の入り混じった、複雑な歴史となっているわけですが、それにきちんと向き合おうとして2000年、日中友好運動の中で建てられていた中国人犠牲者の碑に加えて、欧米人捕虜の鎮魂碑を新たに建てます。同時に、『天龍村史』に平岡ダムの建設史について、外国人の強制労働も含む詳細な記述を載せて、一つのけじめをつけます。戦時下に、朝鮮人・中国人・欧米人の強制連行・強制労働があった場所は全国に多数存在しますが、地元の自治体がこういう形で追悼行事を行うだけでなく、自治体史に詳述する例はきわめて稀で、「負の歴史」と向き合う天龍村の姿勢は特筆に値すると思います。慰霊祭はいまは5年に一度で、来年の2023年がその年に当たると聞いています。

また、下伊那郡最北の松川町には、町内に戦争遺跡と認定された場所が2つあります。一つは防空監視哨の跡地、もう一つが日本軍の戦闘機が墜落して兵士が一人亡くなった現場の2カ所です。それらを町の史跡に正式に認定し、説明板を立てたり、町の資料館から詳細な資料集を刊行しています。後者は、墜落死した若者は地元の人ではなく、長崎県出身者ですが、「かわいそうだ」として、現場周辺の住民たちが長く供養を続けてきたことが知られています。

南信州の例をいくつか挙げましたが、「負の過去」と向き合うこうした取り組みは、単に広島・長崎あるいは沖縄に限らない平和教育の教材として、大いに知られてしかるべきに思います。とくに、大きな自治体とか、都会の自治体ではなかなかできないことを、こうした中山間地域の小さな自治体が率先してやっているという意味でも、非常に意義深いと言えます。

「負の歴史」には、平和教育のほか、防災教育で活用できるものもあります。同じく南信州を例にとると、ここ飯田は、ご承知の通り戦後直後の1947年、市中心部の約7割が焼失するという、大変な大火がありました。そこからの復興の過程で、街の中心部にりんご並木のある都市がヨーロッパにあると聞いた飯田東中学校の生徒たちが、自分たちもりんごがなくても誰も取らないような、心豊かな街にしたいという願いを出し、防火帯の道路の中にもりんご並木を作るに至ったわけです。建設に伴う紆余曲折や苦労も多々ありましたが、活動は地道に続けられ、現在は飯田を代表するスポットの一つになっています。大火という災害から復興する際、拠り所となるものをつくり、それが地域を代表するシンボルとなった飯田の事例は、災害の多い日本の状況を考える時、示唆に富んでいると思います

あるいは、この地域は1961年、昭和36年に、いわゆる

三六災害という梅雨末期の集中豪雨による大水害がありました。各地で土砂崩れや河川の氾濫が起り、多くの地域が水浸しになって、130人余りの人が亡くなったり、行方不明になったりしました。とくに大鹿村は、大西山という山が崩落して、それだけで40人余りが命を落としました。大鹿村では、崩落現場の跡地に桜を植えて公園にし、この辛い歴史を語り継ぐ場にしています。伊那谷全体でも三六災害に関する多くの記録が作られ、災害からの復興碑が要所要所に建ち、また学校教育や社会教育において伝承活動が行われています。

とくに、災害当時はまだ高校生だった箕輪町の碓田榮一さんが、三六災害を体験した子供たちの手記を集め、ガリ版刷りの冊子『濁流の子』を作ったことは、特筆に値します。いまネット上には、三六災害にまつわる資料を集めたウェブサイト「語りつぐ“濁流の子”アーカイブス」があり、当時の写真、新聞記事をはじめとする多くの関連資料が収録されています。そのタイトルに「濁流の子」の語が含まれていることは、きわめて象徴的です。

リブランディングのための工夫と注目事例

以上を踏まえ、最後に「歴史資源のリブランディング」について、その見せ方の工夫などについてもう少し述べさせていただきます。

「歴史」というと、ともすると受験の時に古い時代の年号や人物名だけやたら覚えた、というような話になりがちです。しかし、単なる暗記や懐古趣味などではなくて、そうした歴史由来のものを、現在の私たちにもつながら身近なものとして示していくことが求められると思います。と同時に、その歴史には過去の多くの人とその想いが介在しているわけですから、そうした人々の想いも盛り込んで、一連のストーリーとして提示していくことが大事だと考えます。

その際、地元の人だと当たり前すぎて、宝物に気づかないこともありえます。外の視点も活かしながら、価値の再発見や再構築の作業にともに取り組むことも有効でしょう。

また、いまのSENAには3県の全39自治体が加盟しているので、一つの自治体が単独でやるのではなく、横との連携を模索して取り組むことも求められます。その場合、ご承知のように、SENAの範囲が時期によって変わり、今後伸び縮みがあるわけですので、必ずしも現行のSENAの領域にとらわれず、範囲に入っていない関連自治体との連携も進めるべきでしょう。たとえば、東三河からすると、SENAの域外になる岡崎市なども深い関係があり、本日これからの報告にもそうした話が登場すると承知しています。域外の近隣自治体とも連携して、将来に向けた新たな

可能性も見据えながらやっていくことが望ましいと思われます。

最後に、私が注目している事例として、先ほど後で述べると申し上げた井上井月（1822？～1887年）について触れます。ご存知かもしれませんが、井月は越後の人と言われ、江戸時代の末期から明治中期にかけて伊那谷、とくに上伊那を放浪した放浪俳人です。俳句も上手ですが、書もたいへん素晴らしく、芥川龍之介などが絶賛したといわれます。山頭火も井月の墓参りがしたくて伊那を目指しますが、1回目は失敗、苦勞の末に飯田線が開通した2回目ですぐに実現させました。

上伊那には井上井月顕彰会があって、毎年伊那市と東京でイベントを開くなどして、活動を積極的に展開しています。その一環として、『ほかいびと：伊那の井月』（2011年）という井月を描いた劇映画も、監督＝北村皆雄、主演＝田中泯、語り＝樹木希林という陣容で制作されました。翌2012年には、井月の句集が岩波文庫に入りましたが、それは日本の古典として認定されたことを意味しています。最近、「井月忌」が春の季語として歳時記に登載されたとも聞いています。そうした背景には、長年にわたる井上井月顕彰会の地道な活動があったわけで、歴史資源のリブランディングを考える際、一つの参考になる事例と思い、大いに注目しております。

実は、私は冒頭で述べたSENAの新ビジョン策定委員に任命された際、三遠南信の一体感醸成に向けた活動の一つとして、「三遠南信映画祭」の開催を提唱しました。その後、同様の意向をもっていた北村皆雄監督と意気投合し、「伊那VALLEY映画祭」という形で2019年以降、イベントを毎年開催しています。入場無料で3日間開催という、規模の大きい映画祭が継続できているのは、伊那市にある伊那食品（かんてんぱぱ）から場所の無償提供を受け、資金も伊那食品ほか地元ゆかりの企業が出してくれているからです。そうした支援が可能になったのも、ここに井上井月顕彰会があり、地元に根づいた活動を着実に展開してきたおかげと認識しています。

それから地元なので、飯田のことにも触れたいと思います。飯田市は、人口1万人あたりの焼肉店の店舗数が全国最多というデータに基づいて、近年「日本一の焼肉の街」というキャッチフレーズを打ち出し、宣伝に努めています。それにまつわるイベントとして、たとえば「焼肉ロックフェス」を毎年開催したり、図書館で焼肉関連書の朗読や展示を行ったりしています。「飯田焼肉研究所」という、焼肉関連の展示・販売をする企業のショールームのようなものがまもなくオープンする、とも聞いています。

なぜ飯田が「焼肉の街」になったのかについては、諸説あるようですが、海から遠いため山の肉、いまでいうジビエなどを食べていたことが一つあるでしょう。あるいは山

仕事や土木工事の労働者として朝鮮半島からやってきた人々が、朝鮮半島の焼肉文化を伝えたという歴史もあるわけです。飯田市南信濃にある有名な「肉のスズキヤ」は、店のリーフレットやウェブサイトで、肉をタレに漬けて込んで焼く方法は朝鮮人から教わったと明記し、それを日本人の口に合うように改良したとしています。そういう歴史的・文化的な背景も含めて飯田の焼肉を伝えていくことも、歴史資源のリブランディングに十分値すると言えましょう。

私は、飯田というと、人口あたりの焼肉店が多いのはそうなのですが、やはり他地域にはなかなか見られない特徴としては、「出前焼肉」だと思います。つまり、公園とか河川敷とかでいつ、何人で焼肉をやると精肉店に連絡すると、肉と野菜、コンロを配達して、終わったら片づけてくれるサービスが定着しているわけです。これをうまく観光商品化して提供したら、意外と面白いのではないのでしょうか。もちろん、変なところでやられたら大変ですけども、ちゃんとルールを決めてやったら、旅行者などにもヒットするのではないかと個人的には思ったりしています。

以上、私見をいろいろ述べてきました。「歴史資源のリブランディング」ですが、折しも高等学校では今年度から、新科目「歴史総合」がスタートしています。これは従来、「日本史」「世界史」の2科目に分かれていた歴史教科書を統合し、近代以降に重点を置いて、現在の目から課題探究型で歴史を学ぼうという科目です。もちろん古代から近世は必要ないということではありませんが、従来よく聞かれた「世界史は学んだが、日本史は知らない」とか、「日本史を勉強したが、江戸時代で終わった」などというのと比べると、はるかに健全な学びではないでしょうか。現在、そして未来をよりよく展望するために、歴史の世界に分け入って、そこから有効な知見や教訓を引き出すことは、人間にとって大事な営みと言えます。今回のテーマ設定も、大河ドラマ「どうする家康」からの発想ですが、決して一過性ではないものを目指して、それぞれの創意工夫のもとに、末永く取り組んでいけたらと思います。

そんなことも含めて、今日は自治体の首長の皆様、商工会議所や住民団体の皆様から、それぞれの取組みに基づく貴重なご報告やご意見を伺えれば幸いです。

補足

筆者が近年、『南信州新聞』元旦号に発表してきた小文のうち、本講演の内容に絡むものをいくつか以下に掲載して、補論とさせていただきます。

- ・2018.1.1
「SENAの新ビジョン策定委員に任命されて」
- ・2020.1.1
「雑誌『遠州のしなの』を貫く越県交流への想い」

- ・2021.1.1
「十年前に他界した伊那谷の文化人たちを追って」
- ・2022.1.1
「伊那谷の伝統芸能における『伝統と革新』—コロナ禍に思う」
- ・2024.1.1
「五年目を迎えた『伊那VALLEY映画祭』」

SENAの新ビジョン 策定委員に任命されて

高柳俊男

昨年八月、飯田市企画課からメールと訪問により、ある打診を受けた。南信州と東三河・遠江が連携するSENA(三遠南信地域連携ビジョン推進会議)が出来て、当初のビジョンを継ぐ新十年ビジョンの策定委員会に、南信州学識者代表として出席してもらえないか、とのこと。私は、南信州出身でも在任でもないが、たいへん驚いたが、学部の学生研修で毎年お世話になっている飯田・下伊那に多少でも強返しができればと思い、謹んでお引き受けすることにした。任期

は今年度と来年度の二年間。これまでも飯田・下伊那はもちろん、三遠南信地域を少しは見て回ったが、今後より幅広く足を運ぶことを通じて、何かしらの貢献ができればと決意を新たにしている。

第一回目の委員会は、八月初旬にSENAの事務局がある浜松市役所で開催された。ちょうどその前日、飯田風越高校から橋本教授を頼まれて、飯田にいたので、翌日は同じく南信州の住民団体(南信州交流の輪)代表として委員に選出された。編集「ロタクシオン」(みらい企画社)

の矢澤律子さんの車に便乗して、会場に向かう。矢澤さんと、研修本実施に向けてブレ研修を行っていた。〇一一年以来、研修内容の相談に乗っていた。自ら手がけた出版物を学部に預けたりと、何かとお世話になってきた。懇話会もつくっている。この十年間でSENAの構成メンバーが大きく変わったことも踏まえ、三遠南信の範囲を固定的に考えるのではなく、今後十年の変化も見ていくことが重要ではないか。

見るのではなく、地域や学校が消滅の危機に瀕しているような中山間地域の現実からの発想も大事ではないか。

実は私は、三遠南信地域を回った感想をまとめて、エッセイ「三遠南信に思う」を本紙に四回連載しているが(二〇一五年、二〇一六年)は、その第三回目と三回目でも述べた。すなわち、SENAの機構としては愛知県(中心地は豊橋市)であって、豊田市ではないが、かつて中馬街道や塩の道を通じてつながっていた稲武・足助(いずれも現在は豊田市)などの濃地域との経済的・文化的関係は、南信州にとって大事な要素である。そうした点も踏まえ、SENAの現構成メンバーの範囲に捉われず、

広い視野でこの地域としてのやって来て敵身的に働いたり、任期満了後も自ら起業したりしながら、地域に定住する魅力的な若者も少なくない。新十年ビジョンに、そうした中山間地域の視点をこそ盛り込んでいかねばならないからである。

会議では、とくに三地域にまたがる地域おこし協力隊サミットやエコツアーサミット・路線バスやコミュニティバスを乗り継ぐバス旅の動

め

ゆかりの映像作品を一挙上映する三遠南信映画祭

SENAを構成する三九自治体の観光パンフや紹介ビデオのコンテスト

構成自治体の作成した学校副読本の相互活用

各自自治体図書館における三遠南信コーナーの設置

もちろん、これらがすべて採用され、取り組まれるわけはなかるが、そのうち一つでも二つでも取り上げられ、その実現のためにも力を尽くせば幸いに思う。忙しくなるが、新たな任務を与えられて、やりがいにも満たされた充実した新年になりそうである。

【法政大学国際文化学部教授】

新春俳句 初日射し

林 悠 司

初詣 老松一幹みなぎりぬ
万物を抱ふるやうに初明り
元朝の新聞ひろげ句ひ立つ
初日射し白銀となる天竜川
若き日の友を偲ぶる年貨状
着影れて声の厚みの肩太し
寄る年の背筋を伸ばす初鏡
淑氣満つ風越山の朝日かけ

【飯田市天龍殿】

二年前の本紙百頁号に書いたように、新ビジョン策定のためのS.E.N.A(三遠南信地域連携ビジョン推進会議)の委員に二年間、南信州の有志者代表として出席させていた。S.E.N.Aに加盟する三九自治体についてより深く知る好機になったが、同時に自分個人としても三遠南信の一体感醸成に向けて何かできないかと思ひ、職場でシンポジウム「三遠南信―愛知・静岡・長野の越県連携を支える出版文化」を開催した。その際、遠州で活動するNPO法人三遠南信アミの水島加寿代さんの報告に、遠州信濃会という親睦団体への言及があった。

詳細な経緯は省くが、その後、同会が『遠州のしなの』という雑誌を出していることを知った。たまたまネット上で見つけた元事務局局長田口重孝さんに問い合わせたことが契機となつて、この雑誌の欠号の複製をつくつて、全冊揃えて、奇麗な装束という、思いがけない展開になつた。いまや『遠州のしなの』全三二冊は、もともと冊しかなかった浜松市立図書館のほか、法政大の「飯田・下伊那文庫」そして飯田市立図書館に所蔵されていて、閲覧できる。これを機に、田口さんと遠州信濃会関係者に感謝しつつ、この雑誌についてごく簡単な紹介をしてみた。

遠州信濃会が一九八二(二〇二二年まで毎年出し続けた『遠州のしなの』は、遠州に住む信州人の親睦雑誌である。信州人といつても、遠州に近い分、伊那谷出身者が圧倒的に多い。就職や結婚など、縁あって生

まれ育つた長野県を離れ、静岡県西部に居を定めるに至つた経緯を語り、麗しの故郷を懐かしみ、二つの県交流に力を注ぐ姿勢が全編に溢れている。

同じく特集「峠」にも、青崩峠、兵越峠、治部坂峠、大平峠、権兵衛峠、杖突峠など、伊那谷にまつてお馴染みの峠にまつわる想ひが出がたく。特集「私と戦争」では、戦場や銃後における苦難の体験を語つたのち、愚かな戦争を一度と繰り返さないことへの決意で結ばれている。

内輪話に終始しがちだが、そうならないための工夫も凝らされている。一例として、多くの号で組まれていた「海」では、無しの信州人として、初めて海を見た感動や海への憧れなどが語られる。翌号は「転じて一山」で、山国育ちの信州人には語るに事欠かない。同じく特集「峠」にも、青崩峠、兵越峠、治部坂峠、大平峠、権兵衛峠、杖突峠など、伊那谷にまつてお馴染みの峠にまつわる想ひが出がたく。特集「私と戦争」では、戦場や銃後における苦難の体験を語つたのち、愚かな戦争を一度と繰り返さないことへの決意で結ばれている。

してまず挙げるべきは、飯田ふるさと大使や三遠南信アミの理事長を務め、三原連携の歴史・文化に関する論考を他の媒体にも寄せてきた松田千秋氏と云える。本誌でも三遠南信をめぐる長文の学術的文章を各号に書き、二つの故郷をつなぐ遠州信濃会の役割や意義を熱く説いている。また「三遠南信山岳ハイテクタウン」というユニークな構想を提唱した、浜松ポトニクスの羽生紀夫氏の名も忘れてはならない。彼には「人生仕掛人」と題した自史があるが(これも田口さんから奇贈いただいた)、文中には「三遠南信の仕事人の語も見える。学部の飯田・下伊那研修を担当する者として、ほかに大鹿村鹿場における三六災害や後藤総一郎明大教授の特別寄稿、残留孤児問題に取り

組む山本慈昭に関するものをほしめ、興味を感じる文章を挙げれば切りがない。平成の大合併によって、浜松市と飯田市が隣接自治体になったことを取り上げた記事もあるが、かつて予想すらしなかつた出来事であろう。牧内重彦さんや江添繁和画伯など、私が東京で存じ上げる方々のお名前も随所に登場している。面識はないが、遠州信濃会総会で人形劇を披露したという当時飯田市職員(寺谷純一郎さん(高知県出身、法政大卒))も、身、法政大卒)も、いいた人形劇フェスタの歴史において一定の役割を果たした人物として興味を惹かれる。

なかでも一九九三年、りんご並木を提案し管理する飯田東中学校の活動に感じ入った浜松市長からの申入れを受け、飯田市がりんごの木を寄贈、造成中の浜松フルーツパーク内にりんご並木ができたことを伝える文章が目を見張る。私には不勉強で、そつとした事実を知らなかつたので先日、浜松までその並木を見に行つた。園内の道に沿つてりんごの木はたしかにあったが、並木誕生の経緯を示すプレートもなければ、管理も飯田のものに比べると十分行き届いていないにはみえなかつた。とはいえ、現在指定管理を受け持つ民間業者としても、木の老朽化、長野との気候の違い、入園者のモラル低下などにめげず、現状を少しでも改善しようと苦慮していることが窺われた。飯田市と浜松市の貴重な交流

の証として、みなが知恵を出し合つて、このりんご並木もつと盛り立てていけないうものだろうか。三遠南信交流の現場を訪ねるこんな旅を夢想させてくれたのも、雑誌『遠州のしなの』のおかげである。次回は、重鎮の一人である米山茂人氏が二〇〇一年、出身の飯田市中友塾小学校に寄贈したとあるフロンズ像「春の詩」も、ぜひ見に行こう。同校のウェブサイトに、米山氏のこの郷土愛を向けた教員が教材化し、道徳の授業で使つたとも出ていた。幸い『法政大学国際文化学部教授』

雑誌『遠州のしなの』を貫く越県交流への想い

高柳俊男



『遠州のしなの』は昨秋、三遠南信サミットin南信州に合わせた飯田市立図書館の特別展でも展示された

か」は古書店で購入し、すでに「飯田・下伊那文庫」に収められている。『遠州のしなの』は全三二号もあり、限られた紙面で十分な紹介は到底かなわないので、あとは飯田市立中央図書館でぜひお手にとってください。当初は百頁前後を誇つた雑誌も、さすがに会員の高齢化に伴い徐々に薄くなり、内容的にも他界した功労者への追悼文が目立つようになっている。とはいえ、三遠南信が注目される遠いからこそ、越県交流を自ら体現するに至つた先達たちの営みの軌跡は、後世に留めておくに十分価値がある。



『黎明』 平岩洋彦 【神奈川県平塚市】

短歌一〇首

脇坂英文

昨年は、新型コロナウイルスの猛威に始まり収束もままならぬ始。今年こそコロナ禍の真像終焉と人々の健康回復を祈る。

【その一冬】
新型コロナウイルス上陸す
大和国に非難沸くる
ウイルスの検査体制 携いつかず
昔の罹患 瓶が始む

【その二春】
コロナ禍に 春の気も 無くなりて
敬遠く 垣を待機
関東に 緊急事態 公布され 今日
も 只言 ながら

その一夏

コロナ禍に 田舎の庭が 空に掛かる
移動自粛ト 夏も近づき
扇帯園の 賑わはず 早六月 田舎は遠く 日々暮るのみ

その四秋

コロナ禍の 秋の日は 午後の時 太陽切れて 軒にすなり
コロナ禍の 田舎に 隣り 隣り 近所の人に 離れて会釈

その五 孫

コロナ禍に 孫の 懐かしい おきまったら または 懐かしい
孫来るも 離れて 懐かしい 懐かしい
懐かしい 懐かしい

【平岩洋彦 平谷村出身】

『EYE ON 龍』の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

『EYE ON 龍』の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

『EYE ON 龍』の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

『EYE ON 龍』の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

十年前に他界した伊那谷の文化人たちを追って

高柳俊男

十年前の「EYE ON 龍」の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

十年前の「EYE ON 龍」の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って



伊那谷の文化人たちの写真

十年前の「EYE ON 龍」の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

十年前の「EYE ON 龍」の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

十年前の「EYE ON 龍」の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

十年前の「EYE ON 龍」の上映会に出かけ、その後、四谷を歩いた。伊那谷の文化人たちが追って

伊那谷の芸能における

「伝統と革新」

—コロナ禍に思う—

高柳俊男

各地で相次ぐ
祭りの休止

伊那谷には、祭りをはじめ、歌舞伎や人形浄瑠璃など、伝統文化が豊富にある。法政大学の学生

研修でも、事前学習 授業そのテーマを扱い、現地へ今田人形を伝承する木下文子さんから手ほどきを受けた。ところが近年、伊那の霜月祭りとうち減少や担い手の高

河の花祭りがあるが、東栄町の布川のものが二〇一九年、苦境の決断の末に休止となった。この年は浜松市佐久間の浦川歌舞伎や、生活物資を背負って天竜川の船着き場から急坂を登った往時の苦勞を偲ぶ「浜背負い祭り」も、同じ運命をたどった。阿南町日吉のお祭りも、もう何年も「休止中」と聞く。コロナ禍で

演じる機会が閉ざされたいま、事態がさらに悪化する恐れもある。そうした中で注目されるのが、祭りや芸能の本質に立ち返って、真に残すべきは何なのかをめぐり議論があらためて起きていることだ。地域の将来像を考へる際、こうした模索は大いに興味をそられる。そこで伊那谷の伝統文化と呼べるものが近年、生活の変化に心して姿をどう変えたかを、この方面の素人ながら素描してみよう。

中でも最大の変化は「外」の人の参画をめぐってであろう。祭りや地域の生活に根ざした行事であり、とくに神事としての色彩が濃い場合、部外者の関与を忌み嫌う傾向があった。極端な場合、地域を離れた村人の参加すら拒まれた。しかし、担い手の減少の中で背に腹は代えられず、熱心に関わってくれるよそ者を受け入れる動きがあらわになってきた。

たとえば、天龍村大河内地区にある池大神社の例祭。伊那市富原に拠点を置くプロの歌舞劇団田楽座に門戸を開き、一九九五年以来その参加によって祭りを維持している。近くの向方地区は、田楽座が大河内に関わり始めた時は頑なだったと聞くが、危機意識の高まった現在は「天龍つなぐらボ」などの取組みを通じて村に情熱を注ぐ村外の若者を積極的に受け入れている。都会人が地方の伝統文化に

化して関われるかをめぐる。天龍村と東京をつないだスチームの会議も開かれた。足かけ七年に一度の「飯田お練りまつり」の華の一つが本町三日が繰り出す大行列だ。明治維新で不要になった道具を譲り受けて、始まったというが、それを担う町内の世帯数はわずか十三軒。そこで早くから町内の会社に助っ人を頼んだが、いまでは大行列保存会がウエブサイトで、この文化の継承に興味のある人を広く募集している。「初心者の方でも大歓迎」で、飯田市内のほか、豊田村や下條村からも参加者がいるという。冒頭で布川の花祭りの休止に触れたが、東栄町の花祭りはその結果、計十ヶ所となった。事情に疎いと「単独での存続が困難なら統合したら」と思ってしまったら、そう簡単にはいかないのは、集落によつて被る面や所作が異なるからだ。これは遠山郷の霜月祭りも同様だろう。そう思つてネット上に

引き出さるという意図であろう。その際、ポイントとなる点の一つが、これまでみてきた「外」の力をどう呼び込むかであろうと私は思う。

このフォーラムでは後半、地元保存会関係者のシンポジウムも行われた。登壇者三名のうち二名、すなわち阿南町の和合念仏踊り保存会の菊島延幸さんと、向方お祭りの芸能部の本多紗智さんは、本学の「飯田・下伊那研修」でもお世話になっている。二人ともどの住民ではなく、地域おこし協力隊として首都圏からやってきた人たちであることが、何とも示唆的に感じられた。



『春』 平岩洋彦 【神奈川県平塚市】

よくある変化は、かつては特定日に実施していた行事を、仕事に差し支えない土日に寄せて行うケースである。同様に、本来は翌朝まで続く長時間の祭りを、日常生活に合わせて適宜切り上げる場合も少なくない。たとえば、天龍村のウエブサイトを見ると、向方のお祭りについて「昔は夜を徹して行われていたが、現在は二四時頃終了します」と注記

している。ほかに、女人禁制だった古いしきたりをいまは撤廃しているところもある。中でも最大の変化は「外」の人の参画をめぐってであろう。祭りや地域の生活に根ざした行事であり、とくに神事としての色彩が濃い場合、部外者の関与を忌み嫌う傾向があった。極端な場合、地域を離れた村人の参加すら拒まれた。しかし、担い手の減少の中で背に腹は代えられず、熱心に関わってくれるよそ者を受け入れる動きがあらわになってきた。

たとえば、天龍村大河内地区にある池大神社の例祭。伊那市富原に拠点を置くプロの歌舞劇団田楽座に門戸を開き、一九九五年以来その参加によって祭りを維持している。近くの向方地区は、田楽座が大河内に関わり始めた時は頑なだったと聞くが、危機意識の高まった現在は「天龍つなぐらボ」などの取組みを通じて村に情熱を注ぐ村外の若者を積極的に受け入れている。都会人が地方の伝統文化に

化して関われるかをめぐる。天龍村と東京をつないだスチームの会議も開かれた。足かけ七年に一度の「飯田お練りまつり」の華の一つが本町三日が繰り出す大行列だ。明治維新で不要になった道具を譲り受けて、始まったというが、それを担う町内の世帯数はわずか十三軒。そこで早くから町内の会社に助っ人を頼んだが、いまでは大行列保存会がウエブサイトで、この文化の継承に興味のある人を広く募集している。「初心者の方でも大歓迎」で、飯田市内のほか、豊田村や下條村からも参加者がいるという。冒頭で布川の花祭りの休止に触れたが、東栄町の花祭りはその結果、計十ヶ所となった。事情に疎いと「単独での存続が困難なら統合したら」と思ってしまったら、そう簡単にはいかないのは、集落によつて被る面や所作が異なるからだ。これは遠山郷の霜月祭りも同様だろう。そう思つてネット上に

引き出さるという意図であろう。その際、ポイントとなる点の一つが、これまでみてきた「外」の力をどう呼び込むかであろうと私は思う。

このフォーラムでは後半、地元保存会関係者のシンポジウムも行われた。登壇者三名のうち二名、すなわち阿南町の和合念仏踊り保存会の菊島延幸さんと、向方お祭りの芸能部の本多紗智さんは、本学の「飯田・下伊那研修」でもお世話になっている。二人ともどの住民ではなく、地域おこし協力隊として首都圏からやってきた人たちであることが、何とも示唆的に感じられた。



2020年正月の向方お祭りの様子。踊っているのは村外の女性たちで、史上初(写真撮影・本多紗智さん)

【法政大学国際文化学部教授】

最初のきっかけは、留學生研修。昨年「伊那VALLEY映画祭」は、無事に第五回目を迎えることができた。この映画祭に準備段階から関わってきた者として、いささか感慨深い。

そもそのきっかけは、私の所属する法政大学国際文化学部は二〇二二年度以来、飯田・下伊那を舞台に、留學生を主対象とする学生研修を実施している。東京とは異なる自然や文化をもつ地域を訪れ、日本を多面的に認識するのが目的だ。その担当者に私が任命され、引率のみならず、事前学習授業も担当することになった。その際、飯田・下伊那を、周辺地域とのつながりの中で把握することが肝要と考へ、時間を見つけて

は上伊那や三遠南信地域に足を運んだ。その成果を、二〇一五年から一六年にかけて、「三遠南信」に思う」の題で本紙に四回連載したりもした。

そのことが飯田市関係者の目に留まり、二〇一七年、SLEN A（三遠南信地域連携ビジョン）推進会議が二年間かけて新十年ビジョンを策定する際、私が南信の学識経験者として委員会に派遣されるという、思いがけない機会を得るに至った。委員会では、三遠南信の細部強化に向けて文化的な提言をいくつか行ってみしたが、その一つが三遠南信映画祭の開催だった（本紙二〇一八年元月号掲載の拙文を参照）。

一方、伊那市出身で、井上井月の映画『ほかいびと』のほかに、民俗学関係のドキュメンタリーを多数つくってきた北村哲雄さんも類似の考えをお持ちで、会ってみて意気投合。北村さんと同年輩の伊那市出身者二名も加わって二〇一九年、この「伊那VALLEY映画祭」がスタートした。

映像を通して伊那谷から日本・世界へ

毎年欠かさない二天テーマと言える。伊那谷における戦争関連として、満州移民、疎開した登戸研究所、伊那飛行場などを扱い、そこから沖繩戦やベトナム戦争へとつながっている。民俗・芸能の分野では霜月祭り、人形文化、すがれ追いや、養蚕などの作品

を上映し、それとの関連で、花祭り、マタギ、アイヌのイオマンテなどを取り上げた。ほかにも、飯田線建設における朝鮮人の貢献から、サハリヤや中央アジアで暮らすに至った朝鮮人のテーマへ、また三六災害から阪神淡路大震災、東日本大震災へ、といった

優秀作品が多数所蔵されている。学生研修開始時に、関連作品を片っ端から観た私が、候補作を推薦し、会議で検討して決めている。

このほか、作品のほとんどは上映後、監督の解説や、関係者のトークを入れて、元々東京で関連イベントを毎年開催する

を得る契機になればと願うからである。会場は、伊那食品（かんてんばば）の西ホール。これだけの規模と内容の映画祭が、参加費無料で実施できるのは、会場のみならず、協賛金をご提供くださる伊那食品の全面的な支援が大きい（協賛金はもう一社から

など、地道で精力的な活動を長年続けてきたことではないだろうか。地元で根ざした文化活動への評価が、別の取組みをも可能にするわけで、示唆に富む事例と言えよう。

映画祭のより良き姿に向けて

とはいえ、今後の課題は少なくない。映画祭期間中は、井上井月顕彰会の会員などに受付や会場設営をお手伝いいただいているが、一年間かけて上映作品を選定し、先方と交渉しているのは、いずれも首都圏に住む四名のみである（その経営する会社社員一名の協力もあり）その四名のうち、比較的若い（？）私を除くと、全員がすでに八〇歳。サステイナビリティを考えると、体制を徐々に移行していく必要がある。

作品選定上でも、問題はあまる。この映画祭では、地方のテレビ局が制作した過去の優秀作品も上映しているが、長野県に限らず、要するに伊那食品が各TV局のスポンサーになっているからである。同じことができないかと、私が感銘を受けた作品について、愛知県のTV局教社に掛け合ったが、いずれも見事撃沈！TV局も、正面から依頼されたら、「著作権上、無理と答えるほかないのであろう。制作担当ディレクターは、埋もれたままの作品に光を当ててくれたことに感謝し、再上映の機会が与えられることを願う場合が多いが、その実現には大きな障壁がある。ここを何とか突破できないか、今後とも追究し

年、開催時期を十一月から七月末に移し、まさにこれからが正念場である。夏休みの時期なので、三日のうち半日を予現をみていない。この作品に当てる案もありえよう。今後とも創意工夫を続けつつ、地域恒例の文化イベントとして定着できるような微力を尽くしたい。

【法政大学国際文化学部教授】

「伊那VALLEY映画祭」五年目を迎えた

高柳俊男



大学連携会議「学輪IIDA」の趣旨とこれまでの歩み

【学輪IIDAの趣旨】

大学連携会議「学輪IIDA」は、飯田に価値や関心を有する大学研究者のネットワーク組織です。

飯田と大学との1対1の関係から、飯田を起点に様々な大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するため、平成23年1月に設立されました。

学輪IIDAのコンセプトは、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」です。大学研究者同士が相互に知り合い親睦を深めながら、モデル的な研究や取組を地域とともに行っていこうとする試みです。大学研究者の有機的なネットワークの形成を通じて、大学の専門的な知見や人材を地域に呼び込み、これまで飯田が培ってきた経験や取組と融合することで、地域の課題解決や付加価値を高めていくような新しい形の大学的な機能の構築を追求していく挑戦でもあります。

学輪IIDAは、役職や規約などの無い緩やかな（平らな）ネットワーク組織です。共通のキーワードは「飯田」であり、大学研究者による「ボトムアップ」で「ボランタリー」な活動を基本としています。設立当初19大学43名だった大学研究者の参画も、これまでの様々な活動を通じて、令和5年12月末日現在では75大学・機関、146名もの大学研究者が参画するまでに至り、ネットワークの輪が広がってきています。

学輪IIDAの知のネットワークを通じて、「地域（内部）の知」と「大学（外部）の知」が融合する「共創の場」を創出し、持続可能性を追求する地域として、様々なモデル的な取組を多様な主体の連携と協働のもと進めていきます。

【学輪IIDAのこれまでの主な取組】

1 大学連携会議「学輪IIDA」の設立

（平成23年1月29日～30日）

飯田と関係の深い大学研究者が一堂に会し、今後の方策等について検討するため「大学連携会議」を開催した。会議の名称を「学輪IIDA」とし、様々な提案、課題等の中から、現実的なもの、実施可能なものを抽出し、具体的な行動を起こしていくため「プロジェクト会議」を設置していくことを確認した。

2 大学連携会議「学輪IIDA」全体会

学輪IIDA全体会は、年に一度学輪IIDAメンバーが飯田に会し、大学連携や学輪IIDAの取組に関する情報の共有、学輪IIDAの今後のあり方や具体的な取組に関する検討及び学輪IIDAの取組を市民など多くの方知ってもらうこ

となどを目的に開催するもの。

例年、1月下旬の土日2日間で開催しており、土曜日は誰でも参加可能な「公開セッション」を、日曜日は学輪IIDAメンバーによる「内部討議」を開催している。

○平成23年度学輪IIDA全体会

（平成24年1月28日～29日）

学輪IIDA全体会「公開セッション」を初めて開催した。初回開催のため、参加研究者による自身の専門領域や飯田との関わり、関心事項などに関するプレゼンテーションを行った。

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議やウェブサイトの構築など、今後の取組に関する検討を行った。2日間で、17大学31名のメンバーが参加した。

○平成24年度学輪IIDA全体会

（平成25年1月26日～27日）

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び地域と大学との連携による地域づくりの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①豊橋技術科学大学シャレットワークショップ

豊橋技術科学大学 大貝 彰 教授

②デジタルプラネタリウム共同プロジェクト

和歌山大学 尾久土 正己 教授

③参加型地域社会開発（PLSD）研修

日本福祉大学 大濱 裕 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

②飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学 小畑 力人 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地域と大学との連携による地域づくりの可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

東京農工大学大学院農学研究院

朝岡 幸彦 教授

飯田女子短期大学

高松 和子 教授

南信州・飯田フィールドスタディ講師

桑原 利彦 氏

「内部討議」では、学輪IIDAプロジェクト会議の今後の取組や、旧飯田工業高校後利用に関する将来展望や具体的

な整備などについて意見交換した。2日間で、18大学33名のメンバーが参加した。

○平成25年度学輪IIDA全体会

(平成26年1月25日～26日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「学びの場 飯田」の魅力や可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①地域社会システム調査実習

東京農工大学 朝岡 幸彦 教授

②法政大学西澤ゼミフィールドワークの取組

法政大学 西澤 栄一郎 教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

①共通カリキュラム構築プロジェクト会議

立命館大学 平岡 和久 教授

②飯田における伝統工芸の活性化に向けた調査報告

京都外国語大学 高島 知佐子 講師

③飯田工業高校後利用プロジェクト会議

追手門学院大学 小畑 力人 教授

④知のネットワークを活用した人材育成に向けた取組

法政大学：高柳 俊男 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「学びの場 飯田」の魅力や可能性について

コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

パネリスト：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

豊橋技術科学大学建築・都市システム学系

大貝 彰 教授

東京大学大学院教育研究科 牧野 篤 教授

「内部討議」では、各研究者の感じる飯田の価値・魅力・可能性に関する意見交換、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組及び学輪IIDA紀要作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、17大学32名のメンバーが参加した。

○平成26年度学輪IIDA全体会

(平成27年1月24日～25日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び右肩下がり時代における持続可能な地域の実現をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

①法政大学国内スタディージャパン研修

法政大学 高柳 俊男 教授

②グローバルシティ・飯田における多文化共生

上智大学 蘭 信三 教授

宮崎産業経営大学 福本 拓 准教授

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

和歌山大学 藤田 武弘 教授

立命館大学 平岡 和久 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：地方消滅時代における飯田下伊那

－右肩下がり時代における持続可能な

地域の実現のために－

コーディネーター：

しんきん南信州地域研究所 林 郁夫 所長

パネリスト：

首都大学東京教養学部 大杉 覚 教授

立命館大学政策科学部 森 裕之 教授

京都大学大学院経済学研究科 諸富 徹 教授

「内部討議」では、旧飯田工業高校後利用に関する検討、学輪IIDAやプロジェクト会議の今後の取組、及び学輪IIDA機関誌作成に向けた意見交換などを行った。2日間で、21大学38名のメンバーが参加した。

○平成27年度学輪IIDA全体会

(平成28年1月23日～24日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、及び「真の地方創生」の実現に向けた学輪IIDAの意義とこれからの可能性をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について

法政大学 酒井 理 准教授、ゼミ生

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議

東洋大学 小林 正夫 教授

[パネルディスカッション]

テーマ：「真の地方創生」の実現に向けた

学輪IIDAの意義とこれからの可能性

コーディネーター：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

パネリスト：

立命館大学政策科学部 平岡 和久 教授

東京大学大学院工学系研究科

瀬田 史彦 准教授

一般財団法人日本経済研究所

大西 達也 調査局長

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校活用構想案に関する説明、学輪IIDAの活動を支える知の拠点のあり方、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、20大学32名のメンバーが参加した。

○平成28年度学輪IIDA全体会

(平成29年1月21日～22日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、信州大学航空機システム共同研究講座の開講についての報告及び「様々な「知」や「人財」が共鳴して集う地域の実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[大学の実践事例報告会]

飯田水引プロジェクトの取組について
法政大学 酒井 理 准教授、ゼミ生
飯田OIDE長姫高校商業科

[学輪IIDAプロジェクト会議報告]

共通カリキュラム構築プロジェクト会議
立命館大学 平岡 和久 教授

[信州大学航空機システム共同研究講座報告]

信州大学航空機システム共同研究講座の開講について
信州大学 柳原 正明 特任教授

[パネルディスカッション]

テーマ：様々な「知」や「人財」が共鳴して集う
地域の実現に向けて

コーディネーター：

法政大学人間環境学部 石神 隆 教授

パネリスト：

名城大学副学長 都市情報学部
福島 茂 教授
和歌山大学観光学部長 観光学部
藤田 武弘 教授
京都外国語大学外国語学部
堀口 朋亨 准教授

コメンテーター：飯田市長 牧野 光朗

「内部討議」では、旧飯田工業高校利活用に関する説明と意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する意見交換などを行った。2日間で、24大学42名のメンバーが参加した。

○平成29年度学輪IIDA全体会

(平成30年1月20日～21日)

「公開セッション」では、大学の実践事例報告会、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告、高等学校による活動紹介及び「イノベーションが起こる地域社会創造を目指して」をテーマにしたフリーディスカッションを開催した。

[基調報告Ⅰ 学輪IIDA実践事例]

①飯田市を基盤とした地域社会と教育の結びつき
～LBS JAPAN TREK 2017 IN IIDA CITYを
事例として～

京都外国語大学 堀口 朋亨 准教授、学生

②学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの取組
静岡文化芸術大学 高島 知佐子 准教授

[基調報告Ⅱ 活動紹介]

地域人教育の取り組みについて

飯田OIDE長姫高等学校 Sturdy egg

[フリーディスカッション]

ファシリテーター：立命館大学 平岡 和久 教授

議論提起：法政大学 石神 隆 教授

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、「産業振興と人材育成の拠点」活用に関する説明、意見交換、学輪IIDAの今後の取組に関する情報共有などを行った。2日間で、26大学46名のメンバーが参加した。

○平成30年度学輪IIDA全体会

(平成31年1月26日～27日)

「公開セッション」では、高等学校による活動紹介、大学連携の事例報告、学輪IIDAプロジェクト会議の活動報告及び「知のネットワークの活用による地域人財育成の可能性について」をテーマにした全体討議を開催した。

[高校の活動紹介]

Ene-1 GP SUZUKAの取り組みについて

飯田OIDE長姫高校原動機部

[大学連携の事例報告] ポスターセッション

[全体討議]

テーマ：知のネットワークの活用による
地域人財育成の可能性について

ファシリテーター：和歌山大学 藤田 武弘 教授

事例報告：立命館大学 平岡 和久 教授

名城大学 福島 茂 教授

松本大学 田開寛太郎 専任講師

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

フリーディスカッション（自由討議）：会場参加者

「内部討議」では、産業振興と人材育成の拠点(エス・バード)、飯田市域学連携交流施設の視察と活用に関する情報共有、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、26大学36名のメンバーが参加した。

○令和元年度学輪IIDA全体会

(令和2年1月25日～26日)

「公開セッション」では、学輪インターユニバーシティオープンキャンパス、学輪IIDA 高大連携の取組報告、信州大学の活動紹介及び「知のネットワーク活用による真の地方創生実現に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス
プレイベント]

実施内容の詳細は、後述

[高大連携の取組報告]

立命館大学 平岡 和久 教授
和歌山大学 藤田 武弘 教授

参加高校生からの報告

飯田OIDE長姫高校

下伊那農業高校

飯田女子高校

飯田OIDE長姫高校商業科 國松 秋穂 教諭

[全体討議]

テーマ：知のネットワーク活用による
真の地方創生実現に向けて
～「知」を創造し、「知」がひとを呼び、
発展する「まち」のカタチ～

コーディネーター：

東京家政学院大学 廣江 彰 学長

パネリスト：

豊橋技術科学大学 井上 隆信 副学長

和歌山大学 藤田 武弘 教授

南信州・飯田産業センター

萩本 範文 専務理事

「内部討議」では、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、30大学38名のメンバーが参加した。

○令和2年度学輪IIDA全体会

(令和3年1月23日～24日)

「公開セッション」では、10周年記念セッションとして「知のネットワークへの挑戦～新時代における持続可能な地域づくりを目指して～学輪IIDA. NEXT10」をテーマにしたディスカッションを開催した。

[10周年記念セッション]

テーマ：知のネットワークへの挑戦～新時代における
持続可能な地域づくりを目指して～
学輪IIDA. NEXT10

コーディネーター：法政大学 石神 隆 名誉教授

発言者：東京農工大学農学研究院 朝岡 幸彦 教授

日本観光ホスピタリティ教育学会

小畑 力人 会長

法政大学国際文化学部 高柳 俊男 教授

立命館大学政策科学部 平岡 和久 教授

和歌山大学観光学部 藤田 武弘 教授

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス

「飯田学輪大学」]

実施内容の詳細は、後述

「内部討議」では、学輪IIDAの取組や新たな連携事業の可能性に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、24大学30名のメンバーが参加した。

○令和3年度学輪IIDA全体会

(令和4年1月22日～23日)

「公開セッション」では、「つながること、学びあうことの可能性 ～コロナから再興し、私たちの地域の未来を創る」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

コーディネーター：

関西大学社会学部 草郷 孝好 教授

パネリスト：立教大学 阿部 治 名誉教授

飯田市南信濃公民館 宮田 浩二 主事

飯田女子高校 福田 真澄 教諭

飯田市美術博物館 四方 圭一郎 学芸員

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス

「飯田学輪大学」]

実施内容の詳細は、後述

「内部討議」では、これからの学びや人材育成と学輪IIDAの展開に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、25大学31名のメンバーが参加した。

○令和4年度学輪IIDA全体会

(令和5年1月21日～22日)

「公開セッション」では、「風越のまち飯田から世界へひろがる知の渦列をどのように創りうるか」をテーマにしたパネルディスカッションを開催した。

コーディネーター：

信州大学 中嶋 聞多 特任教授

パネリスト：東京藝術大学 北川原 温 名誉教授

信州大学 林 靖人 教授

和歌山大学 大浦 由美 教授

南信州観光公社 ダニエル クレマス 氏

[学輪インターユニバーシティオープンキャンパス

「飯田学輪大学」]

実施内容の詳細は、後述

「内部討議」では、これからの学びや人材育成と学輪IIDAの展開に関する意見交換、情報共有などを行った。2日間で、26大学30名のメンバーが参加した。

3 学輪IIDAプロジェクト会議の設立

(平成23年3月23日)

平成23年1月の大学連携会議において確認された提案、課題、意見等を踏まえ、今後実現可能な取組等について議論し、具体的な方向性を見出すことを目的に開催した。

学輪IIDAにプロジェクト会議を設置し、旧飯田工業高校の利活用、地域課題にテーマにした共同研究の実施、学輪IIDAウェブサイトの構築などに取り組んでいくことを確認した。

○旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の設立

(平成23年9月12日)

旧飯田工業高校の「教育施設としての活用可能性」につ

いて、様々な角度から検討することを目的に設置された。南信州・飯田フィールドスタディなど現在の大学連携の取組からの積み上げと、リニア時代を意識した大学的な機能の2つの視点で検討していくことを確認した。

プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「飯田工業高校後利用プロジェクト報告」(追手門学院大学社会学部:小畑力人教授)を参照。

旧飯田工業高校後利用プロジェクト会議の主な取組(歩み)は、以下のとおり。

(平成23年度)

プロジェクト会議を設立するとともに、大学院大学の設置可能性検討に向け、岐阜情報科学芸術大学院大学を視察した。また、プロジェクト会議の趣旨や検討状況について、学輪IIDA全体会公開セッションで報告するとともに、内部討議にて今後の取組について意見交換した。

(平成24年度)

旧飯田工業高校の教育的な施設の活用の可能性について検討した。旧飯田工業高校の後利用検討に向けては、「飯田で何を学ぶのか」といった理念やコンセプトの検討が重要であること、その理念やコンセプトを実現に向け教育目的の達成に必要なカリキュラムの構築が必要であること、及びその教育を実践するために必要な施設の有効な活用について検討することが重要であることが確認された。

また、リニアを活かした大学的な機能の視点として、共同教育課程、連合大学院、大学院大学の設置可能性などについて調査、研究していくこととした。

(平成25年度)

旧飯田工業高校施設が、目指すべき地域像の実現に向けた地域振興や人材育成の拠点となることが重要であるとの認識のもと、その役割を担うことができる教育・研究施設(機関)としての活用可能性について検討した。旧飯田工業高校を活用した教育・研究施設(機関)には、新しい価値を創発していく機能(価値創発機能)や新しい形の大学機能が必要であるとの認識のもと、様々な人材、知識、経験、情報等が交差する「ナレッジ・スクエア」構想と、その活動に必要とされる施設のあり方について整理した。また、ナレッジ・スクエアとしての活用や実践を経て、将来的には高等教育機関(大学院大学)やコンベンション施設の設置可能性について検討した。

(平成26年度)

旧飯田工業高校を活用したナレッジ・スクエア構想について引き続き検討した。また、飯田市が実施した「大学院大学設置可能性調査事業」の一環で開催した「南信州における高等教育機関のあり方について考える」シンポジウムにおいて、旧飯田工業高校を研究教育施設として活用する具体案としてナレッジ・スクエア構想と大学院大学の設置可能性について発信した。

(平成27年度)

旧学校施設を活用した類似施設の調査として、「三鷹ネットワーク大学」と「IID世田谷ものづくり学校」の視察を行い、地域との親和性、学校施設を使用することの意義、施設運営には多様な主体の積極的な関わりが重要であること等を確認した。

また、学輪IIDA全体会内部討議にて、南信州広域連合を中心に検討してきた旧飯田工業高校利活用構想案「産業振興と地域振興に寄与する学術研究の知の拠点整備構想案」の考え方と、プロジェクト会議にて導き出した「ナレッジ・スクエア構想」の考え方の親和性を確認するとともに、これまでのプロジェクト会議を引き継ぎ、知の拠点形成に向け検討するプロジェクト会議を設置することを確認した。

○知の拠点プロジェクト会議の設立

(第1回プロジェクト会議:平成28年3月5日)

(第2回プロジェクト会議:平成28年10月8日)

旧飯田工業高校施設を活用した知の拠点の形成に向け、学輪IIDAに有志メンバーによる「知の拠点プロジェクト会議」を設立した。

第1回プロジェクト会議では、知の拠点の全体像、知の拠点の機能を高める「共創の場」、地域振興の知の拠点や大学サテライト・研究室のあり方などを中心に意見交換した。またプロジェクト会議として、知の拠点の目指す姿やその実現に向け、引き続き情報等共有しながら検討を進めていくこと、リニア時代を見据えこの地域にどのような知の拠点が必要であり、そこで如何にして魅力を形成し人財を引き寄せる磁力を形成し発信していくかなど、本質的な議論を進めていくことを確認した。

第2回プロジェクト会議では、第1回プロジェクト会議以降の旧飯田工業高校施設の利活用に関する検討経過や、施設所有者である県の方針決定や南信州広域連合の方針内容について説明するとともに、知の拠点の重要な機能を担う共創の場のあり方等について意見交換した。

○共通カリキュラム構築プロジェクト会議の設立

(平成23年10月4日)

飯田に関わってきた大学研究者が有する飯田の価値を集約し、共有化した「モデルカリキュラム」の作成と実践を通じて、飯田を起点とした複数大学による新たな連携モデルを構築することを目的にプロジェクト会議を設置し、共通カリキュラムの基本的な考え方や今後の取組について検討、確認した。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の詳細については、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクトの到達点と課題」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

共通カリキュラム構築プロジェクト会議の主な取組(歩

み)は以下のとおり。

(平成23年度)

●プロジェクトメンバーによるシラバス案の作成と学習会

プロジェクトメンバーが有している飯田の価値、関心事項を取り入れたシラバス案を作成。12月11日～12日にプロジェクト会議を開催し、各教員が作成したシラバス案の確認や学習会を開催する。

今後、シラバス案を元にしたモデルカリキュラムの作成と実践を、複数大学が連携しながら取り組んでいく方向性を確認した。

(平成24年度)

●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、しんきん南信州地域研究所及び市が連携し、大学の専門性と飯田でのフィールドスタディを組み合わせたモデルカリキュラム作成と実践に向け取り組んだ。地域の持続可能性に関する要素、要因を明確化するため、飯田のソーシャルキャピタル(社会関係資本)を可視化し、持続可能な地域づくりとの関係について検証する「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を、総務省の「域学連携」地域づくり実証研究事業の受託事業として実施し、3大学29名の大学研究者や学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「ソーシャルキャピタルを南信州・飯田で学ぶ」(名城大学 福島茂教授)を参照。

(平成25年度)

●地域環境政策フィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、立命館アジア太平洋大学及び市の連携のもと、飯田における環境モデル都市の取組や多様な主体の実施体制を学ぶカリキュラムとして「地域環境政策フィールドスタディ」を実施し、3大学28名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」創刊号における「環境をテーマにしたモデルカリキュラムの作成と実践」(立命館アジア太平洋大学 銭学鵬准教授)を参照。

(平成26年度)

●南信州飯田ニューツーリズムフィールドスタディの実施

立命館大学、名城大学、和歌山大学、東洋大学及び市の連携のもと、農山村再生に資するツーリズムの新たな可能性を探るカリキュラムとして「ニューツーリズムフィールドスタディ」を実施し、4大学37名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第2号における「南信州・飯田ニューツーリズムフィールドスタディ(共通カリキュラム構築プロジェクト)の成果と課題」(和歌山大学 藤田武弘教授)を参照。

(平成27年度)

●南信州ソーシャルキャピタル・フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、飯田における社会関係資本の重層的蓄積を学ぶカリキュラムとして「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ」を実施し、4大学41名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第3号における「ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ2015」(東洋大学 小林正夫教授)を参照。

(平成28年度)

●地域経営論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学及び市の連携のもと、地域経営の概念、地域経営の現状、成果や課題、持続可能な地域の実現に向けた地域経営のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域経営論フィールドスタディ」を実施し、5大学50名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第4号における「『地域経営論フィールドスタディ』の実施報告」(立命館大学 平岡和久教授)を参照。

(平成29年度)

●地域文化論フィールドスタディの実施

立命館大学・名城大学・和歌山大学・東洋大学・静岡文化芸術大学及び市の連携のもと、飯田の人々の地域への愛着や帰属意識を地域文化の観点から明らかにすることを通じて地域活性化を実現するための地域アイデンティティの形成のあり方などを学ぶカリキュラムとして、「地域文化論フィールドスタディ」を実施し、5大学46名の大学研究者と学生が参加した。

詳細は、学輪IIDA機関誌「学輪」第5号における「学輪IIDA共通カリキュラム構築プロジェクト地域文化論フィールドスタディ2017」(静岡文化芸術大学 高島知佐子准教授)を参照。

○学輪インターユニバーシティオープンキャンパスプロジェクト

大学の研究力に期待する社会的な状況がある中、学輪IIDAに参加する大学関係者相互に最先端かつ高度な知見に触れ共有する機会を提供し、学際的な見識やネットワークに寄与する場という学輪の可能性を追求するため、学輪IIDAメンバーの研究者としての専門性と教員としてのスキルを活かした、全世代向けの公開講座の実施を目指す。

(令和元年度)

●プレイベントの実施

将来的な展開を検討するため、試験的に小規模な公開講座(プレオープンキャンパス)を実施した。

講師陣 5名

立教大学ESD研究所所長 阿部 治 教授
法政大学 石神 隆 名誉教授
埼玉大学基盤教育研究センター

七田 麻美子 准教授

宇都宮大学バイオサイエンス教育研究センター

塚原 直樹 特任助教

東京農工大学大学院 土屋 俊幸 教授

(令和2年度)

●飯田学輪大学の実施

地元講師の参加、参加者同士の交流機会となることを目指し、12講座を実施した。

講師陣 13名

津田塾大学 伊藤 由希子 教授

国立天文台 大石 雅寿 特任教授

津田塾大学 大島 幸 客員研究員

京都外国語大学 影浦 亮平 講師

飯田市美術博物館 四方 圭一郎 学芸員

法政大学 高柳俊男 教授

宇都宮大学 塚原 直樹 特任助教

法政大学 西澤 栄一郎 教授

飯田市歴史研究所 羽田 真也 研究員

東京農工大学 堀尾 正靱 名誉教授

国土舘大学 堀口 朋亨 准教授

飯田市美術博物館 楨村 洋介 学芸員

国立長寿医療研究センター 宮國 康弘 研究員

(令和3年度)

●飯田学輪大学の実施

学輪IIDAの取組展開報告、地元講師の参加、参加者同士の交流機会となることを目指し、10講座を実施した。

講師陣 7名、4団体

学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会

－立命館大学 平岡 和久 教授

－日本福祉大学 宮國 康弘 講師

－大阪商業大学 藤井 至 専任講師

－松本大学 田開 寛太郎 専任講師

立教大学ESD研究所

－立教大学 阿部 治 名誉教授

－麻布大学 小玉 敏也 教授

－鶴見大学短期大学部 増田 直広 講師

飯田市公民館 秦野 高彦 副館長

飯田市美術博物館 近藤 大知 学芸員

法政大学 西澤 栄一郎 教授

東京農工大学 堀尾 正靱 名誉教授

飯田市歴史研究所 福村 任生 研究員

飯田市美術博物館 織田 顕行 学芸員

東洋大学 樋口 貴彦 助教

学輪IIDAプロジェクトみらい

－津田塾大学のみなさん

－明治大学建築・アーバンデザイン研究室のみなさん

－飯田女子高校のみなさん

(令和4年度)

●飯田学輪大学の実施

学輪IIDAの取組展開報告、地元講師の参加、参加者同士の交流機会となることを目指し、10講座を実施した。

講師陣 13名

国土舘大学 堀口 朋亨 教授

千葉商科大学 影浦 亮平 准教授

専修大学 河藤 佳彦 教授

東京農工大学 大倉 茂 講師

松本大学 田開 寛太郎 専任講師

松本大学田開ゼミのみなさん

長野県考古学会 小林 正春 氏

飯田市美術博物館 川谷 文子 学芸員

飯田市美術博物館 加納 向日葵 学芸員

飯田市美術博物館 坂本 正夫 客員研究員

飯田市歴史研究所 田中 雅孝 研究員

○プロジェクトみらい

地域課題に向き合う飯田の高校生や、大学生等からの実践発表により、グローバルな視点でポスト2020の地域（日本）を考えることを目的として、学輪IIDA 10周年記念「地方発 若者の未来を考えるシンポジウム」の実施を目指す。

4 学輪IIDA共通カリキュラム実行委員会の設立

(平成30年度)

実行委員会は、飯田の価値の発見・共有化することで、飯田における研究や教育のコアを確認し、学びの体系化・「見える化」を進めることで、飯田や学輪IIDAの磁力を高め、新たな域学連携、大学間連携を通じて、地域と大学が共に学び合う場づくりや、高校と大学の有機的な連携の在り方の検討や実践的な展開等により、学輪IIDAのコンセプトである「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」へ繋げることを目指す。

取組の柱

「共通カリキュラムの本格的な展開」

「高校と大学の連携した取組の展開」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・

下伊那農業高校・飯田女子高校・飯田風越高校

大学生57名 高校生5名

(外 一部参加高校生18名)

②地域経済フィールドスタディ 2018

大月短期大学・静岡文化芸術大学・立命館大学

大学44名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2018

京都外国語大学・東京農工大学大学院・
松本大学・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校
大学生・院生11名 高校生8名 教員9名)
ソーシャルキャピタルフィールドスタディ及び遠山郷エ
コ・ジオパークフィールドスタディは、飯田の高校生も参
加し、地域の学びを通じて大学生の学びを体感する機会と
なった。

(令和元年度)

「高校と大学の連携した取組の本格的展開」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

首都大学東京・同志社大学・東洋大学・
名城大学・立命館大学・飯田高校・
飯田女子高校・飯田風越高校・下伊那農業高校
大学生30名 高校生15名 教員7名
(外 一部参加高校生19名)

②アグリイノベーションフィールドスタディ

大月短期大学・立命館大学・和歌山大学・
飯田高校・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校・
下伊那農業高校
大学生53名 高校生24名 教員13名
(外 一部参加高校生1名)

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2019

東京農工大学・松本大学・飯田OIDE長姫高校・
飯田女子高校・飯田風越高校
大学生・院生11名 高校生13名 教員7名

(令和2年度)

「オンラインを活用した試行的取組」

①飯田の地域づくりに学ぶオンラインフィールドスタディ

飯田の取組を幅広く切り取るため、「地域自治」「着地
型観光」「地域経済」の3コースを設定し実施した。

「新たな学びの形」の試行的取組として、大学生全員
がオンライン参加で実施した。

大月短期大学・東洋大学・名城大学・
立命館大学・和歌山大学
大学生51名 教員10名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2020

オンライン参加の大学生と実際に現地調査も行う高校生
によるハイブリッド型の取組として実施した。

麻布大学・東京農工大学・松本大学・
飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校
大学生・院生12名 高校生11名 教員8名

(令和3年度)

「高校と大学が連携し、オンラインを活用した取組」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

大阪商業大学・東京都立大学・東洋大学・
名城大学・立命館大学・和歌山大学・飯田高校・
飯田風越高校・下伊那農業高校・飯田女子高校

大学生32名 高校生8名 教員7名
(外 一部参加高校生19名)

②地域経済フィールドスタディ

大月短期大学・大正大学・東洋大学・法政大学・
立命館大学・飯田OIDE長姫高校・
下伊那農業高校・飯田女子高校
大学生57名 高校生8名 教員5名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2021

麻布大学・帝京科学大学・東京農工大学・
松本大学・飯田高校・下伊那農業高校・
飯田女子高校
大学生・院生13名 高校生19名 教員7名

(令和4年度)

「高校と大学が連携し、オンラインを活用した
ハイブリッド形式の取組」

①多様性社会+ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

東洋大学・名城大学・立命館大学・和歌山大学・
飯田高校・飯田風越高校・飯田OIDE長姫高校・
下伊那農業高校・飯田女子高校
大学生42名 高校生26名 教員6名

②地域経済フィールドスタディ

大月短期大学・大阪商業大学・京都外国語大学・
大正大学・和歌山大学・飯田風越高校・
飯田OIDE長姫高校・下伊那農業高校・
飯田女子高校
大学生52名 高校生9名 教員7名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2022

麻布大学・東京農工大学・松本大学・
下伊那農業高校
大学生12名 高校生5名 教員5名

(令和5年度)

「高校と大学が連携し、オンラインを活用した
ハイブリッド形式の取組」

①ソーシャルキャピタルフィールドスタディ

大阪商業大学・東京都立大学・東洋大学・名城大学・
立命館大学・飯田高校・飯田風越高校・下伊那農業高
校・飯田女子高校
大学生19名 高校生9名 教員5名

②地域経済フィールドスタディ

大月短期大学・大正大学・東洋大学・立命館大学・和
歌山大学・飯田OIDE長姫高校・飯田女子高校
大学生59名 高校生9名 教員6名

③遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ 2023

麻布大学・国立天文台・鶴見大学短期大学部・都留文
科大学・東京農工大学・松本大学・下伊那農業高校・
阿南高校
大学生12名 高校生6名 教員等15名

5 学輪IIDAスペシャルシンポジウム

シリーズ『いいだの未来デザインを考える』

～ after/with コロナ時代における地方の

パラダイムシフトと創生 ～

大学連携会議「学輪IIDA」の専門性やネットワークを最大限に活かし、コロナ時代のパラダイムシフトをどのように捉え、新たな方向に向かっていくべきか、リニア時代を見据えた飯田の未来について考えるシンポジウムを全3回シリーズで開催した。

●第1回（令和2年8月24日）

「コロナで始まる（変わる）新しい時代を模索する」

[議論にあたって]

法政大学 名誉教授 石神 隆 氏

（いいだ未来デザイン会議委員）

[ディスカッション]

コーディネーター：

信州大学 特任教授 中嶋 聞多 氏

パネリスト：NTTデータ経営研究所

取締役 唐木 重典 氏

京都大学大学院

教授 諸富 徹 氏

ドイツ日本研究所

所長 Franz Waldenberger 氏

（公財）南信州・飯田産業センター

専務理事 萩本 範文 氏

●第2回（令和2年9月3日）

「飯田だから実現できる未来戦略

～つながりと交流の先に～」

コーディネーター：

日本経済研究所 常務理事 大西 達也 氏

（いいだ未来デザイン会議委員）

パネリスト：

愛知大学 教授 戸田 敏行 氏

金沢工業大学 客員教授 竹内 宏彰 氏

東京大学大学院 教授 牧野 篤 氏

和歌山大学 教授 尾久土 正己 氏

●第3回（令和2年9月14日）

「飯田だから実現できる未来戦略

～持続可能で豊かな地域へのデザイン～」

コーディネーター：

法政大学 名誉教授 石神 隆 氏

（いいだ未来デザイン会議委員）

パネリスト

立教大学 教授 阿部 治 氏

法政大学 教授 高柳 俊男 氏

東京都立大学 教授 大杉 覚 氏

事業構想大学院大学 教授 渡邊 信彦 氏

農山漁村文化協会 中田 めぐみ 氏

しんきん南信州地域研究所

主席研究員 竹内 文人 氏

6 学輪IIDAウェブサイトの開設

（平成24年6月）

飯田市や学輪IIDAに参加している大学・研究者間の情報共有や、学輪IIDAの取組に関する情報発信を目的に、学輪IIDAウェブサイトを開設した。

ウェブサイトのURL：<https://gakurin-iida.jpn.org/>

7 学輪IIDA機関誌「学輪」の発刊

学輪IIDAの取組や大学研究者などの飯田における教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、その実績をより多くの方に知ってもらうことを目的に、平成26年度より機関誌「学輪」を毎年1回発刊する。

8 大学等の受入状況について

南信州・飯田フィールドスタディなどを通じて、当市に教育・研究・調査等で訪れた大学研究者や学生数

年度	大学数	参加者数
平成20年度	14	176
平成21年度	15	120
平成22年度	16	299
平成23年度	17	422
平成24年度	16	558
平成25年度	27	759
平成26年度	24	956
平成27年度	30	768
平成28年度	35	634
平成29年度	46	648
平成30年度	44	713
令和元年度	52	695
令和2年度	45	526
令和3年度	37	664
令和4年度	46	682
合計	464	8,620

※参加者数は延べ人数

大学連携会議「学輪IIDA」名簿

(敬称略 R5.12.25現在)

	氏名	大学機関等名・学部
1	新井野 洋一	愛知大学、日本スポーツ産業学会
2	岩崎 正弥	愛知大学
3	黍嶋 久好	愛知大学
4	戸田 敏行	愛知大学
5	小玉 敏也	麻布大学
6	黒岩 長造	飯田短期大学
7	北林 ちなみ	飯田短期大学
8	武分 祥子	飯田短期大学
9	新海 シズ	飯田短期大学
10	青木 千恵美	飯田短期大学
11	兼子 純	愛媛大学
12	大串 恵太	追手門学院大学
13	藤田 武弘	追手門学院大学
14	小畑 力人	大阪観光大学
15	若生 謙二	大阪芸術大学
16	藤井 至	大阪商業大学
17	青木 伸一	大阪大学
18	土井 健司	大阪大学
19	榎平 龍宏	大月短期大学
20	七田 麻美子	オープンサイエンスギルド、埼玉大学
21	菊地 浩平	オープンサイエンスギルド、筑波技術大学
22	塚原 直樹	オープンサイエンスギルド、宇都宮大学
23	竹内 宏彰	金沢工業大学
24	野間 晴雄	関西大学
25	草郷 孝好	関西大学
26	西尾 恵理子	九州共立大学
27	尾上 百合加	九州共立大学
28	廣岡 裕一	前京都外国語大学
29	中嶋 大輔	京都外国語大学
30	枝元 益祐	京都外国語大学
31	宮口 貴彰	京都外国語大学
32	村山 弘太郎	京都外国語大学
33	宮木 いっぺい	京都産業大学
34	松崎 行代	京都女子大学
35	諸富 徹	京都大学
36	堀口 朋亨	国士館大学
37	木村 暁	国立遺伝学研究所
38	大石 雅寿	国立天文台
39	中嶋 智子	佐久大学
40	中村 聡志	山陽学園大学
41	渡邊 信彦	事業構想大学院大学
42	高島 知佐子	静岡文化芸術大学
43	増田 幸宏	芝浦工業大学
44	飯島 真里子	上智大学
45	銭 学鵬	上智大学大学院
46	田中 清	信州大学
47	脇若 弘之	信州大学
48	柳原 正明	信州大学
49	佐々木 邦博	信州大学
50	中嶋 聞多	信州大学
51	上野山 裕士	摂南大学
52	河藤 佳彦	専修大学
53	下畑 浩二	相愛大学
54	西山 巨章	大正大学
55	大橋 重子	大正大学
56	片岡 美喜	高崎経済大学
57	村山 にな	玉川大学
58	影浦 亮平	千葉商科大学
59	仲川 直毅	中京学院大学
60	林 良嗣	中部大学
61	福井 弘道	中部大学
62	杉田 暁	中部大学
63	原 理史	中部大学
64	山下 亜紀郎	筑波大学
65	呉羽 正昭	筑波大学
66	伊藤 由希子	津田塾大学
67	大島 幸	津田塾大学
68	曾根原 登	津田塾大学
69	秦 範子	都留文科大学
70	増田 直広	鶴見大学短期大学部
71	Franz Waldenberger	ドイツ日本研究所
72	Isaac Gagné	ドイツ日本研究所
73	Jentzsch Hanno	ウィーン大学

	氏名	大学機関等名・学部
74	儀間 敏彦	東海大学
75	牧野 篤	東京大学
76	新藤 浩伸	東京大学
77	李 正蓮 (イ・ジョンヨン)	東京大学
78	瀬田 史彦	東京大学
79	大杉 寛	東京都立大学
80	寺内 光宏	東京農業大学
81	千賀 裕太郎	東京農工大学
82	土屋 俊幸	東京農工大学
83	朝岡 幸彦	東京農工大学
84	榎本 弘行	東京農工大学
85	澤 佳成	東京農工大学
86	竹本 太郎	東京農工大学
87	堀尾 正毅	東京農工大学
88	大倉 茂	東京農工大学
89	林 丈雄	東京農工大学
90	井口 貢	同志社大学
91	多田 実	同志社大学
92	有井 健	同志社大学
93	小林 正夫	東洋大学
94	佐々木 茂	東洋大学
95	澤田 俊明	徳島大学
96	蜂谷 充志	常葉大学
97	大貝 彰	豊橋技術科学大学
98	井上 隆信	豊橋技術科学大学
99	松島 史朗	豊橋技術科学大学
100	浅野 純一郎	豊橋技術科学大学
101	中川 亮平	長野県立大学
102	加藤 博和	名古屋大学
103	中村 英樹	名古屋大学
104	エマニュエル・レレイト	名古屋大学
105	大濱 裕	日本福祉大学
106	江原 隆宜	日本福祉大学
107	宮國 康弘	日本福祉大学
108	重谷 陽一	阪南大学
109	大塚 理加	国立研究開発法人防災科学技術研究所
110	高柳 俊男	法政大学
111	曾 士才	法政大学
112	大西 亮	法政大学
113	小門 裕幸	法政大学
114	酒井 理	法政大学
115	石神 隆	法政大学
116	西澤 栄一郎	法政大学
117	関司 直也	法政大学
118	辛島 一樹	前橋工科大学
119	白戸 洋	松本大学
120	田開 寛太郎	松本大学
121	江成 穰	松山大学
122	劉 一辰	明海大学
123	竹本 田持	明治大学
124	小川 智由	明治大学
125	水野 勝之	明治大学
126	大友 純	明治大学
127	佐々木 宏幸	明治大学
128	頼 俊輔	明治学院大学
129	福島 茂	名城大学
130	井内 尚樹	名城大学
131	蘭 信三	大和大学
132	阿部 治	立教大学
133	野田 健太郎	立教大学
134	井出 万秀	立教大学
135	廣江 彰	立教大学
136	JONES Thomas Edward	立命館アジア太平洋大学
137	須藤 智徳	立命館アジア太平洋大学
138	李 燕	立命館アジア太平洋大学
139	森 裕之	立命館大学
140	平岡 和久	立命館大学
141	佐藤 龍子	龍谷大学
142	尾久土 正己	和歌山大学
143	大浦 由美	和歌山大学
144	岸上 光克	和歌山大学
145	山本 由美	和光大学
146	早田 宰	早稲田大学

※上記のほかオブザーバー参加の大学研究者もいらっしゃいます

学輪IIDA 機関誌「学輪」

—投稿規程—

制定 平成26年4月1日

改定 平成27年4月1日

1. 掲載論文の原則

- (1) 掲載原稿は、依頼原稿と投稿原稿に分けられる。
- (2) 投稿原稿の категорияは、原則として「論文」「論説」「研究ノート」「調査報告」「講演記録」「その他」とし、依頼原稿においては、編集委員会において適当なカテゴリ設定をできる。また、投稿原稿については、上記の категорияでは適応できないと判断できるものについては、執筆者と編集委員会において適切なカテゴリの設定をできる。
- (3) 掲載原稿は、日本語によるものとする。但し、事前に編集委員会が認めたものはこの限りではない。
- (4) 依頼原稿は、編集委員会における編集方針のもと編集局より依頼する。
- (5) 投稿原稿「論文」については、査読に付す。「論文」以外の categoriaの投稿原稿については、編集委員会が必要と認める場合は査読に付す。
- (6) 執筆要領については別途定める。
- (7) 原稿の掲載について判断は編集委員会で行う。
- (8) 依頼原稿については、掲載ページ1頁につき1500円 の原稿料を支払う。
- (9) 査読については、1原稿5000円の査読料を支払う。
- (10) 事務局が特約を締結した場合を除いて、掲載原稿の著作権は学輪IIDAに帰属する。但し、執筆者自身は、当該原稿について自由に利用できる。なお、その場合、利用箇所、掲載し、発行年月等を速やかに事務局に報告しなければならない。

2. 投稿の条件

- (1) 学輪IIDA のコンセプトに合致した内容であること
- (2) 原稿は未発表のものに限る。但し、既掲載であっても編集委員会もそれを認め、現掲載箇所を示した場合はその限りではない。
- (3) 投稿原稿は、学輪IIDAの構成員又はその指導する大学院生若しくは大学院修了者によるものとする。共著の場合は、筆頭著者が当該要件を満たす必要がある。
- (4) 学輪IIDA の構成員の指導する大学院生又は大学院修了者が投稿する場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。当該指導教員は、その承認を与えるに当たり、本紀要の掲載に耐えられる内容

であることを確認しなければならない。

3. 投稿原稿の内容

飯田市における取り組みに関する研究の成果及び特定の地域・資料等の調査結果に関する報告、又は上記以外で、「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」という学輪IIDAコンセプトの推進に寄与するもの。

4. 投稿原稿の採否

投稿原稿は、編集委員会が必要と認める場合は査読に付す。査読実施の要領については以下に示す通りである。

- (1) 査読は、2名で行う。査読者は編集委員会における協議の上、編集局より依頼する。なお、査読者のうち最低1名は学輪IIDAの構成員とし、学輪IIDAの構成員以外のものに査読を依頼する場合は、編集委員会は学輪IIDAの趣旨及び査読要領を理解できる者を選任することとし、編集局は査読者に対してその旨周知する。
- (2) 査読者は、次の点に留意して査読をする。
 - 1) 原稿条件に合致しているかどうか
 - 2) 誤字、脱字がないかどうか
 - 3) 他の文献等からの無断引用、剽窃、出典の不記載など著作権をしていないかどうか
 - 4) 執筆要領に反していないかどうか
 - 5) 著しく論理性を欠くなど掲載に耐えられないものではないかどうか
 - 6) 査読者との見解の相違や新規性のある着眼点であったり、提言、発想等であることにより成熟性が欠けることを理由に、当該原稿を否定したり、新たな展開の可能性の芽を摘んでいないかどうか
- (3) 査読者は、投稿原稿につき、「掲載」、「修正後掲載」、「改稿後掲載」、「不掲載」の判断を編集局に通知する。また、査読者は「修正後掲載」の場合その箇所を、「改稿後掲載」の場合はその理由及び改稿のための指針、「不掲載」の場合はその理由を付して通知しなければならない。編集局はその結果を執筆者に通知する。なお、「掲載」はそのまま掲載を可能し、「修正後掲載」は、修正箇所が修正されているかを編集局で確認の上掲載する。この場合この時点で「掲載」と判断されてものとする。また、「改稿後掲載」については再度査読に付す。
- (4) 2名の査読者のうち1名が「掲載」と判断した場合は、掲載を認めるものとする。但し、執筆者においては、他の判断の理由を考慮してその範囲において一部変更することを可能とする。
- (5) 上記にかかわらず「掲載」が認められない場合は、執筆者は編集委員会に異議申し立てをすることができる。但し、学輪IIDAの構成員の指導する大学院生又は

大学院修了者が異議申し立てをする場合、学輪IIDAの構成員たる指導教員の承認を得なければならない。

(6) 前項の場合、編集委員会は、査読者及び執筆者の主張を考慮して、掲載についての判断を行う。なお、必要な場合は、対質の場を設定することができる。

(7) 査読者は匿名とするが、前項の対質を行う場合は、この限りではない。

5. 投稿手続き

投稿者は、正本1部、副本2部、および電子データを本学会編集委員会宛に提出する。

6. 経費負担

投稿料は徴収しない。ただし、刷り上がり頁数が執筆要領に記した上限頁数を超えた場合には、1頁あたり3,000円の超過料金を請求することがある。また、図版の作成し直しや特殊な印刷を必要とする場合、著者に実費を請求する。

7. 校正

著者校正を原則とする。必要に応じて編集委員会が校正を行う場合がある。

8. 抜刷

50部は無償配布する。それ以上必要な場合は、実費請求する。

学輪IIDA 機関誌「学輪」 —執筆要領—

制定 平成26年4月1日

1. 原稿の構成と書式

投稿する原稿の執筆に当たっては、原則としてワープロまたはパソコンを用いて作成すること。

また、原稿はA4用紙を用い、表紙・本文・注・参考文献・図表・要旨で構成する。各構成要素の書式は以下のとおりである。

- (1) 表紙：表題・著者名・所属（原則1つ。ただし編集委員会が認めた場合はこの限りでない）・キーワード（5つ以内）を日本語と英語で記載する。書評については、キーワードのかわりに対象論文、書籍の書誌情報を原著の言語で記載すること。また、投稿原稿の種別についても明記すること。
- (2) 本文：日本語の場合、横書きで1頁あたり40行×40字で印刷する。外国語の場合はこれに準じた分量で印刷すること。
- (3) 注：番号順に掲載し、本文中の該当箇所に番号を付すこと。使用しない場合は省略することができる。
- (4) 参考文献：書籍の場合は「著者名・署名・出版社名・発行年」、論文の場合は「著者名・論文名・雑誌名・巻号・頁・発行年」に関する情報を必ず記載し、アルファベット順に並べて掲載すること。ただし、文献の挙示は著者の採用する方式に準拠するものとする。使用しない場合は省略することができる。
- (5) 図表：本文中に出てくる順に、注とは別に番号を付与し、本文中の該当箇所にあらかじめ表示するか、該当箇所を指示すること。ただし、図と表の両方を使用する場合は、それぞれで番号を別に付与すること。使用しない場合は省略することができる。
- (6) 要旨：日本語の場合は400字以内、外国語の場合はこれに準じた分量とする。

2. 原稿の分量

刷り上がり頁数で、10頁を上限頁とする。1頁の刷り上がりは26字×47行×2段（2,444字）である。この長さを超えるものでも、編集委員会が必要と認めた場合は、掲載することがある。ただし、上限頁を超えた場合には、投稿規程に従った超過料金を請求することがある。

[執筆者一覧] (掲載順)

宮國 康弘 (日本福祉大学社会福祉学部)
藤田 武弘 (追手門学院大学地域創造学部)
藤井 優希 (和歌山県紀美野町・地域おこし協力隊)
高柳 俊男 (法政大学国際文化学部)

[通信欄]

学輪IIDA機関誌「学輪」は、2014年度に学輪IIDAメンバーの発意により創刊されて以来、学輪IIDAの取り組みや大学・研究者等の飯田市における教育・研究活動の実績及び成果を蓄積するとともに、その内容を広く発信し、より多くの方に知ってもらうことを目的に発刊を重ねてまいりました。

第11号の発刊にあたり、ご投稿いただいた方をはじめ、ご協力をいただいた多くの関係者の皆様にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

今後も、全国から飯田に集う学輪IIDAのネットワークの広がりとともに、機関誌「学輪」の発行を通して、関連するさまざまな知見が蓄積されるよう取り組んでまいりますので、今後も積極的な投稿をよろしくお願いいたします。

[編集委員]

平岡 和久 (立命館大学政策科学部)
福島 茂 (名城大学都市情報学部)
小林 正夫 (東洋大学社会学部)
廣岡 裕一 (前京都外国語大学)
上野山裕士 (摂南大学現代社会学部)
藤田 武弘 (追手門学院大学地域創造学部)
藤井 至 (大阪商業大学経済学部)

[編集局]

編集局長 藤田 武弘
編集局 藤井 至

[事務局]

飯田市 企画部 大学誘致連携推進室

大学連携会議「学輪IIDA」

機関誌「学輪」

第11号 2023

(年1回発行) 2024年3月発行

●
発行

飯 田 市

〒395-8501 飯田市大久保町2534番地

0265-22-4511

<https://www.city.iida.lg.jp>

●
印刷所

龍共印刷株式会社
